

基礎的醫學		齒科基礎醫學														
病理學	生理學	生理學	解剖學	醫學								醫事法制				
				齒牙比較解剖學	齒牙組織學	齒牙解剖學	局所解剖學	胎生學	同	系統組織學	同	系統解剖學	系統解剖學	法制大意及醫事法規		
各論講義	實義	講義	實義	同實習	齒牙比較解剖學講義	齒牙組織學講義	齒牙解剖學講義	局所解剖學講義	胎生學講義	同實習	系統組織學講義	同實習	系統解剖學講義	系統解剖學講義	法制大意及醫事法規講義	
				(2) 四												
				二												
				(5) 二	(4) 二					(2) 三			四	一		
											(5) 三				一	
(2) 二																

醫學基礎																			
皮膚科學	耳鼻喉科學	內科診斷學	外科學	法醫學	衛生學	細菌學				藥理學	同	口腔病理學	病理解剖示說						
						同	同	同	同										
臨牀講義	臨牀講義	臨牀實習	臨牀講義	總論講義	講義	口腔衛生學講義	一般衛生學講義	同實習	同	同	口腔細菌學講義	同實習	一般細菌學講義	同實習	藥理學	同	口腔病理學講義	病理解剖示說	
(4) 一	(4) 二																		



臨	商																
	基礎學																
	物理學的基礎學																
講義	同模	充填	治療	實習	彫刻	鑄造	器械	齒科材料	陶材料	金屬冶金	化學		物理學		理學的療法學		
											實	講	實	講	實	講	
				(2)六		四											
										(5)二		一		一			
													(4)一				
	(2)二																
二	(2)四	二		(5)二													
三																	
																	一
																	(5)二

計	醫學																
	齒科																
	體操	患者臨牀實習	模型實習	臨牀講義	同模	同模	齒冠架橋學講義	同模	同模	有床補綴學講義	齒科外科學		外科的補綴學模型實習	臨牀講義	矯正學	講義	講義
講											義						
四五	二																
四五	二							(2)四	二								
四七	二				(2)五	二	(2)五	二									
四七	二				(2)三	二	(2)四	二					二				
四八	二				(2)四	三	(2)七	三					四				
四八	二	一〇	(2)二	(5)二			(5)三		(5)三			(2)三	(2)二				
四八	二	二八		(5)二			(5)二		(5)三								
四八	二	三七															



備考 日本數字ハ一週間時間數ヲ、括弧内ノ算用數字ハ一學級ヲ分チタル組數ヲ表ハス

教授上特別ノ必要アルトキハ學科目又ハ其ノ教授時數ノ配當ヲ變更シ或ハ教授定時間外若ハ休業期間ニ於テ臨時講演ヲ聽カシメ又ハ實習ヲ課スルコトヲ得

第三條 卒業者ニシテ既修ノ學科目ニ付更ニ研究セントスル者アルトキハ學校長ハ必要ト認メタルトキニ限り二年以內學校ニ於テ研究ニ従事スルコトヲ許可スルコトヲ得

附則

本令ハ昭和四年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

官立の醫藥專門學校の外專門學校令に依る專門學校たる公私立の醫學校藥學校に就て述べると、公立專門學校としては、

熊本縣立醫學專門學校(熊本縣)が大正十年一月に設立を認可せられた。これは既設の私立醫學專門學校を縣立に引直したのである。

岐阜市立岐阜藥學專門學校(岐阜市)が大正六年九月に設立を認可せられた。

私立專門學校としては、

財團法人東洋齒科醫學專門學校(東京市)が大正九年三月に、財團法人九州齒科醫學專門學校(福岡市)が大正十年七月

に、財團法人明華女子齒科醫學專門學校(東京市)が大正十年十二月に、日本大學齒科醫學專門部(東京市)が大正十一年三月に、財團法人東京女子齒科醫學專門學校(東京市)が大正十一年七月に、財團法人明治藥學專門學校(東京市)が大正十二年三月に、道修女子藥學專門學校(大阪府)が大正十四年一月に、帝國女子醫學專門學校(東京府)及日本大學醫學專門部(東京市)が大正十四年三月に、大阪高等醫學專門學校(大阪府)が昭和二年三月に、聖路加女子專門學校(東京市)が昭和二年十一月に、岩手醫學專門學校(岩手縣)及九州醫學專門學校(久留米市)が昭和三年二月に、昭和醫學專門學校(東京市)が昭和三年三月に、大阪女子高等醫學專門學校(大阪府)が昭和三年七月に、共立女子藥學專門學校(東京市)、東京女子藥學專門學校(東京府)及昭和女子藥學專門學校(東京府)が昭和五年十一月に、東京藥學專門學校女子部(東京市)が昭和六年二月に、神戸女子藥學專門學校(神戸市)が昭和七年三月に何れも設立を認可せられた。

尙ほこれは正式の醫學教育でもなく、又其程度より見ても嚴正の意味に於ける専門教育でもないものであるが、醫師の實務と密接の關係ある産婆及看護婦の養成に就ていふと、産婆に關しては此期に於て別に述べべきことはない。

看護婦に關しては、

大正十一年九月一日内務省令第二十三號を以て左の如く看護婦規則中に改正が行はれた。

大正四年<sup>六</sup>内務省令第九號看護婦規則中左ノ通改正ス

第二條第一項ニ左ノ二號ヲ加フ

第七章 大正九年世界大戰直後より昭和七年末に至るまで



三 大正五年<sup>四</sup>關東都督府令第十六號看護婦規則第二條第二號又ハ第三號ノ資格ニ依リ關東長官ノ免許ヲ受ケタル者

四 大正十一年<sup>五</sup>朝鮮總督府令第七十六號看護婦規則第一條第一號乃至第三號ノ資格ニ依リ道知事ノ免許ヲ受ケタル者

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

大正十四年八月二十四日內務省令第十四號を以て左の如く看護婦規則中に改正が行はれた。

大正四年<sup>六</sup>內務省令第九號看護婦規則中左ノ通改正ス

第二條第一項中左ノ通改正ス

三 大正五年<sup>四</sup>關東都督府令第十六號看護婦規則第二條第一號又ハ第二號ノ資格ヲ有スル者

四 大正十一年<sup>五</sup>朝鮮總督府令第七十六號看護婦規則第一條第一號乃至第三號ノ資格ヲ有スル者

五 大正十二年<sup>十二</sup>樺太廳令第五十六號看護婦規則第二條第一號又ハ第二號ノ資格ヲ有スル者

六 大正十三年<sup>二</sup>臺灣總督府令第十八號看護婦規則第二條第一號乃至第三號ノ資格ヲ有スル者

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

第四項 理學に關する專門學校

大正十一年九月二十六日勅令第四百十二號を以て氣象臺官制中に改正が行はれ、第十三條 中央氣象臺ニ附屬測候技術官養成所ヲ置キ測候技術官又ハ測候技術官タルヘキ者ニ必要ナル學藝技術ヲ授ク

測候技術官養成所ニ主事一人ヲ置ク氣象臺技師ノ中ヨリ文部大臣之ヲ補ス  
主事ハ中央氣象臺長監督ノ下ニ於テ測候技術官養成所ノ事務ヲ掌ル

といふ規定が加へられて官立の理學專門學校が設けらるることとなつた。(抄)

右の規定に先ち大正十一年八月三日文部省告示第五百十一號を以て左の如く測候技術官養成所規程が定められた。右規定に依る高等科は其程度より見て純然たる專門學校であるが普通科は專門學校といふべきものではなかつた。右測候技術官養成所規程左ノ通定ム

測候技術官養成所規程

第一條 測候技術官養成所ハ氣象臺及測候所ノ技師、技手タルヘキ者ニ必要ナル學術ヲ教授スル所トス

第二條 本所ニ普通科、高等科及講習科並別科ヲ置ク

第三條 各科ノ學科目左ノ如シ

普通科

數學、物理學、化學、氣象學、地震學、天文學、測量及地理、物理實驗、氣象實習、天體觀測、法制及經濟、外國語

高等科

第七章

大正九年世界大戰直後より昭和七年末に至るまで



數學、物理學、化學、地球物理學一般、氣象學、應用氣象學、地震學、海洋學、天文學、器械及觀測法、測量及製圖、物理實驗、氣象實習、地球物理學演習、天體觀測、法制及經濟、外國語

講習科並別科ノ學科目ハ中央氣象臺長別ニ之ヲ定ム

普通科

學科 目	學年		時數	學期	學年	時數	學期	學年	時數
	第一	第二							
數學			一〇			八			
物理學			八			四			
化學			三			三			
氣象學			五			六			
地震學						二			
天文學						二			
測量及地理						二			
物理實驗						二			
氣象實習						二			
合計									
天體觀測									一回
法制及經濟									二
外國語									二
計講義									三一
實驗又ハ實習									二回
合計									七回

高等科

學科 目	學年		時數	學期	學年	時數	學期	學年	時數
	第一	第二							
數學			五			五			
物理學			四			四			
化學			二			二			
地球物理學一般			二			二			
氣象學			二			二			
應用氣象學						四			
地震學						三			
海洋學						二			
合計									
計講義									三〇
實驗又ハ實習									二回
合計									七回

第七章 大正九年世界大戰直後より昭和七年末に至るまで



天文學	二	二	二	二	二	二	二	二	二
器械及觀測法	三	三							
測量及製圖	四	四							
物理實驗	二回	二回							
氣象實習									
地球物理學演習									
天體觀測				習					
法制及經濟									
外國語	三	三							
計	二七	二七	二六	二六	二六	二五	二五	二五	二五
講義	二回	二回	四回	四回	四回	四回	五回	五回	五回
實驗又ハ實習									

第五條 本所ノ修業年限ハ普通科ニ在リテハ一年、高等科ニ在リテハ二年トス但シ時宜ニ依リ此ノ期限ヲ變更スルコトアルヘシ

講習科及別科ニ就キテハ中央氣象臺長別ニ之ヲ定ム

第六條 本所ニ入學スルコトヲ得ル者ハ左記各號ノ資格ヲ具フルコトヲ要ス

普通科

一 年齢滿十四歳以上ニシテ現ニ氣象臺、測候所又ハ觀測所ニ在職シ當該部長ノ依托シタル者

二 品行方正、身體健全、身元確實ナル者

三 入學試験ニ合格シタル者

高等科

一 年齢滿十七歳以上滿二十五歳以下ニシテ中學校ヲ卒業シタル者、專門學校入學者檢定規程ニ依リ試験檢定ニ合格シタル者若ハ專門學校入學者檢定規程第八條第一號ニ依リ專門學校入學ニ關シ文部大臣ノ指定ヲ受ケタル者又ハ現ニ氣象臺技手若ハ測候技手トシテ在職スル者

二 品行方正、身體健全、身元確實ナル者

三 入學試験ニ合格シタル者

第七條 本所ノ生徒ニハ修學中手當ヲ給ス其ノ額ハ普通科ニ在リテハ月二十圓以内、高等科ニ在リテハ月三十五圓以内トス

前項ノ外修學ニ必要ナル物品ヲ給與スルコトアルヘシ

第八條 本所ノ生徒ニシテ普通科ノ者ハ卒業後滿二年間各其ノ所屬ノ氣象臺、測候所又ハ觀測所ニ在職スヘキ義務アルモノトス高等科ノ者ハ卒業後滿五年間中央氣象臺長指定ノ地ニ就職スヘキ義務アルモノトス

第九條 本所ノ生徒ニシテ退職ヲ命セラレタル者又ハ自己ノ便宜ニ依リ退學シ若ハ卒業後第八條ノ義務ヲ果ササル者ニハ疾病又ハ止ムヲ得サル事故ニ因ル者ト認ムル場合ヲ除クノ外修學中ニ給與シタル手當並教育費ニ相當スル金額ヲ一時ニ償還セシム但シ普通科卒業生カ其ノ所屬外ノ氣象臺、測候所又ハ觀測所ニ轉勤シテ氣象事業ニ従事スル場合ハ此ノ限ニ在ラス

第七章 大正九年世界大戰直後より昭和七年末に至るまで



前項ニ依リ償還セシムル教育費ノ額ハ其ノ實費ヲ參酌シ中央氣象臺長之ヲ定ム  
第十條 前各條ノ外必要ナル規則ハ中央氣象臺長別ニ之ヲ定ム

附 則

明治四十一年以降大正十年迄ノ間ニ於テ試驗ヲ經テ中央氣象臺練習生トナリ其ノ業ヲ卒ヘタル者ハ試驗ノ上第二學年ニ編入スルコトアルヘシ

大正十三年十月十八日 文部省令第二十四號を以て左の如く測候技術官養成所規程が定められた。  
測候技術官養成所規程左ノ通定ム

測候技術官養成所規程

第一條 測候技術官養成所ハ專門學校令ニ依リ測候技術官タルニ必要ナル高等ノ學術技藝ヲ教授スルヲ以テ目的トス

第二條 測候技術官養成所ノ修業年限ハ三年トス

第三條 測候技術官養成所ノ學科目及其ノ程度左ノ如シ

學 科 目	第 一 學 年			第 二 學 年			第 三 學 年		
	學 期 一	學 期 二	學 期 三	學 期 一	學 期 二	學 期 三	學 期 一	學 期 二	學 期 三
數 學	九	九	九	六	六	六	三	三	三
理 論 物 理 學	九	九	九	六	六	六	三	三	三
化 學	二	二	二	二	二	二	四	四	四
地 球 磁 氣 學	二	二	二	二	二	二	一	一	一
地 球 物 理 學 一 般	二	二	二	三	二	二	一	一	一
氣 象 學				三	二	三			
理 論 氣 象 學				三	二	三			
應 用 氣 象 學				三	二	三			
地 震 學 及 實 習				二	二	二	三	三	三
海 洋 學				二	二	二			
天 文 學				二	二	二			
器 械 及 觀 測 法				二	二	二			
測 量 及 製 圖	六	六	四				二	二	二
物 理 實 驗				一 回	一 回	一 回			
氣 象 實 習				一 回	一 回	一 回			
地 球 物 理 學 演 習				一 回	一 回	一 回			
天 體 觀 測				一 回	一 回	一 回			
修 身	一	一	一	一	一	一	一	一	一

學 科 目	第 一 學 年			第 二 學 年			第 三 學 年		
	學 期 一	學 期 二	學 期 三	學 期 一	學 期 二	學 期 三	學 期 一	學 期 二	學 期 三
數 學	九	九	九	六	六	六	三	三	三
理 論 物 理 學	九	九	九	六	六	六	三	三	三
化 學	二	二	二	二	二	二	四	四	四
地 球 磁 氣 學	二	二	二	二	二	二	一	一	一
地 球 物 理 學 一 般	二	二	二	三	二	二	一	一	一
氣 象 學				三	二	三			
理 論 氣 象 學				三	二	三			
應 用 氣 象 學				三	二	三			
地 震 學 及 實 習				二	二	二	三	三	三
海 洋 學				二	二	二			
天 文 學				二	二	二			
器 械 及 觀 測 法				二	二	二			
測 量 及 製 圖	六	六	四				二	二	二
物 理 實 驗				一 回	一 回	一 回			
氣 象 實 習				一 回	一 回	一 回			
地 球 物 理 學 演 習				一 回	一 回	一 回			
天 體 觀 測				一 回	一 回	一 回			
修 身	一	一	一	一	一	一	一	一	一



合計	講義 實驗實習	工場實習	英語	英語	法制及經濟
三五	三五		三	三	
三五	三五		三	三	
三五	三五		三	三	
三一	三一	一回	三	三	二
三一	三一	一回	三	三	二
三一	三一	一回	三	三	二
三一	三一	一回	三	三	二
三一	三一	一回	三	三	二
三一	三一	一回	三	三	二

教授上特別ノ必要アルトキハ學科目又ハ其ノ教授時數ヲ増減變更シ或ハ教授時間外若ハ休業期間ニ於テ臨時講義又ハ實習ヲ課スコトヲ得

第四條 測候技術官養成所生徒ニハ修學中月三十五圓以内ノ手當ヲ給ス

前項ノ外修學ニ必要ナル物品ヲ給與スルコトアルヘシ

第五條 測候技術官養成所生徒ハ卒業後五年間中央氣象臺長指定ノ氣象臺、測候所又ハ觀測所ニ就職スヘキ義務アルモノトス

第六條 測候技術官養成所生徒ニシテ退學ヲ命セラレ若ハ自己ノ便宜ニ依リ退學シ又ハ前條ノ義務ヲ果ササル者ニハ疾病又ハ止ムヲ得サル事故ニ因ルト認ムル場合ヲ除クノ外修學中ニ給與シタル手當並教育費ニ相當スル金額ヲ一時ニ償還セシム

前項ニ依リ償還セシムル教育費ノ額ハ其ノ實費ヲ參酌シ中央氣象臺長之ヲ定ム

第七條 測候技術官養成所ニ委託生徒又ハ私費生徒ヲ置クコトヲ得

前項ノ生徒ニ對シテハ第四條乃至第六條ノ規定ヲ適用セス

第八條 測候技術官養成所ニ專修科及別科ヲ置クコトヲ得

專修科及別科ノ修業年限、學科目及其ノ程度ハ文部大臣ノ認可ヲ得テ中央氣象臺長之ヲ定ム

第九條 專修科生徒ニハ修學中月二十圓以内ノ手當及修學ニ必要ナル物品ヲ給スルコトアルヘシ

前項ノ給與ヲ受ケタル者ニ對シテハ第五條及第六條ノ規定ヲ準用ス但シ其ノ就職義務期間ハ學資ノ支給ヲ受ケタル期間ノ二倍トス

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

右の規程に依り測候技術官養成所は正式に専門學校となるに至つた。

同日文部省告示第三百七十九號を以て左の如く從來の測候技術官養成所規程が廢止せられた。

大正十一年文部省告示第五百十一號ハ之ヲ廢止ス

大正十四年四月二十一日文部省令第十四號を以て左の如く測候技術官養成所規程中に改正が行はれた。

測候技術官養成所規程中左ノ通改正ス

第三條 學科目及其ノ程度表中

第七章 大正九年世界大戰直後より昭和七年末に至るまで



工場實習	合計		工場實習	合計	
	講義	實驗實習		講義	實驗實習
二	三	三	二	三	三
二	三	三	二	三	三
二	三	三	二	三	三
一回	三	三	一回	三	三
一回	三	三	一回	三	三
一回	三	三	一回	三	三
二	三	三	二	三	三
二	三	三	二	三	三
一回	三	三	一回	三	三

改ム

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

大正十五年一月二十七日文部省令第四號を以て左の如く測候技術官養成所規程中に改正が行はれた。

測候技術官養成所規程中左ノ通改正ス

第六條

測候技術官養成所生徒ニシテ退學ヲ命セラレ若ハ自己ノ便宜ニ依リ退學シ又ハ前條ノ義務ヲ果ササル者ニ

ハ疾病ニ因ルノ外修學中ニ給與シタル手當並教育費ニ相當スル金額ノ全部又ハ一部ヲ一時ニ償還セシム

前項ニ依リ償還セシムル金額ハ其ノ實費ヲ參酌シ中央氣象臺長之ヲ定ム

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

昭和五年四月二十六日文部省令第十三號を以て左の如く中央氣象臺附屬測候技術官養成所規程中に改正が行はれた。

中央氣象臺附屬測候技術官養成所規程中左ノ通改正ス

第三條中學科目及其程度ヲ左ノ如ク改ム

學科目	第一學年			第二學年			第三學年		
	學期一	學期二	學期三	學期一	學期二	學期三	學期一	學期二	學期三
數學	七	七	七	五	五	五	三	三	三
物理學	六	六	六	三	三	三	四	四	四
理論物理學				二	二	二			
化學	二	二	二	二	二	二			
地球物理學							二	二	二
氣象學	二	二	二						
理論氣象學							三	三	三
應用氣象學				二	二	二			
地震學				二	二	二	三	三	三

第七章

大正九年世界大戰直後より昭和七年末に至るまで



海洋學	天文學	地文學	器械及觀測法	測量學	製圖法	物理實驗	氣象實習	地震學實習	天體觀測	修身	法制及經濟	英語	獨語	無線電信實習	工場實習	體操
		二		三	三					一		六	四		一回	三
		二		三	三					一		六	四		一回	三
		二		三	三					一		六	四		一回	三
		二				一回一回				一	二	三	三		一回	三
		二				一回一回				一	二	三	三		一回	三
		二				一回一回				一	二	三	三		一回	三
一	二					一回		一回一回	一回一回	一	二	二	四	一		三
一	二					一回		一回一回	一回一回	一	二	二	四	一		三
一	二					一回		一回一回	一回一回	一	二	二	四	一		三

計	講義	實習
三九	一回	三九
三九	一回	三九
三九	一回	三九
三四	一回	三四
三四	一回	三四
三四	一回	三四
三五	一回	三五
三五	一回	三五
三五	一回	三五

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

本令施行ノ際現ニ在學スル生徒ニ課スヘキ學科目及其ノ程度ハ新舊學科程度ヲ斟酌シテ中央氣象臺長之ヲ定ム

昭和七年七月二十九日勅令第百九十二號を以て左の如く氣象臺官制中に改正が行はれた。(抄)

氣象臺官制中左ノ通改正ス

第十三條第二項中「氣象臺技師」ヲ「氣象臺事務官又ハ氣象臺技師」ニ改ム

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

右は從來附屬測候技術官養成所の主事には氣象臺技師より文部大臣之を補することとしたのを改めて、氣象臺事務官又は氣象臺技師より之を補することと改めたのである。

第五項 語學に關する專門學校

原内閣の時高等教育機關大擴張の一部として新設せらるることとなつた大阪外國語學校の創立準備が整つたので、大正十年十二月文部省直轄諸學校官制中の改正に依り、大阪外國語學校が設立せられ中目覺が校長に任ぜられた。授業開始は大正十一年四月からであつた。



大正十年十二月二十九日文部省令第四十九號を以て左の如く大阪外國語學校規程が定められた。  
大阪外國語學校規程左ノ通定ム

大阪外國語學校規程

第一條 大阪外國語學校ハ國際的實務ニ從事スヘキ者ヲ養成スルヲ目的トシ主トシテ現代外國語ヲ教授スル所トス

第二條 本校ノ修業年限ハ三年トス

第三條 本校ニ支那語部、蒙古語部、馬來語部、印度語（ヒンドスタニー）部、英語部、佛語部、獨語部、露語部及西語部ヲ置ク

第四條 本校ニ於テ授クル學科目及其程度左ノ如シ

學科目	第一學年	第二學年	第三學年
修身	一	一	一
國語	二	二	二
外國語	二	一八	一六
歷史		三	
地理			
法律經濟		四	
社會學			二
實習	一回三		

備考 外國語ハ專修語學及兼修語學トシ各部ニ於ケル教授時數左ノ如シ

計	體操	商品	商業	言語學	教育學
二二三	武道一回二		二	二	
二二三	武道一回二		實習一回二		
三四(内△二)一回			實習一回二		△二

△ハ隨意科

部	第一學年	第二學年	第三學年
支那語部	一八	一八	一六
蒙古語部	一八	一三	一〇
英語部	三	三	三
支那語部	三	三	三
蒙古語部	三	三	三
兼修部	一八	一三	一〇
專修部	三	三	三



部語露	部語獨	部語佛	部語英	部語度印	部語來馬
兼專	兼專	兼專	兼專	兼專	兼專
英露 語語	蘭英獨 語語語	伊英佛 語語語	佛英 語語	アラビヤ 印度語語	アラビヤ 馬來語語
一八 三	一八 三	一八 三	一八 三	一八 三	一八 三
一八	一八	一八	一五 三	二 六	二 六
一六	三 一三	三 一三	三 一三	六 一〇	六 一〇

部語西	部語專	部語西	部語專
葡英西 語語語	兼專	葡英西 語語語	兼專
一八 三		一八 三	
一八		一八	
三		一三	

教育學ハ隨意科目トシ希望ノ生徒ニ之ヲ課ス

第五條 學校長ハ必要アリト認メタル場合ニ於テハ每週教授時數ヲ増減シ又ハ科外講義ヲ開クコトヲ得

左ノ學科中其一ヲ選擇シテ學修セントスル者ハ選科生トシテ入學セシムルコトヲ得

- 支那語 蒙古語 馬來語 印度語
- 英語 佛語 獨語 露語
- 西語 アラビヤ語

第六條 簡易ノ方法ニヨリ外國語ヲ專修セントスル者ノ爲ニ別科ヲ置ク

別科ノ修業年限ハ二年トス

第七條 卒業者ニシテ既習ノ學科目又ハ之ニ關聯セル學科目ニ付更ニ研究セントスルモノハ研究生トシテ二年以内

在校セシムルコトヲ得

大正十三年九月一日文部省令第十七號を以て左の如く大阪外國語學校規程中に改正が行はれた。



大阪外國語學校規程中左ノ通改正ス

第四條中學科目「國語」ヲ「國語漢文」ニ、備考ヲ左ノ如ク改ム

備考 外國語ハ專修語學及兼修語學トシ各部ニ於ケル教授時數左ノ如シ

部	支那語部		蒙古語部				馬來語部		印度語部	
	兼	專	兼		專		兼	專	兼	專
第一學年	英	支	滿	支	英	蒙	馬	來	印	英
	語	語	洲	那	古	古	來	來	度	語
	三	一	語	語	語	語	語	語	語	語
	八	八	語	語	語	語	語	語	語	語
第二學年	二	一	二	七	一	九	五	六	七	五
	六	六	七	七	九	九	六	七	七	六
	二	一	二	七	九	九	六	七	七	七
第三學年	一	一	二	六	一	八	五	六	五	五
	六	六	六	六	八	八	五	六	五	五
	一	一	二	六	八	八	五	六	五	五

部	英語部		佛語部		獨語部		露語部		西語部	
	兼	專	兼	專	兼	專	兼	專	兼	專
第一學年	佛	英	伊	佛	獨	英	露	英	西	葡
	語	語	語	語	語	語	語	語	語	語
	三	一	一	一	一	一	一	一	一	一
	八	八	八	八	八	八	八	八	八	八
第二學年	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
	五	三	一	一	一	一	一	一	一	一
	一	五	一	一	一	一	一	一	一	一
	八	八	八	八	八	八	八	八	八	八
第三學年	三	一	四	一	四	一	一	一	一	一
	三	一	四	一	四	一	一	一	一	一
	一	三	一	一	一	一	一	一	一	一
	一	三	一	一	一	一	一	一	一	一

教育學ハ隨意科目トシ希望ノ生徒ニ之ヲ課ス

學校長ハ必要アリト認メタル場合ニ於テハ每週教授時數ヲ増減シ又ハ科外講義ヲ開クコトヲ得

附則

第七章

大正九年世界大戰直後より昭和七年末に至るまで



第二編 本論  
本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

大正十四年四月一日文部省令第九號を以て左の如く大阪外國語學校規程中に改正が行はれた。  
大阪外國語學校規程中左ノ通改正ス  
第四條備考中  
印度語部及露語部ノ項ヲ左ノ通改ム

露語部		印度語部	
兼	專	兼	專
獨英 語語	露 語	英 アラビヤ語 又ハベルシヤ語	印 度 語
1	3	1	2
1	1	5	7
4	1	5	5

附則

本令ハ大正十四年四月一日ヨリ之ヲ施行ス  
大正十五年三月六日文部省令第十二號を以て左の如く大阪外國語學校規程中に改正が行はれた。  
大阪外國語學校規程中左ノ通改正ス

第四條中

外國語		外國語	
地	歴	地	歴
理	史	史	地理
實習一回	三	二	二
三	三	四	四
四	三	二	二
四	四	四	二
計	計	計	計
三三 二回	三三 二回	三三 一回	三三 一回
三二 一回	三二 一回	三五(内△△) 一回	三五(内△△) 一回

備考中ノ表ヲ左ノ如ク改ム

支那語部		支那語部		部	第一學年	第二學年	第三學年
兼	專	兼	專				
英支 語語	支那 語	英支 語語	支那 語		17 3	15 2	15 1
英古 語語	蒙古 語	英古 語語	蒙古 語		10 3 7	9 1 6 2	8 1 5 2
兼	專	兼	專				
滿支 洲那 語語	支那 語	滿支 洲那 語語	支那 語				

第七章

大正九年世界大戰直後より昭和七年末に至るまで



部語露	部語獨	部語佛	部語英	部語度印	部語來馬
兼專	兼專	兼專	兼專	兼專	兼專
獨英露 語語語	蘭英獨 語語語	伊英佛 語語語	佛英 語語	(又アラビヤハベルビヤ) 英印度語語	(又アラビヤハベルビヤ) 英馬來語語
一三七	一三七	一三七	一三七	一八二	一八二
一一七	一一七	一一七	三四	五五七	五五七
四一一	四一一	四一一	三二	五五五	五五五

部語西	兼專	葡英西 語語語	一七   三	一七 	一一 四
-----	----	------------	-----------	--------	---------

附則

本令ハ大正十五年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

昭和二年三月二十八日文部省令第五號を以て左の如く東京外國語學校規程中に改正が行はれた。

東京外國語學校規程中左ノ通改正ス

第一條中「修業年限ハ三年」ヲ「修業年限ハ四年」ニ改ム

第二條中「朝鮮語部」ヲ削ル

第三條 各部、各科ノ學科目及其ノ程度ハ左表ノ如シ

修身	學科			
	第一學年	第二學年	第三學年	第四學年
一	每週教授時數	每週教授時數	每週教授時數	每週教授時數
一	一	一	一	一

部 英(佛、獨、露、伊、西、葡、支那、蒙古、暹羅、馬來、ヒンドスタニー、タミル) 語部

第七章

大正九年世界大戰直後より昭和七年末に至るまで



修 身	學 科 目	年	科 計	體 操	法 律	社 會 學	教 育 學	哲 學	文 學 史	言 語 學	經 濟	歷 史	國 語	第 二 外 國 語	外 國 語					
																拓	殖			
一	第一學年	每週教授時數	三〇	二				二				三	二		二〇					
		第二學年																		
		每週教授時數	三〇	二	〇	四		△	△			二		二	二	一七				
		第三學年																		
一	第三學年	每週教授時數	三〇	二	〇	七		△	△	△			△	三	一七					
		第四學年																		
		每週教授時數	※四又八五〇	二	〇	五	※	△	※	△	△		※	〇	※	〇	△	一	三	一五
		第四學年																		

國 語	第 二 外 國 語	外 國 語	修 身	學 科 目	年	科 計	體 操	教 育 學	法 律	貿 易 事 務	商 業 實 務	商 業	經 濟	國 語	第 二 外 國 語	外 國 語				
																	拓	殖		
二	二	一〇	一	第一學年	每週教授時數	三〇	二				三	二					二〇			
					第二學年															
					每週教授時數	三〇	二				二	二	二	二	二	二	二	二	一七	
					第三學年															
二	二	一七	一	第三學年	每週教授時數	※三〇	二								二	二	一五			
					第四學年															
					每週教授時數	※三〇	二				※	二	七		三					
					第四學年															
二	一三	一	一	第四學年	每週教授時數	※三〇	二								二	二	一三			
					第四學年															
					每週教授時數	※三〇	二				※	三	四	二	二	四	二			
					第四學年															



計	體操	教育學	商業	法律	植民地事情	植民	農業	經濟
三〇	二		二				三	
三〇	二						二	二
三〇	二			五		二	三	
※ 三〇 五〇	二	※ 三		二	二	三	五	※ 二

備考

- 一 外國語ハ當該國語トス但シ支那、蒙古、暹羅、馬來、ヒンドスタニー、タミル語部ニ在リテハ外國語ヲ分チテ甲（當該國語）乙（他ノ必要ナル外國語）二種トシ其ノ時間配當ハ別ニ之ヲ定ム
- 二 外國語教授ノ時間内ニ於テ當該國語又ハ甲乙外國語以外ノ言語ヲ教授スルコトアルヘシ
- 三 第二外國語ハ特別ノ規定アル場合ノ外英語、佛語、獨語ノ中生徒ヲシテ其ノ一ヲ選擇セシム但シ中途變更ヲ許サス
- 四 文科表中△又ハ○印ヲ附セル同一學年内ノ學科目ハ生徒ノ選擇ニヨリ其ノ孰カヲ課ス
- 五 各科表中※印ヲ附セルハ隨意科目トシ希望ノ生徒ニ之ヲ課ス

六 支那、蒙古、暹羅、馬來、ヒンドスタニー、タミル語部ニ在リテハ第二外國語及文學史又ハ其ノ一ヲ缺キ其ノ時間ヲ甲乙外國語ニ加ヘ又ハ他ノ學科目ニ配當ス

學校長ハ臨時必要ト認メタル場合ニ於テハ每週教授時數ヲ増減シ若ハ科外講義ヲ開クコトヲ得

第六條第三項ヲ左ノ如ク改ム

附則

本令ハ昭和二年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

本令施行ノ際現ニ在學スル生徒ノ修業年限竝之ニ課スヘキ學科目及其ノ程度ハ尙従前ノ規定ニ依ル

右は高橋（是清）内閣の文相たる中橋徳五郎の時に所謂高等教育機關擴張整備計畫の一部として、東京外國語學校に於て從來の如く専ら各種の外國語の知識を與ふるを主とする（補助學科目として法制商業等のことも多少は授けて居たが）代りに、各種の外國語を中心として文科、貿易科、拓殖科を設け其れぞれ必要な學科目を授けることとする意味を以て修業年限一年を延長するの計畫を定め、之に關する豫算は大正十二年加藤（友三郎）内閣の時代に議會の協賛を経たに拘らず其後關東地方大震災の爲豫算繰延へ等のことがあつて今回漸く之が實施を見ることとなつたのである（學制改革問題及高等教育機關擴張整備計畫の款参照）

昭和三年十月二十六日文部省令第十六號を以て左の如く大阪外國語學校規程中に改正が行はれた。

大阪外國語學校規程中左ノ通改正ス

第七章 大正九年世界大戰直後より昭和七年末に至るまで



第四條中「備考」ノ二字ヲ削リ

部語度印	部語來馬
兼 專	兼 專
(又ア英印 ハラビ 度 ヘルビ シヤ 語 ルシヤ 語)	(又ア英馬 ハラビ 來 ハルビ ヤ 語 ルシヤ 語)
一 二	一 二
五 五 七	五 五 七
五 五 五	五 五 五

ヲ

部語度印	部語來馬
兼 專	兼 專
(又ア英印 ハラビ 度 ヘルビ シヤ 語 ルシヤ 語)	(又蘭英馬 ハ 來 ハ 英 語 ルシヤ 語)
一 二	一 二
八   九	八   九
七   八	七   八

改ム

第五條中「左ノ」ヲ「本校所設」ニ改メ「支那語」以下ヲ削ル

附則

本令ハ昭和四年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

昭和四年六月二十四日文部省令第三十三號を以て左の如く大阪外國語學校規程中に改正が行はれた。

大阪外國語學校規程中左ノ通改正ス

第六條中「文部大臣ノ認可ヲ得テ學校長」ヲ「學則ニ於テ」ニ改ム

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

第六條中の改正は別科の課程に關するものである。

官立外國語學校の外専門學校令に依る専門學校たる私立外國語學校に天理外國語學校(奈良縣)がある。設立認可は昭和二年十二月であつた。

第六項 文學に關する専門學校

神宮皇學館に就ては、

大正十二年四月以後専科生徒の募集を廢止した。

大正十五年二月専科を廢止し、本科の上に修業年限一箇年の研究科を置いた。

昭和二年三月修業年限四箇年の普通科を置いた。

昭和六年二月普通科の修業年限を五箇年とした。

専門學校令に依る専門學校たる文學家政等を授くる公私立學校に就て述べると、

公立専門學校としては、

福岡縣立女子専門學校(福岡市)が大正十一年六月に、大阪府立大阪女子専門學校(大阪市)が大正十三年二月に、宮城縣立宮城縣女子専門學校(仙臺市)が大正十五年三月に、京都府立女子専門學校(京都府)が昭和二年三月に、廣島縣立廣島女子専門學校(廣島市)が昭和三年三月に、長野縣立長野縣女子専門學校(長野市)が昭和四年三月に、何れも設立を認可せられた。

私立専門學校としては、

第七章 大正九年世界大戰直後より昭和七年末に至るまで



京都女子高等專門學校(京都市)が大正九年三月に、東京裁縫女學校專門部(東京市)(後東京女子專門學校と改む)及梅花女子專門學校(大阪府)が大正十一年三月に、帝國婦人會實踐女學校專門部(東京府)が大正十四年一月に、共立女子職業學校專門學部(東京市)(後共立女子專門學校と改む)が大正十四年三月に、樟蔭女子專門學校(大阪府)が大正十四年十二月に、千代田女子專門學校(東京市)が昭和二年二月に、國學院大學附屬神職部(東京府)及金城女學校專門學部(名古屋)が昭和二年三月に、東京家政專門學校(東京市)が昭和二年七月に、二松學舍專門學校(東京市)が昭和三年二月に、相愛女子專門學校(大阪市)が昭和三年四月に、和洋女子專門學校(東京市)が昭和三年十月に、相山女子高等專門學校(名古屋)が昭和四年五月に、大谷女子專門學校(大阪市)及安城女子專門學校(愛知縣)が昭和五年四月に、上智大學專門部(東京市)が昭和六年一月に、廣島女學院專門學校(廣島市)が昭和七年二月何れも設立を認可せられた。

第七項 宗教に關する專門學校

專門學校令に依る專門學校たる宗教學校に就て述べる、

私立西山專門學校(京都府)が大正九年三月に、私立眞宗專門學校(名古屋市)が大正十年六月に、大正大學專門部(東京府)が大正十五年九月に、何れも設立を認可せられた。

第八項 美術に關する專門學校

大正十二年五月二十六日文部省令第二十五號を以て左の如く東京美術學校規程が定められた。圖畫師範科に關するとは教員養成の所で述べべきであるが、同一規定中に在るから便宜此處に之を述べることとする。

東京美術學校規程左ノ通定ム

東京美術學校規程

- 第一條 東京美術學校ノ學科ヲ分チテ本科及圖畫師範科トス
- 第二條 本科ノ修業年限ハ五年トス但シ寫眞科ノ修業年限ハ三年トス
- 第三條 本科ヲ分チテ日本畫科、西洋畫科、彫刻科、建築科、圖案科、金工科、鑄造科、漆工科及寫眞科トス
- 第四條 各學科ノ學課目及教授時數左ノ如シ

日本畫科

課目	每 週 教 授 時 數				
	第一學年	第二學年	第三學年	第四學年	第五學年
修身	一	一	一	不定時	不定時
日本畫實習	一八以上	一八以上	一八以上	一八以上	一八以上
解剖學	二	二			
遠近法	二				
美學及美術史	四	四	二		
外國語 英語又ハ佛語	二	二			
體操	二	二	一		一

西洋畫科

課目	每 週 教 授 時 數				
	第一學年	第二學年	第三學年	第四學年	第五學年
西洋畫科					



課目	第一學年					第二學年					第三學年					第四學年					第五學年				
	體操	外國語	美術及美術史	遠近法	解剖學	西洋畫實習	修身	第一學年	第二學年	第三學年	第四學年	第五學年	體操	外國語	美術及美術史	遠近法	解剖學	西洋畫實習	修身	第一學年	第二學年	第三學年	第四學年	第五學年	
彫刻科	二	二	四	二	二	一八以上	一	二	二	二	一八以上	一	二	二	二	二	二	一八以上	一	二	二	二	一八以上	不定時	

課目	第一學年					第二學年					第三學年					第四學年					第五學年				
	外國語	美術及美術史	遠近法	解剖學	繪畫實習	彫刻實習	修身	第一學年	第二學年	第三學年	第四學年	第五學年	外國語	美術及美術史	遠近法	解剖學	繪畫實習	彫刻實習	修身	第一學年	第二學年	第三學年	第四學年	第五學年	
建築科	二	四	二	二	一八以上	一	二	二	二	二	一八以上	一	二	二	二	二	二	一八以上	一	二	二	二	一八以上	不定時	

課目	第一學年					第二學年					第三學年					第四學年					第五學年				
	體操	英語	用器畫法	理學	美術及美術史	建築學	彫刻實習	繪畫實習	建築圖案實習	修身	第一學年	第二學年	第三學年	第四學年	第五學年	體操	英語	用器畫法	理學	美術及美術史	建築學	彫刻實習	繪畫實習	建築圖案實習	修身
圖案科	二	二	二	三	四	二	一八以上	一	二	二	二	二	二	四	五	一	二	二	二	四	五	一八以上	一	二	二



課目	每週教授時數				
	第一學年	第二學年	第三學年	第四學年	第五學年
修身	一	一	一	不定時	不定時
圖案實習	一八以上	一八以上	一八以上	一八以上	一八以上
彫刻實習	一八以上	一八以上	一八以上	一八以上	一八以上
圖案法					
工藝製作法			二	六	六
美學及美術史			二		
用器畫法					
外國語 英語又ハ佛語	二	二			
體操	二		一		一

金工科

課目	每週教授時數				
	第一學年	第二學年	第三學年	第四學年	第五學年
修身	一	一	一	不定時	不定時
金工實習	一八以上	一八以上	一八以上	一八以上	一八以上
彫刻實習	一八以上	一八以上	一八以上	一八以上	一八以上
繪畫及圖案實習	一八以上	一八以上	一八以上	一八以上	一八以上

鑄造科

課目	每週教授時數				
	第一學年	第二學年	第三學年	第四學年	第五學年
金工製作法			一		
圖案法			二		
美學及美術史			四		
用器畫法	六	二	二		
工藝化學			二		
外國語 英語又ハ佛語	二	二	一		一
體操	二	二	一		
修身	一	一	一	不定時	不定時
鑄造實習	一八以上	一八以上	一八以上	一八以上	一八以上
彫刻實習	一八以上	一八以上	一八以上	一八以上	一八以上
繪畫及圖案實習	一八以上	一八以上	一八以上	一八以上	一八以上
鑄金製作法			一		
圖案法		二			
美學及美術史	六	二	四		



漆工科

課目	每週教授時數				
	第一學年	第二學年	第三學年	第四學年	第五學年
用器畫法	二				
工藝化學			二		
外國語 英語又ハ佛語	二	二	二	一	
體操				一	
修身	一		一	不定時	不定時
漆工實習					一八以上
繪畫及圖案實習	一八以上	一八以上	一八以上	一八以上	
彫刻實習					
漆工製作法			一		
圖案法					
美學及美術史	六	二	四		
用器畫法	二				
工藝化學		二			
外國語 英語又ハ佛語	二	二			

寫真科

課目	每週教授時數				
	第一學年	第二學年	第三學年	第三學年	第三學年
寫真實習	一		一		
繪畫實習	一八以上	一八以上	一八以上		一八以上
物理學	一				
化學					
光化學	四		一		
寫真術					
材料及藥品	三		二		
遠近法			一		
英語	二	二	二		
體操		二	二		一

學校長ハ必要ト認ムル場合ニ於テハ本條ノ每週教授時數ヲ増減シ若ハ課外講義ヲ開クコトヲ得  
 第五條 本科ノ選擇學課目左ノ如シ

第七章 大正九年世界大戰直後より昭和七年末に至るまで



繪畫史 彫刻史  
 建築史 考古學  
 風俗史 美學  
 文學 工藝史  
 工藝製作法 外國語

選擇學課目ハ在學中二課目ヲ學修スルコトヲ要ス

學校長ハ必要ト認ムル場合ニ於テハ本條ノ學課目ヲ變更スルコトヲ得

第六條 本科ニ入學スルコトヲ得ル者ハ左ノ各號ノ一ニ該當スルコトヲ要ス

一、中學校卒業者

二、專門學校入學者檢定規程第八條第一號ニ依リ一般ノ專門學校入學ニ關シ指定セラレタル者

三、專門學校入學者檢定規程ニ依リ試驗檢定ニ合格シタル者

四、工業學校卒業者(尋常小學校卒業ヲ入學程度トスル修業年限  
 五年ノ學校若ハ之ト同等以上ノ學校卒業者)

第七條 圖畫師範科ノ修業年限ハ三年トス

第八條 圖畫師範科ノ學課目ハ修身、教育學及心理學、教授法及教授練習、美學及美術史、圖案法及色彩學、英語、繪畫及圖案、用器畫法及製圖手工、習字及體操トス

第九條 前條各學課目ノ每週教授時數左ノ如シ

圖畫師範科

課目	每週教授時數		
	第一學年	第二學年	第三學年
修身	一	一	一
教育學及心理學	二	二	二
教授法及教授練習	二	二	二
美學及美術史	二	二	二
圖案法及色彩學	二	二	二
英語	二	二	一
繪畫及圖案	一五	一五	一
用器畫法及製圖	三	三	一五
手工	五	三	二
習字	三	五	二
體操	二	三	一
計	三九	三九	三九

學校長ハ必要ト認ムル場合ニ於テハ本條各學課目ノ每週教授時數ヲ増減シ若ハ課外講義ヲ開クコトヲ得

第十條

圖畫師範科ニ入學スルコトヲ得ル者ハ師範學校又ハ中學校ノ卒業者及專門學校入學者檢定規程ニ依リ一般

專門學校入學ニ關シ指定セラレタル者又ハ專門學校入學者檢定規程ニ依リ試驗檢定ニ合格シタル者ニシテ身體健

第七章

大正九年世界大戰直後より昭和七年末に至るまで



全品行方正ナル男子ニ就キ學校長其ノ中ヨリ試験ノ上之ヲ定ム

附 則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

本令施行ノ際在學セル生徒ニ課スル學課目及其ノ程度ニ關シテハ其ノ卒業ニ至ルマテ新舊學課目ノ程度ヲ斟酌シテ學校長之ヲ定ム

大正三年文部省令第二十八號東京美術學校規程及明治四十年文部省令第十八號東京美術學校圖畫師範科規程ハ之ヲ廢止ス

大正十四年五月八日文部省令第十八號を以て左の如く東京美術學校規程中に改正が行はれた。

東京美術學校規程中左ノ通改正ス

第四條第一項各表中體操ノ項	體操	二	二	一	一	一	一	二
ニ、寫眞科ノ表中體操ノ項	體操	二	二	一	一	一	一	ニ改ム
第九條第一項ノ表中教授法及教授練習ノ項	教授法及教授練習	二	二	七	七	二	二	六
體操	二	二	一	一	一	一	一	ニ改ム

附 則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

大正十五年五月十九日文部省令第二十二號を以て左の如く東京美術學校規程中に改正が行はれた。

東京美術學校規程中左ノ通改正ス

第二條中但書ヲ削ル

第三條中「鑄造科、漆工科及寫眞科」ヲ「鑄造科及漆工科」ニ改ム

第四條中寫眞科ノ項ヲ削ル

第六條中「第八條第一號」及「第四號」ヲ削ル

附 則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

寫眞科に關する項を削除したのは同科は之を新設の東京高等工藝學校に移すこととしたが爲である。

官立美術學校の外専門學校令に依る専門學校たる私立美術學校として、大正十二年三月設立認可の小西寫眞専門學校（東京府）及昭和四年六月設立認可の女子美術専門學校（東京市）がある。

第九項 音樂に關する専門學校

大正十二年三月十二日文部省令第十一號を以て左の如く、東京音樂學校規程中に改正が行はれた。師範科に關するところは教員養成の處で述べべきであるが、同一規程中に在るのであるから便宜此處に之を述べることとする。

第七章

大正九年世界大戰直後より昭和七年末に至るまで



東京音樂學校規程中左ノ通改正ス

第三條 本科ハ之ヲ聲樂部及器樂部ニ別ツ其ノ學科目及每週教授時數左ノ如シ

學科 目	聲樂部			器樂部		
	第一學年	第二學年	第三學年	第一學年	第二學年	第三學年
修身	一	一	一	一	一	一
唱歌	八	八	八	五	五	五
器樂	一	一	一	二	二	二
器樂合奏	一	一	一	二	二	二
音樂理論	二	二	二	二	二	二
音樂史	二	二	二	二	二	二
外國語	三	三	三	三	三	三
外國語	三	三	三	三	三	三
體操	二	二	二	二	二	二
計	二二	二二	二〇	二二	二二	二〇

前項所定ノ學科目中其ノ配當年度内ニ修了セザリシモノニ就キテハ次年以後ニ於テ之ヲ修了セシム  
 隨意科目トシテピアノ、オルガン、ヴァイオリン、セロ、ヴィオラ、ダブルベース、フリユート、オーボエ、ク  
 ラリネット、バツスーン、ホーン、トロンボーン、トランベツト、美學、音樂論、教育學及音樂教授法ヲ授クル

コトヲ得

第七條 師範科ノ學科目及每週教授時數左ノ如シ

學科 目	甲種師範科			乙種師範科		
	第一學年	第二學年	第三學年	第一學年	第二學年	第三學年
修身	一	一	一	一	一	一
唱歌	六	六	六	六	六	一〇
器樂	三	二	二	二	二	三
音樂通論	二	二	二	二	二	二
和聲論	一	二	二	一	二	二
音樂史	二	二	二	二	二	二
教育學	二	二	二	二	二	二
音樂教授法	一	二	二	一	二	二
國語	三	三	三	三	三	三
英語	三	三	三	三	三	三
體操及遊戲	二	二	二	二	二	二
計	二四	二三	二一	二二	二二	二二

甲種師範科生徒ニハ隨意科目トシテピアノ、オルガン、ヴァイオリン、美學及音樂論ヲ授クルコトヲ得

第七章 大正九年世界大戰直後より昭和七年末に至るまで



第九條 東京音樂學校ニ豫科ヲ置ク

豫科ノ修業年限ハ一箇年トス

豫科ノ學科目及毎週教授時數左ノ如シ

計	體操	外國語	國語	音樂通論	器樂	唱歌	修身
二〇	二	三	三	二	三	六	一

第十條 豫科ニ入學スルコトヲ得ル者ハ中學校第四學年、高等女學校第四學年ヲ修了シタル者又ハ之ト同等以上ノ學力アル者ニ就キ試驗ノ上學校長之ヲ定ム但シ前記ノ資格ヲ有セサル者ト雖特ニ音樂ノ才能アリト認ムル者ハ試驗ノ上之ヲ入學セシムルコトヲ得

第十四條 研究科ノ學科目左ノ如シ

聲樂部 唱歌、ピアノ  
器樂部 器樂、ピアノ、オルガン、ヴァイオリン又ハセロ、器樂合奏

作曲部 音響理論、ピアノ

隨意科目トシテ管絃樂用樂器、總譜視奏法、外國語、國文學、外國文學、美學及音響論ヲ授クルコトヲ得

附則

本令ハ大正十二年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

大正十四年九月十九日文部省令第三十八號を以て左の如く東京音樂學校規程中に改正が行はれた。

東京音樂學校規程中左ノ通改正ス

第三條第一項ノ表中唱歌ノ項

八	八	八	五	五	五	五	八	七	七	五	四	四
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

計ノ項

二二	二二	二〇	二二	二二	二〇	二二	二二	二二	一九	二二	二二	一九
----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----

ニ改メ第二項ヲ削ル

第七條第二項中「ピアノ、」ヲ削ル

第八條ヲ左ノ如ク改ム

師範科ニ入學スルコトヲ得ル者ハ一般專門學校ノ入學資格ヲ有スル者ニ就キ試驗ノ上學校長之ヲ定ム

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

本令施行ノ際現ニ在學スル生徒ニ關シテハ従前ノ規定ニ依ルコトヲ得



昭和三年五月二十四日文部省令第八號を以て左の如く東京音楽學校規程中に改正が行はれた。  
東京音楽學校規程中左ノ通改正ス  
第三條中左ノ如ク改ム

表中唱歌ノ欄

八	七	七	五	四	四	七	七	七	四	四	四
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

ニ、器樂ノ欄

一	一	一	一	一	二	二	二	一	一	一	一
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

ニ、計ノ欄

一八 二二 二二 一九 二改メ第二項トシテ左ノ項ヲ加ヘ

「卒業ノ後師範學校中學校高等女學校教員無試験檢定ヲ得ント欲スル者ハ前表ノ學科目ノ外左ノ學科目ヲ終了スルコトヲ要ス」

學年	聲樂部			器樂部			器樂部		
	第一學年	第二學年	第三學年	第一學年	第二學年	第三學年	第一學年	第二學年	第三學年
學科									
目									
ピアノノ	二	二		二	二	二	一	一	一
ピアノノ							二	二	二
教育學	二	二		二	二		二	二	二
音樂教授法	一	二		二	二		二	二	二
計	一	二	二	二	二	二	二	二	二

隨意科目ノ項中「教育學及音樂教授法」ヲ「佛語、伊語」ニ改ム

第九條中ノ表ヲ左ノ如ク改ム

學科	本科聲樂部志望者			本科器樂部ピアノ志望者			本科器樂部オルガン、ヴァイオリン、又ハセロ志望者		
	修身	唱歌	ピアノ	修身	唱歌	ピアノ	修身	唱歌	ピアノ
音樂理論			一			一			一
國語	三	三		三	三		三	三	
外國語	三	三		三	三		三	三	
體操	二			二			二		
計	一	六	二	一	四	二	一	四	一

第十四條中聲樂部ノ行「ピアノ」器樂部ノ行「器樂合奏」作曲部ノ行「ピアノ」ヲ削ル

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

昭和四年六月二十四日文部省令第三十四號を以て左の如く東京音楽學校規程中に改正が行はれた。



第二編 本論

東京音樂學校規程中左ノ通改正ス

第十五條、第十七條及第十八條中「文部大臣ノ許可ヲ得テ學校長」ヲ「學則ニ於テ」ニ改ム

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

第十五條中の改正は研究科の課程に關するものである。

昭和五年一月二十九日文部省令第一號を以て左の如く東京音樂學校規程中に改正が行はれた。  
東京音樂學校規程中左ノ通改正ス

第三條第二項ノ表中聲樂部ノピアノノ教授時數

第一學年	第二學年	第三學年
二	一	一

第一學年	第二學年	第三學年
二	一	一

ニ、器樂部ノ欄「オルガン、ヴァイオリン又ハセロヲ専修スル者」ヲ「ピアノ以外ノ器ヲ専修スル者」ニ改ム

第七條中第一項ノ表中甲種師範科第一學年ノ器樂「三」ヲ「二」ニ、計「二四」ヲ「二三」ニ改メ、第二項ノ「美學及音響論」ヲ「美學、音響論及獨語」ニ改ム

第九條第三項ノ表ヲ左ノ如ク改ム

修身	學部		
	本科聲樂部志望者	本科器樂部ピアノ志望者	本科器樂部オルガン、ヴァイオリン又ハセロ志望者
一	六	四	四

計	學部						
	唱歌	ピアノ	ピアノ以外ノ器	音樂理論	外國語	外國語	體操
一九	二	一	二	二	三	三	一七
一八	二	一	二	二	三	三	一八

附則

本令ハ昭和五年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

昭和六年四月二十五日文部省令第十三號を以て左の如く東京音樂學校規程中に改正が行はれた。

東京音樂學校規程中左ノ通改正ス

第三條 本科ハ之ヲ聲樂部、器樂部及作曲部ニ別ツ其ノ學科目及毎週教授時數左ノ如シ

修身	聲樂部			器樂部			作曲部		
	第一學年	第二學年	第三學年	第一學年	第二學年	第三學年	第一學年	第二學年	第三學年
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一

第七章

大正九年世界大戰直後より昭和七年末に至るまで



計	體操	外國語	國語	音樂理論	ピアノノ以外ノ專修器樂	ピアノノ歌	修身	學科		
								部	目	年
二〇	二	三	三	二	一	二	一	聲樂部	第一學年	七
二〇	二	三	三	二	一	二	一	聲樂部	第二學年	七
一八	二	三	三	二	一	二	一	聲樂部	第三學年	七
二一	二	三	三	二	一	二	一	器樂部	第一學年	四
二一	二	三	三	二	一	二	一	器樂部	第二學年	四
二一	二	三	三	二	一	二	一	器樂部	第三學年	四
一九	二	三	三	二	一	二	一	器樂部	第一學年	四
二三	二	四	三	二	一	二	一	器樂部	第二學年	四
二三	二	四	三	二	一	二	一	器樂部	第三學年	四
二三	二	四	三	二	一	二	一	作曲部	第一學年	四
二三	二	四	三	二	一	二	一	作曲部	第二學年	四
二三	二	四	三	二	一	二	一	作曲部	第三學年	四

卒業ノ後師範學校中學校高等女學校教員無試驗檢定ヲ得ント欲スル者ハ前表ノ學科目ノ外左ノ學科目ヲ修了スルコトヲ要ス

音樂教授法	教育學	ピアノノ	學科		
			部	目	年
一	二	二	聲樂部	第一學年	二
一	二	一	聲樂部	第二學年	一
二	一	一	聲樂部	第三學年	一
一	二	一	器樂部	第一學年	一
一	二	一	器樂部	第二學年	一
二	一	一	器樂部	第三學年	一
一	二	一	器樂部	第一學年	一
一	二	一	器樂部	第二學年	一
二	一	一	器樂部	第三學年	一
一	二	一	作曲部	第一學年	一
一	二	一	作曲部	第二學年	一
二	一	一	作曲部	第三學年	一

隨意科目トシテ獨唱、ピアノ、オルガン、ヴァイオリン、セロ、ヴィオラ、ダブルベース、フリユート、オーボエ、クラリネット、バツスーン、ホーン、トロンボーン、トランベツト、美學、音樂論、佛語、伊語ヲ授クルコトヲ得

第九條第三項ノ表ヲ左ノ如ク改ム

計	體操	外國語	國語	音樂理論	ピアノノ以外ノ專修器樂	ピアノノ歌	修身	學科		
								部	目	年
一九	二	三	三	二	一	二	一	本科聲樂部	聲樂部	第一學年
一七	二	三	三	二	一	二	一	本科聲樂部	聲樂部	第二學年
一八	二	三	三	二	一	二	一	本科聲樂部	聲樂部	第三學年
一八	二	三	三	二	一	二	一	本科器樂部	器樂部	第一學年
一八	二	三	三	二	一	二	一	本科器樂部	器樂部	第二學年
一八	二	三	三	二	一	二	一	本科器樂部	器樂部	第三學年
一九	二	四	三	三	一	二	一	本科作曲部	作曲部	第一學年
一九	二	四	三	三	一	二	一	本科作曲部	作曲部	第二學年
一九	二	四	三	三	一	二	一	本科作曲部	作曲部	第三學年



第十三條第二項中「研究科ノ修業年限ハ作曲部ニ在リテハ三箇年以内其ノ他ニ在リテハ二箇年以内トス」ヲ「研究科ノ修業年限ハ二箇年以内トス但シ本科聲樂部又ハ器樂部ノ卒業生ニシテ作曲部ニ入學シタルモノノ修業年限ハ三箇年以内トス」ニ改ム

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

官立音樂學校の外專門學校令に依る專門學校たる私立音樂學校として武藏野音樂學校（東京府）がある。設立認可は昭和七年五月である。

第十項 體育に關する專門學校

專門學校令に依る專門學校たる體育を授くる私立學校に就て述べると、

日本女子體育專門學校（東京府）が大正十五年三月に、國士館專門學校（東京府）が昭和四年三月に、何れも設立を認可せられた。

第七款 大學教育附學位

原内閣の時に高等教育機關大擴張の一部として計畫せられた東京高等商業學校の專攻科を擴張して之を商科大學と爲すの件は彌其準備が整つたので、大正九年四月勅令第七十一號東京商科大學官制に依り單科の官立大學たる東京商科大學が設置せられ、大正九年四月より其授業を開始することとなり、東京高等商業學校長佐野善作が商科大學長に任ぜられた。

れた。

商科大學には講座制を設けざることとした。

東京商科大學官制の詳細は學校等職員關係の款に於て之を述べる事とする。

大正九年四月一日勅令第七十四號を以て左の如く明治二十六年勅令第九十六號帝國大學及文部省直轄諸學校雇外國人に關する件中に改正が行はれた。

明治二十六年勅令第九十六號中左ノ通改正ス

「帝國大學」ヲ「帝國大學、官立大學」ニ、「帝國大學總長」ヲ「帝國大學總長、官立大學長」ニ改ム

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

右は前述の如く綜合大學たる帝國大學の外に新に單科大學たる官立大學が設けられたので、自然規定改正の必要を見るに至つたのである。

大正九年七月勅令第二百號を以て改正學位令が定められたことは、前章大學教育の場所に於て學制改革の問題と關聯して述べた通である。

大正九年八月十三日勅令第二百五十五號を以て左の如く大正八年勅令第十五號京都帝國大學各學部に於ける講座に關



する件中に改正が行はれた。

大正八年勅令第十五號中左ノ通改正ス

醫學部ノ部中「藥物學」ノ下「一講座」ヲ「二講座」ニ、工學部ノ部中「電氣工學」ノ下「四講座」ヲ「五講座」ニ、「建築學」ノ下「一講座」ヲ「三講座」ニ改ム

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

大正九年八月二十八日勅令第三百四十一號を以て左の如く大正八年勅令第十七號九州帝國大學各學部に於ける講座に關する件中に改正が行はれた。

大正八年勅令第十七號中左ノ通改正ス

工學部ノ部中「機械工學」ノ下「五講座」ヲ「六講座」ニ、「應用化學」ノ下「五講座」ヲ「六講座」ニ改メ「地質學」一講座ノ次ニ「造船學」二講座ヲ加フ

工學部ノ部ノ次ニ左ノ如ク加フ

農學部

農學 二講座

動物學 二講座

植物學 一講座

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

右の勅令は九州帝國大學工學部の講座増設及同大學農學部の講座設置のことを定めたものである。農學部に關しては大正八年二月勅令第十三號を以て帝國大學及其學部に關する件が定められた際、既に九州帝國大學に農學部が存在するものとして規定せられたれども、實は當時は唯農學部の創立費豫算が確定せるに止まり學部としては未開設の状態に在つたのであるが、今回創立準備が整ひ授業開始の期も近づいたので講座設置のことが定められたのである。(前章大學教育及大學豫備教育附學位の款參照)

同日又文部省令第二十二號を以て左の如く九州帝國大學農學部に關する件が發せられた。

九州帝國大學農學部ニ農學科ヲ置キ大正十年四月ヨリ授業ヲ開始ス

從來各帝國大學及官立高等學校は九月を以て學年開始期としたのであつたが、大正十年四月より一齊に四月を以て學年開始期とすることに改められ、九月に入學した現在の學生生徒に對しては壓搾教授を施し三月末日を以て進級若くは卒業せしむることとした。従つて九州帝國大學農學部の農學科も、新學年開始期たる大正十年四月より其授業を開始することとしたのであつた。

大正九年八月東京帝國大學工學部に航空學科が設けられた。



大正九年九月十五日勅令第三百九十五號を以て左の如く大正八年勅令第十六號東北帝國大學各學部に於ける講座にする件中に改正が行はれた。

大正八年勅令第十六條中左ノ通改正ス

理學部ノ部中「物理學 四講座」ノ次ニ「地球物理學 一講座」ヲ加ヘ「鐵鋼學」ノ下「一講座」ヲ「二講座」ニ改ム  
工學部ノ部中「機械工學」ノ下「三講座」ヲ「四講座」ニ、「電氣工學」ノ下「三講座」ヲ「四講座」ニ改ム

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

同日又勅令第三百九十七號を以て左の如く大正八年勅令第十八號北海道帝國大學各學部に於ける講座に關する件中に改正が行はれた。

大正八年勅令第十八號中左ノ通改正ス

農學部ノ部中「植物學」ノ下「二講座」ヲ「三講座」ニ改メ「應用菌學 一講座」ノ次ニ「皮革製造學 一講座」及「家畜衛生學 一講座」ヲ加フ

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

大正九年九月十七日勅令第四百九號を以て左の如く大正八年勅令第十四號東京帝國大學各學部に於ける講座に關する

件中に改正が行はれた。

大正八年勅令第十四號中左ノ通改正ス

法學部ノ部中「憲法」ノ下「一講座」ヲ「二講座」ニ、「刑法」ノ下「一講座」ヲ「二講座」ニ改ム  
工學部ノ部中「土木工學」ノ下「四講座」ヲ「五講座」ニ、「造兵學」ノ下「二講座」ヲ「三講座」ニ、「建築學」ノ下「四講座」ヲ「五講座」ニ改メ「鐵冶金學 一講座」ノ次ニ「製造冶金學 一講座」ヲ、「力學 一講座」ノ次ニ「石油採鑛學 一講座」ヲ加フ

文學部ノ部中「社會學」ノ下「一講座」ヲ「二講座」ニ改メ「佛蘭西語學、佛蘭西文學 一講座」ノ次ニ「神道 一講座」ヲ加フ

理學部ノ部中「數學」ノ下「四講座」ヲ「五講座」ニ、「地質學」ノ下「二講座」ヲ「三講座」ニ改ム

經濟學部ノ部中「經濟學」ノ下「五講座」ヲ「六講座」ニ、「商業學」ノ下「三講座」ヲ「五講座」ニ改ム

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

大正九年九月京都帝國大學工學部に建築學科が設けられた。

大正九年十月九日左記文部省令第二十八號が發せられた。

九州帝國大學工學部ニ造船學科ヲ置キ大正十年四月ヨリ授業ヲ開始ス

第七章 大正九年世界大戰直後より昭和七年末に至るまで



大正十年一月二十日文部省令第六號を以て左の如く明治三十年文部省令第二十八號中に改正が行はれた。

明治三十年文部省令第二十八號中左ノ通改正ス

「帝國大學」ノ下ニ「官立大學」ヲ加フ

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

明治三十年文部省令第二十八號は「帝國大學文部省直轄諸學校並圖書館ハ其司掌事務ニ係ル民事訴訟ニ付國ヲ代表ス」との規定であるが、今回の改正は之に新に認められた單科の官立大學を加へたのである。

大正十年三月三十一日勅令第五十二號を以て左の如く大正八年勅令第十六號東北帝國大學各學部に於ける講座に關する件中に改正が行はれた。

大正八年勅令第十六號中左ノ通改正ス

理學部ノ部中「數學」ノ下「三講座」ヲ「四講座」ニ改ム

工學部ノ部中「機械工學」ノ下「四講座」ヲ「五講座」ニ改メ「内力及彈性學」講座ノ次ニ「内燃機關學」一講座ヲ加フ

附則

本令ハ大正十年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

大正十年四月十三日勅令第八十六號を以て左の如く大正八年勅令第十五號京都帝國大學各學部に於ける講座に關する

件中に改正が行はれた。

大正八年勅令第十五號中左ノ通改正ス

工學部ノ部中「土木工學」ノ下「四講座」ヲ「五講座」ニ、「機械工學」ノ下「五講座」ヲ「六講座」ニ、「冶金學」ノ下「三講座」ヲ「四講座」ニ、「建築學」ノ下「三講座」ヲ「四講座」ニ改ム

理學部ノ部中「化學」四講座ノ次ニ「生物化學」一講座ヲ、「金相學」一講座ノ次ニ「地質學」二講座、「礦物學」一講座及「地史學」一講座ヲ加ヘ「數學」ノ下「三講座」ヲ「四講座」ニ、「地球物理學」ノ下「一講座」ヲ「二講座」ニ、「植物學」ノ下「一講座」ヲ「二講座」ニ、「動物學」ノ下「一講座」ヲ「二講座」ニ改ム

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

大正十年四月二十三日勅令第百十九號を以て左の如く大正八年勅令第十八號北海道帝國大學各學部に於ける講座に關する件中に改正が行はれた。

大正八年勅令第十八號中左ノ通改正ス

農學部ノ部中「家畜衛生學」一講座ノ次ニ「森林工學」一講座ヲ加フ  
農學部ノ部ノ次ニ左ノ如ク加フ

醫學部

內科學

一講座

第七章

大正九年世界大戰直後より昭和七年末に至るまで



- 外科學 一講座
- 解剖學 一講座
- 生理學 一講座
- 醫化學 一講座
- 病理學 一講座

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

右の勅令は北海道帝國大學農學部の講座増設及同大學醫學部の講座設置のことを定めたものである。醫學部に關しては大正八年二月勅令第十三號を以て、帝國大學及其學部に關する件が定められた際既に北海道帝國大學に醫學部が存在するものとして規定せられたれども、實は當時は唯醫學部の創立豫算が確定せるに止まり學部としては未開設の状態に在つたのであるが、今回創立準備が整ひ授業開始の期も近づいたので講座設置のことが定められたのである。(前章大學教育及大學豫備教育附學位の款參照)

同日勅令第二百二十一號を以て左の如く大正八年勅令第十七號九州帝國大學各學部に於ける講座に關する件中に改正が行はれた。

大正八年勅令第十七號中左ノ通改正ス

工學部ノ部中「採鑛學」ノ下「二講座」ヲ「三講座」ニ、「數學及力學」ノ下「一講座」ヲ「二講座」ニ、「物理學」ノ下「一講

座」ヲ「二講座」ニ、「造船學」ノ下「二講座」ヲ「四講座」ニ改ム

農學部ノ部中「植物學 一講座」ノ次ニ左ノ如ク加フ

- 植物病理學 一講座
- 畜産學 一講座
- 經濟學、農政學 一講座
- 生物化學 一講座
- 林學 一講座

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

同日又左記文部省令第二十八號が發せられた。

北海道帝國大學醫學部ハ大正十一年四月ヨリ授業ヲ開始ス

大正十年七月勅令第三百十號航空研究所官制に依り、航空機の基礎的學理に關する研究を掌る航空研究所が東京帝國大學に附置せられた。同研究所には所長所員其他の職員があるが、所長は東京帝國大學教授の中より文部大臣之を補し、所員は帝國大學の教授及助教の中より文部大臣之を補するものとした。而して同官制第九條には

第九條 帝國大學教授ニシテ所長又ハ所員ニ補セラレタル者ニハ講座ヲ擔任セシメサルコトヲ得

第七章 大正九年世界大戰直後より昭和七年末に至るまで



前項ノ規定ニ依リ講座ヲ擔任セサル教授及所員ニ補セラレ専ラ所務ニ従事スル助教授ハ所屬帝國大學ノ定員外ト  
ス  
との規定がある。

從來帝國大學の教授は必ず講座を擔任し（學部長又は醫學部附屬醫院長に補せられたるが爲講座を擔任せざることを得る場合及特別の理由に依り一時講座を離るる場合は別として）學術の研究と共に學生の教授指導を掌るべきものとし、講座を擔任せざる教授は之を認めなかつたのであるが、今回航空研究所官制の規定に依り研究所員として専ら研究のみに従事し、學生の教授を掌らざる所謂研究教授なるものが初めて認めらるることとなり、爾來帝國大學に附置せらるる研究所に關しては皆此例に倣つて研究教授が置かるるに至つた。即ち此意味に於て航空研究所官制は劃期的の規程と稱すべきものである。航空研究所官制の詳細は學校等職員關係の款に於て之を述べることにする。

大正十年十一月二十四日勅令第四百五十一號を以て左の如く大正八年勅令第十四號東京帝國大學各學部に於ける講座に關する件中に改正が行はれた。

大正八年勅令第十四號中左ノ通改正ス

法學部ノ部中「行政法 一講座」ヲ次ニ「行政學 一講座」ヲ加フ

醫學部ノ部中「皮膚病學、微毒學 一講座」ヲ「皮膚科學、泌尿器科學 一講座」ニ、「衛生學 二講座」ヲ「衛生學 一講座」及「微菌學 一講座」ニ改ム

工學部ノ部中「機械工學」ノ下「三講座」ヲ「四講座」ニ、「船舶工學」ノ下「三講座」ヲ「五講座」ニ、「造兵學」ノ下「三講

座」ヲ「四講座」ニ改メ「船用機關學 二講座」ノ次ニ「熱及熱機關學 一講座」ヲ、「電氣工學 四講座」ノ次ニ「一般電氣工學 一講座」ヲ、「力學 一講座」ノ次ニ「實驗工學 一講座」ヲ加フ  
文學部ノ部中「印度哲學」ノ下「一講座」ヲ「二講座」ニ改ム  
理學部ノ部中「放射能作學 一講座」ノ次ニ「物理金相學 一講座」及「結晶學 一講座」ヲ、「化學 四講座」ノ次ニ「分析化學 一講座」ヲ加フ  
農學部ノ部中「畜產學 一講座」ノ次ニ「生物化學 一講座」ヲ加フ

附 則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

大正十年十一月勅令第四百五十號東京天文臺官制に依り東京天文臺が東京帝國大學に附置せらるることとなつた。東京天文臺は從來東京帝國大學理學部附屬となつて居たが、今回は之を東京帝國大學に附置することとしたのである。東京天文臺官制の詳細は學校等職員關係の款に於て之を述べることにする。

九州帝國大學農學部に農藝化學科及林學科が置かるることとなり、大正十一年二月二日左記文部省令第八號が發せられた。

九州帝國大學農學部ニ農藝化學科及林學科ヲ置キ本年四月ヨリ授業ヲ開始ス



原内閣の時の高等教育機關大擴張計畫に依り十箇の高等學校が増設せられ尙ほ其前新潟、松本、山口、松山、山形、佐賀、水戸の七高等學校が新設せらるることとなつて居たので、此等十七校の卒業者にして大學に入つて醫學を修めんとする者を收容する爲に大學醫學部を擴張する必要あるを以て、新潟、金澤、千葉、岡山、長崎の五官立醫學專門學校の設備を利用して單科大学たる官立醫科大學を創設することが、高等教育機關大擴張計畫の中に包含せられて居たことは前既に述べた通である。(前章高等教育機關創設及擴張計畫の款参照)

右の五大學新設は之を前後二回に分ち先づ二校を大正十一年度に、残り三校を大正十二年度に行ふ豫定であり、醫學部を備ふる帝國大學の所在地との關係を考へ、全國に於ける醫學最高教育機關の配置の上より見て新潟及岡山二校の昇格を先にすることに決定し、即ち大正十一年三月勅令第四十三號官立醫科大學官制の制定に依り、新潟醫科大學及岡山醫科大學が設けられ、新潟醫學專門學校長池田廉一郎が新潟醫科大學長に、岡山醫學專門學校長藤田秀太郎が岡山醫科大學長に任ぜられた。

兩醫科大學の成立と共に從來の新潟醫學專門學校及岡山醫學專門學校は廢止せられて、文部省直轄諸學校官制中より削除せられた。兩醫學專門學校に於ては大正十年度より生徒の新募集を停止したから第一及第二學年生は全く無かつたが、現在の第三學年以上の生徒は之を新に兩醫科大學の附屬として設けられた醫學專門部(專門學校令に依るもの)に移して卒業せしむることとした。

官立醫科大學には講座制を設けざることとした。  
官立醫科大學官制の詳細は學校等職員關係の款に於て之を述べることにする。

大正十一年四月四日左記文部省令第十五號が發せられた。

新潟醫科大學及岡山醫科大學ニ醫學科ヲ置キ本年四月ヨリ授業ヲ開始ス

大正十一年五月十六日勅令第二百六十五號を以て左の如く大正八年勅令第十八號北海道帝國大學各學部に於ける講座に關する件に改正が行はれた。

大正八年勅令第十八號中左ノ通改正ス

農學部ノ部中「家畜衛生學 一講座」ノ次ニ「比較病理學 一講座」ヲ加ヘ畜産學ノ下「二講座」ヲ「三講座」ニ改ム  
醫學部ノ部中「病理學 一講座」ノ次ニ「細菌學 一講座」、「耳鼻咽喉科學 一講座」、「藥物學 一講座」及「眼科學 一講座」ヲ加ヘ解剖學ノ下「一講座」ヲ「三講座」ニ、生理學ノ下「一講座」ヲ「二講座」ニ、病理學ノ下「一講座」ヲ「二講座」ニ改ム

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

大正十一年五月三十日勅令第二百九十一號を以て左の如く大正八年勅令第十七號九州帝國大學各學部に於ける講座に關する件に改正が行はれた。

大正八年勅令第十七號中左ノ通改正ス

醫學部ノ部中「耳鼻咽喉科學 一講座」ノ次ニ「齒科學 一講座」ヲ加フ

第七章

大正九年世界大戰直後より昭和七年末に至るまで



工學部ノ部中造船學ノ下「四講座」ヲ「五講座」ニ改ム  
 農學部ノ部中「農學 二講座」ノ次ニ「農藝化學 一講座」及「農業工學 一講座」ヲ、「動物學 二講座」ノ次ニ「養蠶學 一講座」ヲ「植物學 一講座」ノ次ニ「園藝學 一講座」ヲ、「生物化學 一講座」ノ次ニ「農産製造學 一講座」ヲ加ヘ、農學ノ下「二講座」ヲ「三講座」ニ、林學ノ下「一講座」ヲ「四講座」ニ改ム

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

大正十一年六月一日勅令第三百號を以て左の如く大正八年勅令第十五號京都帝國大學各學部に於ける講座に關する件中に改正が行はれた。

大正八年勅令第十五號中左ノ通改正ス

法學部ノ部中「行政法 二講座」ノ次ニ「行政學 一講座」ヲ、「國際私法 一講座」ノ次ニ「海法學 一講座」ヲ、「比較法制史 一講座」ノ次ニ「外交史 一講座」ヲ加フ  
 工學部ノ部中土木工學ノ下「五講座」ヲ「六講座」ニ、機械工學ノ下「六講座」ヲ「七講座」ニ、電氣工學ノ下「五講座」ヲ「六講座」ニ、採鐵學ノ下「三講座」ヲ「四講座」ニ改メ、「工業化學 六講座」ノ次ニ「化學機械學 一講座」ヲ加フ  
 文學部ノ部中宗敎學ノ下「一講座」ヲ「二講座」ニ改ム  
 理學部ノ部中「生物化學 一講座」ノ次ニ「分析化學 一講座」ヲ加ヘ宇宙物理學ノ下「一講座」ヲ「二講座」ニ、地球物理學ノ下「二講座」ヲ「三講座」ニ改ム

經濟學部ノ部中「統計學 一講座」ノ次ニ「社會政策 一講座」  
經濟史 一講座ヲ加フ

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

大正十一年八月九日勅令第三百六十四號を以て左の如く大正八年勅令第十六號東北帝國大學各學部に於ける講座に關する件中に改正が行はれた。

大正八年勅令第十六號中左ノ通改正ス

理學部ノ部中「化學 四講座」ノ次ニ「生物學 二講座」ヲ加ヘ、「地質學 三講座」ヲ  
「地質學 三講座」  
 古生物學 一講座  
 岩石礦物學 一講座  
 礦床學 一講座ニ改ム

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

同日又左記文部省令第二十六號が發せられた。

東北帝國大學理學部ニ生物學科ヲ置キ大正十二年四月ヨリ授業ヲ開始ス

大正十一年八月勅令第三百六十一號を以て金屬材料研究所官制が定められ、東北帝國大學に金屬材料研究所が附置せられた。これは鐵鋼研究所を擴張したものである。金屬材料研究所官制に關する詳細は學校等職員關係の款に於て之を



述べることにする。

大正十一年八月十七日勅令第三百七十八號を以て左の如く大正八年勅令第十四號東京帝國大學各學部に於ける講座に關する件中に改正が行はれた。

大正八年勅令第十四號中左ノ通改正ス

工學部ノ部中「石油採鑛學 一講座」ノ次ニ「工業分析化學 一講座」及「應用地質學 一講座」ヲ加ヘ、「火藥學」ノ下「一講座」ヲ「二講座」ニ、「採鑛學 三講座」ヲ「鑛山學 四講座」ニ、「應用力學」ノ下「一講座」ヲ「二講座」ニ改ム

文學部ノ部中「獨逸語學、獨逸文學」ノ下「一講座」ヲ「二講座」ニ改ム

理學部ノ部中「數學 五講座」ノ次ニ「物理數學 一講座」ヲ、「物理學 三講座」ノ次ニ「工業物理學 一講座」ヲ、「化學 四講座」ノ次ニ「電氣化學 一講座」ヲ加フ

農學部ノ部中「農藝化學、化學 三講座」ヲ「農藝化學、化學 五講座」ニ、「農政學、經濟學」ノ下「二講座」ヲ「三講座」ニ改ム

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

原内閣の時の高等教育機關擴張計畫の一部として、東北帝國大學及九州帝國大學に各法文學部を新設することとなつた（初め豫算提出の際は法學部を置く案であつたが豫算確定後法文學部に變更せられた）ことは前章高等教育機關創設及擴張計

畫の款に於て述べた通であるが、東北帝國大學法文學部の創立準備が整つたので、大正十一年八月二十九日勅令第三百九十六號を以て左の如く大正八年勅令第十三號帝國大學及其の學部に關する件中に改正が行はれ、東北帝國大學に法文學部が設置せらるることとなつた。

大正八年勅令第十三號中左ノ通改正ス

東北帝國大學ノ部中「工學部」ノ次ニ「法文學部」ヲ加フ

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

同日又勅令第三百九十八號を以て左の如く大正八年勅令第十六號東北帝國大學各學部に於ける講座に關する件中に改正が行はれた。

大正八年勅令第十六號中左ノ通改正ス

工學部ノ部ノ次ニ左ノ如ク加フ

- 法文學部
- 憲法學 一講座
- 民法學 一講座
- 經濟學 一講座
- 史學 二講座



- 哲學 一講座
- 印度學 一講座
- 心理學 一講座

附 則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

大正十一年九月二十日左記文部省令第三十號が發せられた。

東北帝國大學法文學部ハ大正十二年四月ヨリ授業ヲ開始ス

大正十二年一月二十日勅令第十四號を以て左の如く、大正八年勅令第十七號九州帝國大學各學部に於ける講座に關する件中に改正が行はれた。

大正八年勅令第十七號中左ノ通改正ス

醫學部ノ部中「衛生學 一講座」ヲ「衛生學 一講座 細菌學 一講座」ニ改ム

附 則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

大正十二年二月十三日文部省令第七號を以て左の如く大正八年文部省令第十五號私立の大學及高等學校の基本財産供

託に關する件中に改正が行はれた。

大正八年文部省令第十五號中左ノ通り改正ス

第四條中「文部大臣ニ於テ特ニ認メタル株券」トアルヲ「文部大臣ニ於テ特ニ認メタル有價證券」ト改ム

附 則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

大正十二年三月勅令第九十三號官立醫科大學官制中の改正に依り千葉醫科大學、金澤醫科大學及長崎醫科大學が設けられ千葉醫學專門學校校長三輪德實が千葉醫科大學長に、金澤醫學專門學校長高安右人が金澤醫科大學長に、長崎醫學專門學校長山田基が長崎醫科大學長に任ぜられた。

右は前既に述べた如く原内閣の時の高等教育機關大擴張計畫の一部として新潟、岡山、千葉、金澤及長崎の五官立醫學專門學校の設備を利用して單科の官立醫科大學を創設する事となつて居て、大正十一年に新潟及岡山の醫科大學が設置せられたので今回は残りの三醫科大學の設置を見るに至つたのである。

三醫科大學の成立と共に從來の千葉醫學專門學校、金澤醫學專門學校及長崎醫學專門學校は廢止せられて文部省直轄諸學校官制中より削除せられた。前年に昇格した新潟醫學專門學校及岡山醫學專門學校には從來醫學科があるのみであつたが、今回の千葉、金澤及長崎の三醫學專門學校には醫學科の外に藥學科があり、而して新設の三醫科大學には藥學科を置く計畫は無かつたので、三醫學專門學校廢止後の處置に關しては自ら新潟、岡山の場合とは異ならざるを得なかつた。即ち醫學科に關しては三醫學專門學校に於て大正十一年度より生徒の新募集を停止したから第一及第二學年は全



くなかつたが、第三學年以上の生徒は之を新に三醫科大學の附屬として設けられた醫學專門部（専門學校令に依るもの）に移して卒業せしむることとした。此の醫學專門部は全く現在生徒の爲に經過的に設けられたものに過ぎぬのであるが、藥學科に關しては専門學校程度の藥學教育機關として、恒久的に三醫科大學に附屬藥學專門部（専門學校令に依るもの）を設けることとし、現在の藥學科生徒は之を藥學專門部に移し且第一學年生も豫め附屬藥學專門部生徒たるべきものとして之を募集したのであつた。尙ほ官立醫科大學官制改正のことは學校等職員關係の款に於て詳述することとする。

大正十二年四月二日左記文部省令第十四號が發せられた。

千葉醫科大學、金澤醫科大學及長崎醫科大學ニ醫學科ヲ置キ本年四月ヨリ授業ヲ開始ス

大正十二年五月九日勅令第二百三十二號を以て左の如く大正八年勅令第十七號九州帝國大學各學部に於ける講座に關する件中に改正が行はれた。

大正八年勅令第十七號中左ノ通改正ス

農學部ノ部中「林學 四講座」ノ次ニ「氣象學、統計學 一講座」ヲ加ヘ「農藝化學」ノ下「二講座」ヲ「三講座」ニ、「畜產學」ノ下「一講座」ヲ「二講座」ニ、「經濟學、農政學」ノ下「一講座」ヲ「二講座」ニ、「林學」ノ下「四講座」ヲ「五講座」ニ改ム

附 則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

大正十二年五月十六日勅令第二百四十三號を以て左の如く大正八年勅令第十六號東北帝國大學各學部に於ける講座に關する件中に改正が行はれた。

大正八年勅令第十六號中左ノ通改正ス

理學部ノ部中「生物學」ノ下「二講座」ヲ「三講座」ニ、「鐵鋼學」ノ下「二講座」ヲ「三講座」ニ改ム  
工學部ノ部中「內燃機關學 一講座」ノ次ニ「金屬工學 四講座」ヲ加フ  
法文學部ノ部中「經濟學 一講座」ノ次ニ「國家原論 一講座」、「行政法學 一講座」及「商法學 一講座」ヲ、「心理學 一講座」ノ次ニ「倫理學 一講座」、「美學 一講座」、「教育學 一講座」、「文化史學 二講座」及「支那學 一講座」ヲ加フ

附 則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

同日又勅令第二百四十五號を以て左の如く大正八年勅令第十八號北海道帝國大學各學部に於ける講座に關する件中に改正が行はれた。

大正八年勅令第十八號中左ノ通改正ス

醫學部ノ部中「眼科學 一講座」ノ次ニ「產婦人科學 一講座」、「小兒科學 一講座」、「皮膚泌尿科學 一講座」、「法醫學 一講座」ヲ加ヘ「內科學」ノ下「一講座」ヲ「二講座」ニ、「外科學」ノ下「一講座」ヲ「二講座」ニ改ム

第七 章

大正九年世界大戰直後より昭和七年末に至るまで



附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

大正十二年八月二十八日勅令第三百七十二號を以て左の如く大正八年勅令第十四號東京帝國大學各學部に於ける講座に關する件に改正が行はれた。

大正八年勅令第十四號中左ノ通改正ス

法學部ノ部中「法理學」一講座ノ次ニ「米國憲法歴史及外交」一講座ヲ加フ

工學部ノ部中「土木工學」ノ下「五講座」ヲ「六講座」ニ改ム

理學部ノ部中「結晶學」一講座ノ次ニ「氣象學」一講座ヲ加フ

農學部ノ部中「農學」ノ下「二講座」ヲ「三講座」ニ改メ「水産海洋學」一講座ノ次ニ「水産化學」一講座ヲ加フ。

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

原内閣の時の高等教育機關大擴張計畫の中に京都帝國大學に農學部を設くるの計畫があつたが、其創立準備が整つたので、大正十二年十一月二十八日勅令第四百八十九號を以て左の如く大正八年勅令第十三號帝國大學及其の學部に關する件に改正が行はれ、京都帝國大學に農學部が設置せらるることとなつた。

大正八年勅令第十三號中左ノ通改正ス

京都帝國大學ノ部中「經濟學部」ノ次ニ「農學部」ヲ加フ

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

京都帝國大學農學部の授業開始は大正十三年四月からであつた。

同日又勅令第四百九十號を以て左の如く大正八年勅令第十五號京都帝國大學各學部に於ける講座に關する件に改正が行はれた。

大正八年勅令第十五號中左ノ通改正ス

經濟學部ノ部ノ次ニ左ノ如ク加フ

農學部

林 學 二講座

農林化學 二講座

農林生物學 一講座

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

京都帝國大學農學部には農學科、林學科、農林化學科、農林生物學科、農林工學科及農林經濟學科の六學科を置くこととした。



大正十二年十二月東京帝國大學理學部に地震學科が設けられた。  
 大正十三年四月東北帝國大學工學部の學科に金屬工學科が加へられた。  
 同月又勅令第九十四號を以て官立醫科大學官制中に改正が行はれ、新潟醫科大學の附屬醫學專門部が廢止せられた。  
 これは兩醫科大學設立の當時廢止となつた新潟、岡山兩醫學專門學校の現在生徒にして附屬醫學專門部に移された者が  
 皆卒業して最早專門部の必要を見ざるに至つたが故である。

大正十三年五月二十九日勅令第三百三十三號を以て左の如く大正八年勅令第十五號京都帝國大學各學部に於ける講座に  
 關する件に改正が行はれた。これは農學部が彌授業開始に至つたので講座が増設せられたのである。

大正八年勅令第十五號中左ノ通改正ス  
 農學部ノ部ヲ左ノ如ク改ム

- |       |     |
|-------|-----|
| 農學部   |     |
| 農作園藝學 | 二講座 |
| 林學    | 三講座 |
| 農林化學  | 四講座 |
| 農林生物學 | 三講座 |
| 農林工學  | 二講座 |
| 農林經濟學 | 一講座 |

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

大正十三年七月八日勅令第六十號を以て左の如く大正八年勅令第十四號東京帝國大學各學部に於ける講座に關する  
 件に改正が行はれた。

大正八年勅令第十四號中左ノ通改正ス  
 法學部ノ部中「政治學 一講座」ヲ「政治學、政治學史 二講座」ニ改ム  
 理學部ノ部中「植物學 三講座」ノ次ニ「植物生理化學 一講座」ヲ加フ  
 經濟學部ノ部中「植民政策 一講座」ノ次ニ「社會政策 一講座」ヲ加フ

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

同日勅令第六十一號を以て左の如く大正八年勅令第十六號東北帝國大學各學部に於ける講座に關する件に改正が  
 行はれた。

大正八年勅令第十六號中左ノ通改正ス  
 理學部ノ部中「生物學 三講座」ヲ「生物學 五講座」ニ改ム  
 法文學部ノ部中「商法學 一講座」ノ次ニ「國際法學 一講座」、「刑法學 一講座」、「政治學 一講座」、「法理學 一講



座」及「法史學 一講座」ヲ加ヘ「支那學 一講座」ノ次ニ「宗教學 一講座」「國文學 一講座」及「西洋文學 一講座」ヲ加ヘ「民法學 一講座」ヲ「民法學 三講座」ニ、「經濟學 一講座」ヲ「經濟學 二講座」ニ、「史學 一講座」ヲ「史學 三講座」ニ、「哲學 一講座」ヲ「哲學 三講座」ニ改ム

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

同日勅令第六十二號を以て左の如く大正八年勅令第十七號九州帝國大學各學部に於ける講座に關する件中に改正が行はれた。

大正八年勅令第十七號中左ノ通改正ス

醫學部ノ部中「皮膚病學、毒毒學 一講座」ヲ「皮膚科學、泌尿器科學 二講座」ニ改ム

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

同日又勅令第六十三號を以て左の如く大正八年勅令第十八號北海道帝國大學各學部に於ける講座に關する件中に改正が行はれた。

大正八年勅令第十八號中左ノ通改正ス

農學部ノ部中「森林工學 一講座」ノ次ニ「農林法律學 一講座」及「植民學 一講座」ヲ加ヘ「農政學、植民學 一講

座」ヲ「農政學 一講座」ニ改ム

醫學部ノ部中「法醫學 一講座」ノ次ニ「精神病學 一講座」及「衛生學 一講座」ヲ加ヘ「內科學 二講座」ヲ「內科學 三講座」ニ改ム

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

大正十三年八月東北帝國大學理學部の地質學科が地質學古生物學科と岩石礦物礦床學科との二に分たれた。

原内閣の時の高等教育機關大擴張計畫の中に、東北帝國大學及九州帝國大學に各法文學部を新設するの件が含まれて居て(初め豫算提出の際は法學部を置くの案であつたが豫算確定後法文學部に變更せられた)、既に東北帝國大學の法文學部は大正十一年八月勅令第三百九十六號を以て設置せられたが、九州帝國大學法文學部も創立準備が整つたので、大正十三年九月二十六日勅令第二百二十四號を以て左の如く大正八年勅令第十三號帝國大學及其學部に關する件中に改正が行はれ、九州帝國大學に法文學部が設置せらるることとなつた。又高等教育機關大擴張計畫の中には北海道帝國大學に工學部を新設するの件があつて其創立準備も整つたので、右の大正十三年九月勅令第二百二十四號を以て北海道帝國大學に工學部が設置せらるることとなつたのである。

大正八年勅令第十三號中左ノ通改正ス

九州帝國大學ノ部中「農學部」ノ次ニ「法文學部」ヲ、北海道帝國大學ノ部中「醫學部」ノ次ニ「工學部」ヲ加フ



附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

尙ほ北海道帝國大學に於ては附屬の豫科があり學部は豫科修了者を入學せしむることとして居るので、今回工學部の新設に就ても之に入學せしむべく豫科生を豫め増募したのであつた。(豫科擴張費は高等教育機關大擴張計畫の中に包含せられてゐた。)

九州帝國大學法文學部及北海道帝國大學工學部の授業開始は何れも大正十四年四月からであつた。

同日勅令第二百二十五號を以て左の如く大正八年勅令第十七號九州帝國大學各學部に於ける講座に關する件中に改正が行はれた。

大正八年勅令第十七號中左ノ通改正ス

農學部ノ次ニ左ノ如ク加フ

法文學部

哲學、哲學史

一講座

倫理學

一講座

社會學

一講座

民法

一講座

政治學

一講座

政治史、外交史

一講座

經濟學

一講座

西洋史學

一講座

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

同日又勅令第二百二十六號を以て左の如く大正八年勅令第十八號北海道帝國大學各學部に於ける講座に關する件中に改正が行はれた。

大正八年勅令第十八號中左ノ通改正ス

醫學部ノ次ニ左ノ如ク加フ

工學部

橋梁學

一講座

鐵道學

一講座

水工學

一講座

電氣機械學

一講座

原動機學

一講座

鑛山學

一講座

第七章

大正九年世界大戰直後より昭和七年末に至るまで



附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

大正十四年四月勅令第七十九號を以て官立醫科大學官制中に改正が行はれ千葉、金澤、長崎三醫科大學の附屬醫學專門部が廢止せられた。これは三醫科大學設立の當時廢止となつた千葉、金澤、長崎三醫學專門學校の生徒にして附屬醫學專門部に移されたものが、皆卒業して最早專門部の必要を見ざるに至つたが故である。

大正十四年五月十九日勅令第九十四號を以て左の如く大正八年勅令第十五號京都帝國大學各學部に於ける講座に關する件中に改正が行はれた。

大正八年勅令第十五號中左ノ通改正ス

文學部ノ部中「西洋文學」一講座ヲ「西洋文學」三講座ニ改ム

農學部ノ部ヲ左ノ如ク改ム

農學部

作物學

一講座

育種學

一講座

園藝學

一講座

林學

三講座

農藝化學	三講座
榮養化學	一講座
農産製造學	一講座
林産化學	一講座
植物病理學	一講座
昆蟲學	一講座
實驗遺傳學	一講座
農業工學	二講座
農業機械學	一講座
林業工學	一講座
農業經營學	一講座
農政學	一講座
林政學	一講座
農史	一講座

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス



同日勅令第九十六號を以て左の如く大正八年勅令第十七號九州帝國大學各學部に於ける講座に關する件中に改正が行はれた。

大正八年勅令第十七號中左ノ通改正ス

法文學部ノ部中「西洋史學 一講座」ノ次ニ「法理學 一講座」、「憲法 一講座」、「國際法、國際私法 二講座」、「財政學 一講座」、「心理學 一講座」、「教育學 一講座」、「英文學 一講座」、「獨文學 一講座」及「國史學 一講座」ヲ加ヘ「哲學、哲學史 一講座」ヲ「哲學、哲學史 二講座」ニ、「經濟學 一講座」ヲ「經濟學 四講座」ニ改ム

附 則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

同日又勅令第九十八號を以て左の如く大正八年勅令第十八號北海道帝國大學各學部に於ける講座に關する件中に改正が行はれた。

大正八年勅令第十八號中左ノ通改正ス

醫學部ノ部中「外科學 二講座」ヲ「外科學 三講座」ニ改ム  
工學部ノ部中「鑛山學 一講座」ノ次ニ「理學 二講座」、「應用力學 三講座」、「混凝土工學 一講座」、「鑛山機械學 一講座」、「應用地質學 一講座」、「電氣磁氣學 一講座」及「電力及電力應用學 一講座」ヲ加ヘ「水工學 一講座」ヲ「水工學 二講座」ニ、「原動機學 一講座」ヲ「原動機學 二講座」ニ、「鑛山學 一講座」ヲ「鑛山學 二講座」ニ改ム

附 則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

大正十四年六月九日勅令第二百二十一號を以て左の如く大正八年勅令第十四號東京帝國大學各學部に於ける講座に關する件中に改正が行はれた。

大正八年勅令第十四號中左ノ通改正ス

農學部ノ部中「農業工學 一講座」ヲ「農業工學 二講座」ニ改ム

附 則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

大正十四年八月一日勅令第二百六十四號を以て左の如く大正八年勅令第十六號東北帝國大學各學部に於ける講座に關する件中に改正が行はれた。

大正八年勅令第十六號中左ノ通改正ス

理學部ノ部中「生物學 五講座」ヲ「生物學 六講座」ニ改ム  
工學部ノ部中「金屬工學 四講座」ヲ「金屬工學 六講座」ニ改ム  
法文學部ノ部中「經濟學 二講座」ヲ「經濟學 五講座」ニ、「商法學 一講座」ヲ「商法學 二講座」ニ、「史學 三講座」ヲ「史學 五講座」ニ、「印度學 一講座」ヲ「印度學 二講座」ニ、「支那學 一講座」ヲ「支那學 二講座」ニ、「國文學 一講座」ヲ「國文學 二講座」ニ改メ「法史學 一講座」ノ次ニ「財政學 一講座」、「社會法論 一講座」及「社會

第七章 大正九年世界大戰直後より昭和七年末に至るまで



學 一講座」ヲ加フ

附 則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

大正十四年十一月勅令第三百十一號地震研究所官制に依り地震研究所が東京帝國大學に附置せられた。地震研究所官制の詳細は學校等職員關係の款に於て之を述べることとする。

大正十五年五月十三日勅令第二百二十一號を以て左の如く大正八年勅令第十七號九州帝國大學各學部に於ける講座に關する件に改正が行はれた。

大正八年勅令第十七號中左ノ通改正ス

法文學部ノ部中「國史學 一講座」ヲ次ニ「宗教學 一講座」、「支那哲學史 一講座」、「印度哲學史 一講座」、「國文學 一講座」、「佛文學 一講座」、「行政法 一講座」、「民事訴訟法 一講座」、「刑法、刑事訴訟法 一講座」、「商法 一講座」及「法制史 一講座」ヲ加ヘ「哲學、哲學史 二講座」ヲ「哲學、哲學史 三講座」ニ、「民法 一講座」ヲ「民法 二講座」ニ、「經濟學 四講座」ヲ「經濟學 五講座」ニ、「國史學 一講座」ヲ「國史學 二講座」ニ改ム

附 則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

大正十五年六月二十一日勅令第八十二號を以て左の如く大正八年勅令第十五號京都帝國大學各學部に於ける講座に關する件に改正が行はれた。

大正八年勅令第十五號中左ノ通改正ス

法學部ノ部中「法制史 一講座」ヲ「日本法制史 一講座」ニ、「比較法制史 一講座」ヲ「西洋法制史 一講座」ニ改ム  
文學部ノ部中「宗教學 二講座」ヲ「宗教學 三講座」ニ改ム  
農學部ノ部中「農史 一講座」ヲ次ニ「造園學 一講座」、「醱酵生理及醸造學 一講座」、「應用植物學 一講座」及「農業計算學 一講座」ヲ加ヘ「園藝學 一講座」ヲ「園藝學 二講座」ニ、「林業工學 一講座」ヲ「林業工學 二講座」ニ改ム

附 則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

同日勅令第八十三號を以て左の如く大正八年勅令第十六號東北帝國大學各學部に於ける講座に關する件に改正が行はれた。

大正八年勅令第十六號中左ノ通改正ス

理學部ノ部中「化學 四講座」ヲ「化學 五講座」ニ改ム

附 則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

第七章 大正九年世界大戰直後より昭和七年末に至るまで



同日又勅令第百八十四號を以て左の如く大正八年勅令第十八號北海道帝國大學各學部に於ける講座に關する件に改正が行はれた。

大正八年勅令第十八號中左ノ通改正ス

工學部ノ部中「電力及電力應用學 一講座」ノ次ニ「機械工作學 一講座」、「選鑛學 一講座」及「燃料學 一講座」ヲ加ヘ「鐵道學 一講座」ヲ「鐵道學 二講座」ニ、「電氣機械學 一講座」ヲ「電氣機械學 二講座」ニ、「電力及電力應用學 一講座」ヲ「電力及電力應用學 二講座」ニ改ム

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

大正十五年七月二日勅令第二百四十七號を以て左の如く大正八年勅令第十四號東京帝國大學各學部に於ける講座に關する件に改正が行はれた。

大正八年勅令第十四號中左ノ通改正ス

醫學部ノ部中「內科學 三講座」ノ次ニ「內科物理學 一講座」ヲ加ヘ「皮膚科學、泌尿器科學 一講座」ヲ「皮膚科學 一講座」ニ改ム

附則

文學部ノ部中「印度哲學 一講座」ヲ「印度哲學 三講座」ニ、「倫理學 一講座」ヲ「倫理學 二講座」ニ改ム

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

大正十五年十月勅令第三百十三號化學研究所官制に依り化學研究所が京都帝國大學に附置せられた。  
化學研究所官制の詳細は學校等職員關係の款に於て之を述べることにする。

大學令第五條は「公立大學ハ特別ノ必要アル場合ニ於テ北海道及府縣ニ限り之ヲ設立スルコトヲ得」と規定し市町村に對しては大學設立の權能を與へて居らぬ。蓋し下級自治團體なる市町村には主として小學校、實業補習學校の如き初等教育の施設に其力を傾注せしめんとする趣旨に出でたものであらう。然るに大都市の如きに在ては初等教育の施設を充實して尙ほ大學を經營する餘力を有し且つ其必要を感じる場合もあり、現に大阪市に於ては商業大學の設置を計畫しつつあるといふ事情もあつたので、大學令中の改正に依り市にも大學設置の權能を與ふる趣旨を以て、大正十五年十二月四日左記諮詢第八號が文政審議會に諮詢せられた。

諮詢第八號

現行大學令ニ於テハ大學ヲ設立シ得ヘキ公共團體ハ北海道及府縣ニ限ルノ制ナルモ之ヲ改正シテ特別ノ必要アル場合ニ限り市ニ於テモ大學ヲ設立シ得ルコト、ナサントス  
右ニ關スル意見ヲ求ム

答 申

右に關し文政審議會は大正十五年十二月十一日左の答申を爲した。

諮詢第八號大學令中改正ニ關スル件ハ提案ノ通實施相成可然モノト認ム

第七章 大正九年世界大戰直後より昭和七年末に至るまで



昭和二年九月勅令第二百八十九號を以て東京帝國大學附置傳染病研究所の官制中に改正が行はれ、他の附置研究所に於けると同じく所員制度が設けられ、所員たる大學教授は講座を擔任せざるを得ることとなつた。

昭和二年十月八日勅令第三百四號を以て左の如く大正八年勅令第十四號東京帝國大學各學部に於ける講座に關する件に改正が行はれた。

大正八年勅令第十四號中左ノ通改正ス

醫學部ノ部中「醫化學」ヲ「生化學」ニ、「藥物學」ヲ「藥理學」ニ改ム

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

同日勅令第三百五號を以て左の如く大正八年勅令第十五號京都帝國大學各學部に於ける講座に關する件に改正が行はれた。

大正八年勅令第十五號中左ノ通改正ス

文學部ノ部中「哲學、哲學史 四講座」ヲ「哲學、哲學史 五講座」ニ改ム

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

同日勅令第三百六號を以て左の如く大正八年勅令第十六號東北帝國大學各學部に於ける講座に關する件に改正が行はれた。

大正八年勅令第十六號中左ノ通改正ス

理學部ノ部中「礦床學 一講座」ノ次ニ「石油礦床學 一講座」ヲ加フ

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

同日又勅令第三百七號を以て左の如く大正八年勅令第十七號九州帝國大學各學部に於ける講座に關する件に改正が行はれた。

大正八年勅令第十七號中左ノ通改正ス

醫學部ノ部中「齒科學」ヲ「齒科學、口腔外科學」ニ改ム

工學部ノ部中「化學 一講座」ヲ「化學 二講座」ニ改ム

法文學部

哲學、哲學史 三講座

倫理學 一講座

心理學 一講座

社會學 一講座

第七章 大正九年世界大戰直後より昭和七年末に至るまで



教育學	一講座
宗教學	一講座
美學、美術史	一講座
支那哲學史	一講座
印度哲學史	一講座
法理學	一講座
憲法	一講座
行政法	一講座
民法	三講座
民事訴訟法	一講座
刑法、刑事訴訟法	一講座
商法	二講座
社會法	一講座
國際法、國際私法	二講座
法制史	一講座
政治學	一講座
政治史、外交史	一講座

經濟學	七講座
財政學	一講座
國史學	二講座
西洋史學	一講座
東洋史學	一講座
國文學	一講座
支那文學	一講座
英文學	一講座
佛文學	一講座
獨文學	一講座

附 則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

昭和二年十一月二十二日官公私立大學に對して文部次官より左記發專一四一號通牒を發した。これは高等學校の試験制度を改めた際であつたのである。

試験制度改正ニ關スル件

今般試験制度ニ關シ文部省訓令ノ發布アリタル處右ハ從來ノ試験制度ニ伴ツテ生セル諸種ノ弊害ヲ除去スルヲ以テ



旨趣トセルモノナルニ付貴學ニ於テモ此ノ旨趣ニ則リ右ニ準據シテ適當ニ御措置相成様致度依命此段通牒ス  
「追テ御參考ノ爲ニ官立高等學校高等科入學者選抜方法要項ヲ添附ス」

昭和二年十二月十七日左記諮詢第十號學位令中改正の件が文政審議會に附議せられた。

諮詢第十號

現行學位令ニ依レハ學位ヲ授與スルニモ又學位ノ授與ヲ取消スニモ大學ニ於テ文部大臣ノ認可ヲ經ルヲ要スル制度ナルモノ之ヲ改正シテ學位ヲ授與シ又ハ其ノ授與ヲ取消スハ大學限リニテ之ヲ爲シ得ルコト、ナサントス  
右ニ關スル意見ヲ求ム

右に關し文政審議會は昭和三年三月三十日左の答申を爲した。

答 申

諮詢第十號學位令中改正ニ關スル件ハ提案ノ通實施相成リ可然モノト認ム

右の改正案は遂に實施せられず終つた。

昭和三年一月二十日勅令第七號を以て左の如く大學令中に改正が行はれた。

大學令中左ノ通改正ス

第五條中「北海道及府縣」ヲ「北海道、府縣及市」ニ改ム

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

右は曩に文政審議會に諮詢し其可決を経た大學令中改正の件が實施せられたのである。

昭和四年一月二十四日勅令第四號を以て左の如く大正八年勅令第十八號北海道帝國大學各學部に於ける講座に關する  
件中に改正が行はれた。

大正八年勅令第十八號中左ノ通改正ス

醫學部ノ部中「藥物學」ヲ「藥理學」ニ改ム

附則

本令ハ昭和四年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

原内閣の時大正八年の高等教育機關擴張計畫に依り大學、高等學校及專門學校の擴張は一應定まつたのであるが、其後の情勢に應じ多少此計畫を補充するの必要があつたので、原内閣の後を承けた高橋(是清)内閣に引續き文相であつた中橋徳五郎は東京高等工業學校の設備を利用して東京工業大學、大阪高等工業學校の設備を利用して大阪工業大學、神戸高等商業學校の設備を利用して神戸商業大學を設け、又東京高等師範學校の専攻科を擴充して東京文理科大學、廣島高等師範學校の専攻科を擴充して廣島文理科大學を設くるの計畫即ち所謂高等教育機關擴張整備計畫なるものを定め、五大學創立費を大正十年の暮から開かれた第四十五議會に追加豫算として提出し、衆議院では可決せられたが貴族院に於て審議未了となり遂に成立しなかつた。次で大正十一年六月には高橋内閣が退いて加藤(友三郎)内閣が之に代つたが



其文相であつた鎌田榮吉は前文相中橋の計畫を繼承し、五大學創立費豫算を同年の暮から開かれた第四十六議會に提出して可決せられた。然るに大正十二年加藤内閣に次で成立した山本(權兵衛)内閣の時に關東地方に大震災があり、豫算全體の大繰延となつたので五大學創立費の豫算も其施行が後れたのであるが、漸く創立準備が整つたので昭和四年四月勅令第三十六號官立工業大學官制、同月勅令第三十七號官立文理科大學官制の制定及同月勅令第三十八號官立商科大學官制の改正に依り東京工業大學、大阪工業大學、東京文理科大學、廣島文理科大學及神戸商業大學が設立せられ、東京高等工業學校長中村幸之助が東京工業大學長に、大阪高等工業學校長事務取扱堤正義が大阪工業大學長に、東京高等師範學校長三宅米吉が東京文理科大學長に、廣島高等師範學校長吉田賢龍が廣島文理科大學長に、神戸高等商業學校長田崎慎治が神戸商業大學長に任ぜられた。(學制改革問題及高等教育機關擴張整備計畫の款參照)

五大學の授業開始は何れも昭和四年四月からであつた。

東京高等工業學校、大阪高等工業學校及神戸高等商業學校は東京工業大學、大阪工業大學及神戸商業大學の設立と共に廢止せられ、現在生徒の卒業に至るまでの經過的施設として三大學に各専門部(専門學校令に依るもの)が設けらるることとなつた。

東京高等師範學校及廣島高等師範學校は同月勅令第三十九號高等師範學校官制に依り各東京文理科大學、廣島文理科大學に附置せらるることとなつた。

新設の五大學には講座制を設けざることとした。五大學官制及東京廣島兩高等師範學校官制は學校等職員關係の款に於て之を詳述することとする。

從來熊本縣立であつた醫科大學が官立に移管せらるることとなつたので、同月又勅令第七十五號官立醫科大學官制中の改正に依り熊本醫科大學が設立せられ、熊本縣立醫科大學長山崎正董が熊本醫科大學長に任ぜられた。熊本醫科大學に於ても講座制は設けられなかつた。

昭和四年六月二十四日文部省令第三十一號を以て左の如く大學規程中に改正が行はれた。

大學規程中左ノ通改正ス

第六條中「文部大臣ノ認可ヲ受クヘシ」ヲ「學則中ニ之ヲ定ムヘシ」ニ改ム

第七條中「文部大臣ノ認可ヲ受ケ」ヲ「學則ニ於テ」ニ改ム

第八條中「文部大臣ノ認可ヲ受ケ」ヲ「學則中ニ」ニ改ム

附 則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

大學規程第六條には大學の豫科に文部大臣が特種の専門學校の入學に關し、中學校を卒業したる者と同等以上の學力ありと指定したる者を入學せしむる場合には、其の者の進入し得べき大學の學部又は學科に關しては大學に於て文部大臣の認可を受くべきことを規定して居るのであるが、今回は之を學則中に規定すべきこととしたのである。第七條に依れば大學に於て學部に入學する資格を有する者に就き入學の順位を定むるには文部大臣の認可を受くべく、又第八條に依れば同順位に在る學部入學志願者の數、收容し得べき人員に超過する場合に於て行ふべき選抜の方法に關しては、大學に於て文部大臣の認可を受くべきものとなつて居るのであるが、今回は是等の事項總ては學則中に規定すべしとしたの



である。

昭和四年十二月十八日勅令第三百五十九號を以て左の如く大正八年勅令第十四號東京帝國大學各學部に於ける講座に關する件中に改正が行はれた。

大正八年勅令第十四號中左ノ通改正ス

醫學部ノ部中「藥品製造學」一講座ノ次ニ「臟器藥品化學」一講座ヲ加フ

農學部ノ部中「園藝學」一講座ヲ「園藝學」ニ改ム

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

同日勅令第三百六十號を以て左の如く大正八年勅令第十五號京都帝國大學各學部に於ける講座に關する件中に改正が行はれた。

大正八年勅令第十五號中左ノ通改正ス

理學部ノ部中「植物學」一講座ヲ「植物學」三講座ニ、「動物學」二講座ヲ「動物學」三講座ニ改ム

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

同日又勅令第三百六十一號を以て左の如く大正八年勅令第十七號九州帝國大學各學部に於ける講座に關する件中に改正が行はれた。

大正八年勅令第十七號中左ノ通改正ス

醫學部ノ部中「齒科學、口腔外科學」一講座ノ次ニ「放射線治療學」一講座ヲ加フ

工學部ノ部中「電氣工學」四講座ヲ「電氣工學」五講座ニ改ム

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

第一次若槻内閣の時文相岡田良平は九州帝國大學及北海道帝國大學に各理學部を新設するの計畫を立て、繼續費として之を昭和二年度の概算に計上したが、北海道帝國大學は自己の資金を以て創立費を支辨し得る状態に在つたので、遂に政府財政の都合上北海道帝國大學理學部新設のみが認めらるることとなり、議會の協賛を経て其の豫算は確定したのであつた。而して其創立準備が整つたので、昭和五年三月三十一日勅令第五十二號を以て左の如く大正八年勅令第十三號帝國大學及其學部に關する件中に改正が行はれ、北海道帝國大學に理學部が設置せらるることとなつた。

大正八年勅令第十三號中左ノ通改正ス

北海道帝國大學ノ部中「工學部」ノ次ニ「理學部」ヲ加フ

附則

本令ハ昭和五年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

第七章 大正九年世界大戰直後より昭和七年末に至るまで



理學部の授業開始は昭和五年四月からであった。

前に述べた如く北海道帝國大學には札幌農學校時代より豫科があり、東北帝國大學の分科大學となつて後醫學部の設置と共に獨立して北海道帝國大學となつた際にも醫學部の爲に豫科を擴張し、其の後工學部新設の場合にも工學部の爲に又豫科を擴張し、總て學部には豫科修了者を入學せしむるを本則としたのであつたが、今回理學部の新設に際しては文部省は別に豫科の擴張を認めず高等學校卒業者を收容せしむることとしたのであつた。

同日又勅令第五十三號を以て左の如く大正八年勅令第十八號北海道帝國大學各學部に於ける講座に關する件中に改正が行はれた。

大正八年勅令第十八號中左ノ通改正ス

工學部ノ部ノ次ニ左ノ如ク加フ

理學部

- 數學 二講座
- 物理學 二講座
- 化學 三講座
- 地質學、鑛物學 二講座
- 植物學 一講座
- 動物學 一講座

附則

本令ハ昭和五年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

北海道帝國大學理學部には數學科、物理學科、化學科、地質鑛物學科、植物學科及動物學科が設けられた。

昭和五年十二月十七日勅令第二百四十號を以て左の如く大正八年勅令第十四號東京帝國大學各學部に於ける講座に關する件中に改正が行はれた。

大正八年勅令第十四號中左ノ通改正ス

經濟學部ノ部中「社會政策 一講座」ノ次ニ「經濟史 一講座」ヲ加フ

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

大阪には前に述べた如く單科大學たる官立の工業大學と單科大學たる府立の醫科大學とが存在したのであるが、之に理學部を加へ之を綜合して一の帝國大學を設立せられたしとの希望が同地官民の間に熾烈となり、理學部の創立費は勿論新帝國大學開設後數年間の經常費に就ても、何等政府に負擔を及ぼさず寄附金を以て之を支辨する方法を講ずることとなつたので、政府も遂に其希望を納れ、昭和六年度の追加豫算に繼續費として大阪帝國大學創設費を計上し、議會の協賛を経たが、貴族院に於ては此計畫の實施に關しては文政審議會に諮詢の上決定すべしとの希望を附したので、昭和六年四月九日左記諮詢第十三號が文政審議會に附議せられた。



諮詢第十三號

大阪帝國大學ヲ設ケ左記要項ニ依リ醫學部、工學部及理學部ヲ置カントス

記

- 一、醫學部 公立大阪醫科大學ヲ國ニ移管シ昭和六年度ヨリ開設スルコト
  - 一、工學部 官立大阪工業大學ヲ移シ昭和七年度ヨリ開設スルコト
  - 一、理學部 昭和六年度ヨリ之ヲ置キ同八年度ヨリ各學科ヲ開設スルコト
- 右ニ關スル意見ヲ求ム

右に關し文政審議會は昭和六年四月十四日左の答申を爲した。

答 申

諮詢第十三號大阪帝國大學創設ニ關スル件ハ左ノ二項ヲ附シテ可決ス

- 一、本案ハ之ヲ是認スルモ斯ノ如キ教育上重要ナル問題ハ將來豫メ文政審議會ニ附議セラレンコトヲ望ム
- 一、高等教育ノ制度及施設ニ關シ根本的改善ノ策ヲ講セラレンコトヲ望ム

かくて昭和六年四月三十日勅令第六十八號を以て左の如く大正八年勅令第十三號帝國大學及其の學部に關する件に改正が行はれ、大阪帝國大學が設置せらるることとなり長岡半太郎が總長に任ぜられた。

大正八年勅令第十三號中左ノ通改正ス

北海道帝國大學ノ部ノ次ニ左ノ如ク加フ

大阪帝國大學

醫學部

理學部

附則

本令ハ昭和六年五月一日ヨリ之ヲ施行ス

大阪帝國大學理學部ノ各學科開設ノ期日ハ文部大臣之ヲ定ム

理學部は實は其創立費豫算が確定したるに止まり未だ成立したるものではないのであるが、前例に依り之を成立したるものと看做し府立醫科大學を引直した醫學部と合せ、二學部を備ふる綜合大學として大阪帝國大學なるものを認められたのである。而して何故に豫定計畫たる大阪工業大學の合併を直ちに實行しなかつたかといふと、これは全く豫算關係によつたものに外ならぬ。政府に於て愈々大阪帝國大學設立の議を決したのは昭和六年度の本豫算が既に議會に提出せられた後であり、從て大阪帝國大學に關する豫算は之を追加豫算として計上したのであるが、大阪工業大學の豫算は本豫算の單科大學經費中に包含せられて居るので、之を引離して大阪帝國大學の經費に移し換へることは豫算技術上不可能なので、次年度に於て豫算を組み換へたる上大阪工業大學を大阪帝國大學工學部と爲すこととしたのである。然るに大正七年度の豫算は議會解散の爲不成立となつたので工學部が設けられたのは大正八年度になつてからであつた。

同日又勅令第六十九號を以て左の如く大阪帝國大學講座令が定められた。

大阪帝國大學講座令



大阪帝國大學醫學部ニ於ケル講座ノ種類及其ノ數左ノ如シ

解剖學	三講座
生理學	二講座
生化學	一講座
病理學	二講座
藥理學	一講座
細菌學	一講座
衛生學	一講座
法醫學	一講座
內科學	三講座
外科學	二講座
產科學、婦人科學	一講座
眼科學	一講座
精神病學	一講座
小兒科學	一講座
皮膚科學、泌尿器科學	一講座
耳鼻咽喉科學	一講座

理學的診療學

一講座

附則

本令ハ昭和六年五月一日ヨリ之ヲ施行ス

從來愛知縣立であつた醫科大學が官立に移管せらるることとなつたので、昭和六年四月勅令第七十號官立醫科大學官制中の改正に依り名古屋醫科大學が設立せられ、愛知縣立醫科大學長藤井靜英が名古屋醫科大學長に任ぜられた。

昭和六年五月九日勅令第七十七號を以て左の如く大正八年勅令第十八號北海道帝國大學各學部に於ける講座に關する件中に改正が行はれた。

大正八年勅令第十八號中左ノ通改正ス

理學部ノ部中「物理學」一講座ヲ「物理學」四講座ニ、「化學」三講座ヲ「化學」四講座ニ、「地質學、鑛物學」二講座ヲ「地質學、鑛物學」三講座ニ、「植物學」一講座ヲ「植物學」二講座ニ、「動物學」一講座ヲ「動物學」二講座ニ改ム

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

昭和六年十一月勅令第二百六十六號溫泉治療學研究所官制に依り溫泉治療學研究所が九州帝國大學に附置せられた。

第七章 大正九年世界大戰直後より昭和七年末に至るまで



同研究所の位置は別府市外である。

温泉治療學研究所官制の詳細は學校等職員關係の款に於て之を述べることにする。

昭和七年五月十四日勅令第六十八號を以て左の如く大正八年勅令第十八號北海道帝國大學各學部に於ける講座に關する件に改正が行はれた。

大正八年勅令第十八號中左ノ通改正ス

理學部ノ部中「數學 一講座」ヲ「數學 三講座」ニ、「化學 四講座」ヲ「化學 五講座」ニ、「地質學、鑛物學 三講座」ヲ「地質學、鑛物學 四講座」ニ、「植物學 二講座」ヲ「植物學 三講座」ニ改ム

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

同日又勅令第七十號を以て左の如く大阪帝國大學講座令中に改正が行はれた。

大阪帝國大學講座令中左ノ通改正ス

「理學的診療學 一講座」ノ次ニ「齒科學 一講座」ヲ加フ

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

昭和七年十月一日勅令第二百八十四號を以て左の如く大阪帝國大學講座令中に改正が行はれた。

大阪帝國大學講座令中左ノ通改正ス

「大阪帝國大學醫學部ニ於ケル講座ノ種類及其ノ數左ノ如シ」ヲ「大阪帝國大學各學部ニ於ケル講座ノ種類及其ノ數左ノ如シ」ニ改メ「齒科學 一講座」ノ次ニ左ノ如ク加フ

醫學部

理學部

數學

一講座

物理學

一講座

化學

二講座

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

同日又左記文部省令第十七號が發せられた。

大阪帝國大學理學部ハ昭和八年四月ヨリ授業ヲ開始ス

以上官立の大學の外大學令に依る公私立の大學に就て述べると、公立大學としては、

愛知縣立愛知醫科大學(醫學部)が大正九年六月名古屋に、京都府立醫科大學(醫學部)が大正十年十月京都に、熊本縣

第七章 大正九年世界大戰直後より昭和七年末に至るまで



立醫科大學(醫學部)が大正十一年五月熊本に、大阪市立商科大学(商學部)が昭和三年三月大阪に何れも設立を認可せられた。

私立大學としては、

慶應義塾大學(文學部、經濟學部、法學部、醫學部)及早稻田大學(法學部、文學部、商學部、政治經濟學部、理工科學部)が大正九年二月東京に、明治大學(法學部、商學部、政治經濟學部)、法政大學(法文學部、經濟學部)、中央大學(法學部、商學部、經濟學部)、日本大學(法文學部、商經學部、工學部)、及國學院大學(文學部)が大正九年四月東京に、東京慈惠會醫科大學(醫學部)が大正十年十月東京に、龍谷大學(文學部)、大谷大學(文學部)が大正十一年五月京都に、専修大學(法學部、經濟學部)及立教大學(文學部、經濟學部)が大正十一年五月東京に、立命館大學(法經學部)が大正十一年六月京都に、關西大學(法文學部、經濟學部)が大正十一年六月大阪に、東洋協會大學(後拓殖大學と改稱)(商學部)が大正十一年六月東京に、立正大學(文學部)が大正十三年五月東京に、駒澤大學(文學部)が大正十四年四月東京に、東京農業大學(農學部)が大正十四年五月東京に、日本醫科大學(醫學部)が大正十五年二月東京に、高野山大學(文學部)が大正十五年四月高野に、大正大學(文學部)が大正十五年四月東京に、東洋大學(文學部)が昭和三年四月東京に、上智大學(文學部、商學部)が昭和三年五月東京に、關西學院大學(法文學部、商經學部)が昭和七年三月神戸に何れも設立を認可せられた。

私立大學には大學學部の外に専門部を設置するものが多くあつた。即ち明治大學には法科、政治經濟科、商科、文科及女子部の専門部、法政大學には第一部(法科、政治經濟科、高等商業科)第二部(政治經濟科、高等商業科)及高等師範部の專

門部、中央大學には法學科、經濟學科及商學科の専門部、東京農業大學には農學科及農藝化學科の専門部、立命館大學には法律科、經濟科、高等商業科及文科の専門部、東洋大學には倫理學教育學科、倫理學東洋文學科第一部、第二部東洋文學科第一部、第二部及社會教育社會事業科の専門部、専修大學には經濟科、計理科、法律科及商業科の専門部、關西大學には法律學科、經濟學科、商業學科及文學科の専門部、慶應義塾大學には高等部と稱する専門部、日本大學には法律科、政治科、商科、經濟科、宗教科、社會科、文科、齒科、醫學科、工科及高等師範部の専門部、早稻田大學には政治經濟科、法律科及商科の専門部即ち狹義の専門部及高等師範部より成立する専門部、駒澤大學には佛教科及高等師範部の専門部、國學院大學には附屬高等師範部と稱する専門部及附屬神道部と稱する専門部、拓殖大學には商科の専門部、立正大學には宗教科及高等師範部の専門部、龍谷大學及大谷大學には學部と内容を同じくする専門部、大正大學には高等師範部及佛教科の専門部、上智大學には經濟科、商科及新聞學科の専門部がある。此等の専門部は實は専門學校令に依る専門學校たるに外ならぬのである。

## 第八款 師範教育其他教員養成制度

### 第一項 師範教育

大正九年八月十一日東京高等師範學校及廣島高等師範學校に對する文部省訓令號外を以て左の如く明治四十二年十二月發普三五三號高等師範學校生徒學資支給に關する規定が改正せられた。

明治四十二年十二月發普三五三號高等師範學校生徒學資支給ニ關スル規程左ノ通り改ム

#### 高等師範學校生徒學資支給規程



第一條 高等師範學校ニ於テ生徒ニ支給スヘキ學資ハ專攻科生徒ニ在リテハ月額金參拾圓其ノ他ノ生徒ニ在リテハ月額貳拾五圓トス

第二條 學資支給ノ方法及人員ハ文部大臣ノ認可ヲ受ケ學校長之ヲ定ム其ノ變更ヲ爲サントスルトキ亦同シ

附則

本規程ハ大正九年四月分ヨリ之ヲ適用ス

大正十年二月十八日文部省令第十號を以て左の如く高等師範學校規程中に改正が行はれた。

高等師範學校規程中左ノ通改正ス

第一條中「特科トシテ」ヲ削ル

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

右は高等師範學校規程第一條特科として東京高等師範學校に體育科、廣島高等師範學校に教育科を置くことを得とあつたのを改め、特科としての文字を削除したのである。

大正十年四月二十六日文部省令第二十九號を以て左の如く高等師範學校等卒業生服務規則が定められた。

高等師範學校等卒業生服務規則左ノ通定ム

高等師範學校等卒業生服務規則

第一條 本令ハ高等師範學校、女子高等師範學校、臨時教員養成所、東京美術學校圖書師範科及東京音樂學校甲種師範科卒業生ニ適用ス

第二條 卒業生ハ卒業證書受得ノ日ヨリ左ノ期間引續キ教育ニ關スル職務ニ従事スル義務ヲ有ス

一、學資ノ支給ヲ受ケタル者ハ修業年限ノ一倍半ニ相當スル期間

二、學資ノ支給ヲ受ケサル者ハ其ノ修業年限ノ二分ノ一ニ相當スル期間

前項ノ期間ハ二學科以上ヲ修メタル場合ニ於テハ通シテ八年ヲ超エス

第三條 卒業生ハ卒業證書受得ノ日ヨリ一年間文部大臣ノ指定ニ從ヒ就職スルノ義務ヲ有ス但シ前條ノ義務一年未滿ナル場合ハ其ノ期間トス

一學科ヲ卒業シタル者ニシテ更ニ他ノ學科ヲ卒業シタルモノニ在リテハ後ノ卒業證書受得ノ日ヨリ一年間前項ノ義務ヲ有ス

第四條 卒業生ニシテ特別ノ事情ニ依リ第二條ノ義務ヲ履行スルコト能ハサルモノハ其ノ理由ヲ具シ道府縣ニ在職スル者ニ在リテハ地方長官其ノ他ノ者ニ在リテハ出身學校長ヲ經テ義務ノ猶豫又ハ免除ヲ文部大臣ニ出願スルトヲ得

前項ニ依リ出願シタル者アリタルトキハ地方長官又ハ學校長ハ事實ヲ審査シ意見ヲ付シテ願書ヲ進達スヘシ

第二條ノ義務ヲ猶豫又ハ免除シタル場合ニ於テハ第三條ノ義務ハ之ト同時ニ猶豫又ハ免除セラレタルモノトス

第五條 卒業生ニシテ左ノ各號ノ一ニ該當スルモノアリタルトキハ第一條ニ掲ケタル學校ノ學校長ニ於テ文部大臣ノ指揮ヲ受ケ學資ノ支給ヲ受ケタル者ニ對シテハ授業費及在學中支給セラレタル學資、學資ノ支給ヲ受ケサル者



ニ對シテハ授業費ヲ償還セシム但シ情狀ニ依リ其ノ全部又ハ一部ノ償還ヲ免除スルコトアルヘシ  
一、第二條又ハ第三條ノ義務ヲ履行セサル者

二、服務年限中懲戒免職又ハ免許狀褫奪ノ處分ヲ受ケタル者

前項授業費ノ金額ハ文部大臣ノ認可ヲ受ケ學校長之ヲ定ムヘシ

第六條 卒業者ニシテ服務年限中研究科專攻科又ハ帝國大學學部等ニ入學セムトスルモノアルトキハ時宜ニ依リ許  
可スルコトアルヘシ

第七條 卒業者ニシテ第四條ニ依リ其ノ義務ヲ猶豫セラレタルトキ又ハ前條ニ依リ研究科專攻科若ハ帝國大學學部  
等ニ入學シタルトキハ其ノ猶豫又ハ在學ノ期間ハ服務年數ニ算入セス

附 則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

本令施行前ノ卒業者ニシテ未タ服務義務ヲ了ラサルモノノ服務年數ニ關シテハ本令ノ規定ニ依ル

大正九年度以前ノ入學者ニシテ從前ノ規定ニ依リ服務義務ナキモノノ服務ハ仍從前ノ例ニ依ル

明治四十二年文部省令第二十五號高等師範學校卒業者服務規則、同年文部省令第二十七號女子高等師範學校卒業者  
服務規則、明治四十三年文部省令第二號東京美術學校圖書師範科卒業者服務規則、同年文部省令第三號東京音樂學  
校甲種師範科卒業者服務規則及明治四十五年文部省令第八號臨時教員養成所卒業者服務規則ハ之ヲ廢止ス

大正十年七月十四日文部省令第三十四號を以て左の如く女子高等師範學校生徒募集規則中に改正が行はれた。

女子高等師範學校生徒募集規則中左ノ通改正ス

第一條第一項中「高等女學校本科卒業者」ノ次ニ「專門學校入學者檢定規程ニ依リ試験檢定ニ合格シタル者及專門  
學校ノ入學ニ關シ文部大臣ノ指定ヲ受ケタル女學校ノ卒業者」ヲ加ヘ第四項中「師範學校及高等女學校」ヲ「師範  
學校高等女學校及專門學校ノ入學ニ關シ文部大臣ノ指定ヲ受ケタル女學校」ニ改ム

附 則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

大正十年八月五日文部省令第三十七號を以て左の如く師範學校規程中に改正が行はれた。

師範學校規程中左ノ通改正ス

第六十二條ノ次ニ左ノ一條ヲ加フ

第六十二條ノ二 一年現役兵トシテ服役スル期間ハ前二條ノ服務義務期間ニ算入セス

附 則

本令ハ大正十年四月一日ヨリ之ヲ適用ス

大正十三年十月三十日文部省令第二十五號を以て左の如く師範學校規程中に改正が行はれた。

師範學校規程中左ノ通改正ス

第四十六條第二項中「増スヘシ」ヲ「増スヘシ體操ニ於テ擊劍及柔術ヲ加フル場合亦同シ」ニ改メ同條ニ左ノ一項

第七 章

大正九年世界大戰直後より昭和七年末に至るまで



ヲ加フ

特別ノ事情アル場合ニ於テハ地方長官ハ文部大臣ノ認可ヲ受ケ當分ノ内第一項ノ規定ニ依ル員數ヲ減スルコトヲ得

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

第四十六條第一項には「教員ノ數ハ四學級ノ學校ニ於テハ十一人以上トシ四學級以上一學級ヲ加フル毎ニ一人半以上ノ割合ヲ以テ之ヲ増スヘシ」とあり、第二項には「農業、商業ノ二科目ヲ加フル學校ニ於テハ本科第一部男生徒ノ學級數十二以下ナルトキハ教員一人、十三以上ナルトキハ同二人ノ割合ヲ以テ前項ノ員數ヲ増スヘシ」との規定があつたのを改め、第二項に體操に於て擊劍及柔道を加ふる場合亦同じの文字を加へ、其代り特別の事情ある場合に於ては地方長官は文部大臣の認可を受け、當分の内第一項の規定に依る員數を減じ得ることとしたのである。

大正十三年十一月二十二日 文部省令第二十八號を以て左の如く高等師範學校規程中に改正が行はれた。

高等師範學校規程中左ノ通改正ス

第十條 研究科ニ入學スヘキ者ハ高等師範學校卒業者又ハ之ト同等以上ノ學力ヲ有スル者ニ就キ學校長之ヲ選拔ス

附則

第十二條ニ左ノ一項ヲ加フ  
専修科ノ修業年限、學科目等ハ文部大臣ノ認可ヲ受ケ學校長之ヲ定ム

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

大正十三年一月清浦内閣の文相となつた江木千之は政府に於て貨幣鑄造益金を基金として一の特別會計を作り、其利子を以て必要なる經費に充てんとするの議あるに際し、内閣の諒解を経、右利子の中毎年金四百萬圓を市町村に補助するの資に充て、之に依て義務教育年限を八箇年に延長するの案を立て之を文政審議會に諮問し、同會に於て審議中内閣の總辭職に因て、遂に其事は行はれず終つたことは前に初等普通教育の款に於て述べた通であるが、江木に次で加藤(高明)内閣の文相となつた岡田良平は右貨幣鑄造益金特別會計の利子四百萬圓を以て北海道府縣に補助し、之に依て師範教育の改善を行はんとするの計畫を立てたのである。

當時師範學校第一部の修業年限は四箇年であつて其下に一箇年の豫備科を置き得ることとなつて居り、入學資格は豫備科修了若は修業年限三箇年の高等小學校の卒業といふことであつたが、實際豫備科を設置せる師範學校は九十九校中僅に二十一校に止まり、又修業年限三箇年の高等小學校は全國を通じて極めて少數なるが爲に、事實に於て師範學校と高等小學校との間には一箇年の空隙があつて、豫備科の設置なき師範學校に於ては已むを得ず修業年限二箇年の高等小學校修了の程度と殆ど差異なき入學試験に依て初年生を收容するの外なく、生徒の學力素養に於て頗る不十分たるを免れなかつた。此點は師範教育制度の缺陷として常に世人から非難せられた所である。

故に文相岡田は第一に此缺陷を補ひ師範學校第一部をして直に修業年限二箇年の高等小學校に接続せしむる爲に、其修業年限を下に一箇年延長して之を五箇年となさんとした。岡田は又師範學校を上に一箇年延長し、即ち第一部及第二部の卒業者を入學せしめて、其素養を一層高からしむる爲に一箇年の専攻科を置かんとした。以上二つの改善を行ふが



爲には學級の増加を必要とするが故に、之に要する資金を貨幣鑄造益金特別會計の利子より道府縣に補助せんとしたのである。尙ほ師範學校に關する規程中の改正として學科課程の改正等も企圖せられたのであつた。

師範教育改善案は上述の趣旨に依り左の如く大正十三年十二月二日諮詢第三號として文政審議會に諮詢せられた。

諮詢第三號

左記要項ニ依り師範教育ノ改善充實ヲ圖ラントス

記

- 一、師範學校第一部ノ修業年限ヲ五年トシ現制ノ豫備科ハ之ヲ廢止スルコト
- 一、師範學校第一部ハ高等小學校第二學年修了ノ程度ヲ以テ入學資格トスルコト
- 一、師範學校第二部ノ修業年限ハ男子ニ在リテハ一年、女子ニ在リテハ一年又ハ二年トシ中學校高等女學校卒業ノ程度ヲ以テ入學資格トスルコト
- 一、師範學校ニ修業年限一年ノ專攻科ヲ置キ本科卒業者又ハ之ト同等以上ノ學力ヲ有スル者ヲシテ入學スルヲ得シムルコト

右ニ關スル意見ヲ求ム

右に對し文政審議會は審議の末大正十三年十二月二十五日左の答申を爲した。

答 申

諮詢第三號師範教育ノ改善充實ニ關スル件提案ノ通實施スルヲ可ナリト認ム

附帶決議

- 一、師範學校ノ職員ノ待遇ヲ改善セラレタキコト
- 二、師範學校卒業者ニ對シ一層高等ナル教育ヲ受ケ得ル途ヲ開カレタキコト

此の如く師範教育改善案は文政審議會に於て可決せられ、又道府縣に對する國庫補助の豫算も衆議院に於ては可決せられたが、貴族院に於ては第一部の修業年限を下に一箇年延長するよりも寧ろ第二部の擴張を可とすとの理由を以て補助費豫算を修正減額し、結局此修正案が議會を通過した。然も政府は此修正を以て豫算金額の減少に過ぎざるものと解釋し、其理由には必ずしも重きを置かず、最初の案の如く第一部の修業年限を五箇年とすることに決したのであつた。かくて大正十四年四月一日文部省令第八號を以て左の如く師範學校規程中に改正が行はれた。

師範學校規程中左ノ通改正ス

「第二章 豫備科及本科」ヲ「第二章 本科及專攻科」ニ改ム

第三條 專攻科ハ本科ノ學科目又ハ之ニ關聯スル學科目ニ付精深ナル程度ニ於テ學修ヲ爲サシムルヲ以テ目的トス

第四條 本科第一部ノ修業年限ハ五年トス

本科第二部ノ修業年限ハ男生徒ニ就キテハ一年、女生徒ニ就キテハ一年又ハ二年トス

專攻科ノ修業年限ハ一年トス

第五條 削除

第六條 本科第一部ノ男生徒ニ課スヘキ學科目ハ修身、教育、國語及漢文、英語、歴史、地理、數學、博物、物理

及化學、法制及經濟、農業又ハ商業、習字、圖畫、手工、音樂、體操トス

第七條中「物理及化學、」ノ下ニ「法制及經濟、」ヲ加ヘ第二項ヲ左ノ如ク改ム

第七章

大正九年世界大戰直後より昭和七年末に至るまで



前項學科目ノ外隨意科目トシテ英語、農業又ハ商業ノ一科目又ハ數科目ヲ加フルコトヲ得  
第八條第三項ヲ削ル

第十條第二項中「近古」ヲ「近古ヨリ上古」ニ改ム

第十二條中「日本歴史」ヲ「國史」ニ、「外國歴史」ヲ「外國史」ニ改ム

第十四條第三項ヲ削ル

第十五條中「小學校ニ於ケル教授ニ必要ナル」ヲ削ル

第十六條中「小學校ニ於ケル教授ニ必要ナル」ヲ削ル

第十八條中「知識」ヲ「知識技能」ニ、「且教授法ヲ授クヘシ」ヲ「又實習ヲ課シ且教授法ヲ授クヘシ」ニ改ム

第二十五條中「且教授法ヲ授クヘシ」ヲ「又實習ヲ課シ且教授法ヲ授クヘシ」ニ改ム

第二十六條第二項ヲ左ノ如ク改ム

商業ハ商事要項、商業簿記等ヲ授ケ且教授法ヲ授クヘシ

第二十七條 本科第一部ニ於ケル各學科目ノ每週教授時數ハ男生徒ニ就キテハ甲號表、女生徒ニ就キテハ乙號表ニ依ルヘシ但シ必要アルトキハ學校長ハ每週教授時數ノ總計及各學科目ノ一學年間ニ於ケル教授時數ノ總計ヲ増減セサル範圍内ニ於テ之ヲ變更スルコトヲ得

甲號表

學科目	年	第一學年	第二學年	第三學年	第四學年	第五學年
-----	---	------	------	------	------	------

修身	一	一	二	二	二	二
國語及漢文	六	六	四	五	五	五
英語	五	三	三	三	三	三
歷史	二	二	三	三	二	二
地理	二	二	三	三	二	二
數學	四	四	四	三	三	三
博物	二	二	二	一	三	三
物理及化學		三	三	三	三	三
法制及經濟				二	二	二
農業又ハ商業			二	二	二	二
習字	二	一	一	二	二	二
圖畫	三	三	二	二	二	二
手工						
音樂	二	二	一	一	一	一
體操	五	五	五	四	四	四
計	三四	三四	三四	三四	三四	三四



體操及技能ノ實習ハ前表教授時數外ニ於テ之ヲ課スルコトヲ得  
 教育實習ハ第五學年ニ於テ八週乃至十週專ラ之ヲ課スヘシ

乙號表

學年	第一學年	第二學年	第三學年	第四學年	第五學年
修身	一	一	二	二	二
教育			二		
國語及漢文	六	五	五	三	五
歷史	二	二		五	二
地理	二	二	三	三	二
數學	四	四	三	三	三
博物	二	二	二	一	三
物理及化學		三	三	三	三
法制及經濟				二	二
家事				二	二
裁縫	四	四		二	二
習字	二	一	一		二

學年	第一學年	第二學年	第三學年	第四學年	第五學年
圖畫	三	二	二	二	二
手工					
音樂	二	二	一	一	一
體操	三	三	三	三	三
英語	(三)	(三)	(三)	(二)	(二)
農業又ハ商業	(三)	(三)	(三)	(二)	(二)
計	(三三)	(三三)	(三三)	(三三)	(三三)

體操及技能ノ實習ハ前表教授時數外ニ於テ之ヲ課スルコトヲ得  
 教育實習ハ第五學年ニ於テ八週乃至十週專ラ之ヲ課スヘシ

第二十八條 本科第二部ノ男生徒ニ課スヘキ學科目ハ修身、教育、國語及漢文、歷史、地理、數學、博物、物理及化學、法制及經濟、農業又ハ商業、圖畫、手工、音樂、體操トス

農業學校ヲ卒業シタル生徒ニハ農業、商業學校ヲ卒業シタル生徒ニハ商業ヲ缺クコトヲ得

第二十九條 本科第二部ノ女生徒ニ課スヘキ學科目ハ修身、教育、國語及漢文、歷史、地理、數學、博物、物理及化學、法制及經濟、家事、裁縫、圖畫、手工、音樂、體操トス  
 修業年限二年ノ場合ニ於テハ前項學科目ノ外隨意科目トシテ英語、農業又ハ商業ノ一科目又ハ數科目ヲ加フルコトヲ得

第三十條第二項ヲ削ル



第三十一條 教育ハ第九條ニ準シ心理ヲ授クル際教育ノ理論、教授ノ方法並保育法ヲ概説シ又近世教育史、學校管理  
 法、學校衛生ノ大要ヲ授ケ且教育實習ヲ課スヘシ  
 第三十四條中「男生徒ニ就キテハ簿記ノ大要ヲ授ケ」ヲ削ル  
 第三十六條中第二項ヲ削ル  
 第三十七條中「裁縫ハ第十九條」ヲ「家事、裁縫ハ第十八條及第十九條」ニ改ム  
 第三十八條 圖畫、手工ハ第二十一條及第二十二條ニ準シ小學校ニ於ケル教授ニ必要ナル知識技能ヲ會得セシメ且  
 教授法ヲ授クヘシ  
 第三十九條 英語、法制及經濟、音樂、體操、農業、商業ハ第十一條、第十七條、第二十三條乃至第二十六條ニ準  
 シ之ヲ授クヘシ  
 第四十條 本科第二部ニ於ケル各學科目ノ每週教授時數ハ男生徒ニ就キテハ甲號表、女生徒ニ就キテハ修業年限ニ  
 依リ乙號表又ハ丙號表ニ依ルヘシ但シ學校長ハ第二十七條但書ニ準シ之ヲ變更スルコトヲ得

甲號表

學年	學科	日	身	育	國語及漢文
第一	學	年	二	八	三

學年	學科	日	身	育	國語及漢文
第一	學	年	二	八	三
第二	學	年	二	八	三
第三	學	年	二	八	三
第四	學	年	二	八	三
計			二	八	三

體操及技能ノ實習ハ前表教授時數外ニ於テ之ヲ課スルコトヲ得  
 教育實習ハ卒業ニ近キ時期ニ於テ約八週專ラ課スヘシ  
 第二十八條第二項ノ規定ニ依リ農業又ハ商業ヲ缺キタル生徒ニハ其ノ每週教授時數ハ便宜他ノ學科目ニ配當  
 スルコトヲ得

乙號表

第七章 大正九年世界大戰直後より昭和七年末に至るまで







音	樂	二		一
體	操	三		三
英	語	(二)		(二)
農	業又ハ商業	(二)		(二)
計		(三二)	(三二)	(三二)

體操及技能ノ實習ハ前表教授時數外ニ於テ之ヲ課スルコトヲ得  
 教育實習ハ卒業ニ近キ時期ニ於テ約八週專ラ之ヲ課スヘシ

第四十條ノ二 專攻科ノ男生徒ニ課スヘキ學科目ハ修身、哲學、教育、國語及漢文、農業又ハ商業、體操トス  
 前項學科目ノ外英語、歴史及地理、數學、博物、物理及化學、圖畫及手工、音樂ノ中ヨリ其ノ數科目ヲ選修セシム

第四十條ノ三 專攻科ノ女生徒ニ課スヘキ學科目ハ修身、哲學、教育、國語及漢文、家事及裁縫、體操トス  
 前條第二項ノ規定ハ專攻科ノ女生徒ニ就キ之ヲ適用ス

第四十條ノ四 專攻科ニ於ケル各學科目ノ每週教授時數ハ左表ニ依ルヘシ  
 必修科目

學	科	目	男	生	徒	女	生	徒
修	身		二			二		

哲	學	三		三
教	育	四		四
國	語及漢文	四		四
農	業又ハ商業	(實習不定時)五		(實習不定時)五
家	事及裁縫			
體	操	二		二
選	擇科	目	八一二	八一二
計			二八一三二	二八一三二

選擇科目

英	語	四
歷	史及地理	四
數	學	四
博	物	四
物	理及化學	四
圖	畫及手工	四
音	樂	四

學校長ハ選擇科目ヲ適宜組合セ其ノ中ニ就キ生徒ヲシテ選修セシムルコトヲ得



第四十五條中「法制及經濟、」及「英語、」ヲ削ル

第四十六條第二項中「第一部男生徒」ヲ削リ第二項ノ次ニ左ノ一項ヲ加フ

專攻科ニ在リテハ教員ノ數ハ一學級ニ付二人以上トス

第四十八條中「豫備科及本科」ヲ「本科及專攻科」ニ改ム

第四十九條 本科第一部ニ入學スルコトヲ得ル者ハ修業年限二年ノ高等小學校ヲ卒業シタル者若ハ年齢十四年以上ニシテ之ト同等以上ノ學力ヲ有スル者タルヘシ

第五十條 本科第二部ニ入學スルコトヲ得ル者ハ男生徒ニ就キテハ中學校ヲ卒業シタル者又ハ年齢十七年以上ニシテ之ト同等以上ノ學力ヲ有スル者、女生徒ニ就キテハ修業年限ヲ一年ト爲シタル場合ニ於テハ修業年限五年ノ高等女學校ヲ卒業シタル者又ハ年齢十七年以上ニシテ之ト同等以上ノ學力ヲ有スル者、修業年限ヲ二年ト爲シタル場合ニ於テハ修業年限四年ノ高等女學校ヲ卒業シタル者又ハ年齢十六年以上ニシテ之ト同等以上ノ學力ヲ有スル者タルヘシ但シ當分ノ内修業年限ヲ一年ト爲シタル場合ニ於テ修業年限四年ノ高等女學校ヲ卒業シタル者又ハ年齢十六年以上ニシテ之ト同等以上ノ學力ヲ有スル者ヲ入學セシムルコトヲ得

第五十一條 專攻科ニ入學スルコトヲ得ル者ハ師範學校ノ本科ヲ卒業シタル者又ハ之ト同等以上ノ學力ヲ有スル者タルヘシ

第五十四條 左ノ各號ノ一ニ該當スル者ノ子ニシテ第四十八條ノ資格ヲ具ヘ入學セムトスルトキハ學校長ハ他ノ志願者ニ先チテ之ヲ許可スルコトヲ得但シ法定ノ推定家督相續人ニアラサル養子又ハ恩給法第五十八條第一項第二號ニ該當シ現ニ恩給ヲ停止セララルル者ノ子ハ此ノ限ニアラス

一 十五年以上官立公立ノ學校ノ訓導又ハ小學校ノ本科正教員タルヘキ資格ヲ有スル官立公立ノ學校若ハ幼稚園ノ保姆ノ職ニ在リタル者ニシテ恩給法ニ依リ普通恩給ヲ受クルノ權利ヲ有スル者

二 官立公立ノ學校ノ訓導若ハ准訓導又ハ小學校ノ本科正教員タルヘキ資格ヲ有スル官立公立ノ學校若ハ幼稚園ノ保姆ノ職ニ在リタル者ニシテ恩給法第四十六條及第四十七條ノ規定ニ依リ普通恩給及增加恩給ヲ受クルノ權利ヲ有スル者

三 十五年以上官立公立ノ學校ノ訓導若ハ准訓導又ハ小學校ノ本科正教員タルヘキ資格ヲ有スル官立公立ノ學校若ハ幼稚園ノ保姆ノ職ニ在ル者

四 十五年以上官立公立ノ學校ノ訓導若ハ准訓導又ハ小學校ノ本科正教員タルヘキ資格ヲ有スル官立公立ノ學校若ハ幼稚園ノ保姆ノ職ニ在リタル者ニシテ引續キ教育職員及教官其ノ他教育事務ニ従事スル文官ノ職ニ在ル者

前項各號ノ一ニ該當スル者ニシテ死去シタルトキ並官立公立ノ學校ノ訓導若ハ准訓導又ハ小學校ノ本科正教員タルヘキ資格ヲ有スル官立公立ノ學校若ハ幼稚園ノ保姆ノ職ニ在ル者ニシテ在職中職務ノ爲死去シタルトキハ其ノ子ニ關シ前項ノ規定ヲ準用ス

第五十四條ノ二ヲ削ル

第五十五條 學校長ハ本科ヲ卒業シタル者ニ本科卒業證書ヲ、專攻科ヲ卒業シタル者ニ專攻科卒業證書ヲ授與スヘシ

第五十九條ノ二中「第五十四條ノ二」ヲ「第五十四條」ニ改ム



第六十條第二項中「三十圓」ヲ「五十圓」ニ改ム

第六十一條 卒業生ハ卒業證書受得ノ日ヨリ左ノ期間其ノ道府縣ニ於テ小學校教員ノ職ニ従事スル義務ヲ有ス但シ次條ノ義務ヲ終リタル者ハ學事ニ關スル他ノ公職ニ従事スルコトヲ得

一 公費卒業生ハ其ノ修業年限ノ一倍半ニ相當スル期間但シ八年ヲ超エス

二 私費卒業生ハ其ノ修業年限ノ二分ノ一ニ相當スル期間但シ一年ヲ下ラス

本科卒業生ニシテ引續キ專攻科ニ入り其ノ課程ヲ卒リタル者ニ在リテハ前項ノ期間ハ專攻科卒業證書受得ノ日ヨリ之ヲ起算ス

第六十二條 卒業生ハ卒業證書受得ノ日ヨリ一年間其ノ道府縣ニ於テ地方長官ノ指定スル小學校教員ノ職ニ従事スル義務ヲ有ス

前條第二項ノ規定ハ本條ノ義務ニ關シ之ヲ準用ス

第六十二條ノ二中「一年現役兵トシテ服役スル期間」ヲ「專攻科ニ在學中ノ期間」ニ改ム

第六十三條中「及第六十二條」ヲ削リ「服務期間」ヲ「服務義務期間」ニ改ム

第六十四條中「服務期間」ヲ「服務義務期間」ニ改ム

第六十五條中「服務期間」ヲ「服務義務期間」ニ改ム

第六十六條中「本科」ヲ削ル

第六十七條中「本科卒業生ニシテ服務期間」ヲ「服務義務期間内」ニ改ム

第六十八條中「三十圓」ヲ「五十圓」ニ改ム

第六十九條中「裁縫科」ヲ「專科」ニ改ム

第七十條中「二箇年」ヲ「二年」ニ「一箇年」ヲ「一年」ニ「裁縫科」ヲ「專科」ニ改ム

第八十九條中「定性分析表」ヲ「定量分析表」ニ改ム

第九十四條 削除

附則

本令ハ大正十四年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

專攻科ハ當分ノ内之ヲ設ケサルコトヲ得

本令施行ノ際現ニ在學スル者ノ修業年限、學科目及其ノ每週教授時數等ニ就キテハ仍從前ノ規定ニ依ル但シ地方長官ニ於テ便宜本令ノ規定ヲ斟酌スルコトヲ得

文部省は大正十四年四月二日北海道廳、府縣に對する文部省訓令第四號を以て左の如く師範學校規程中改正の趣旨を明にした。

師範學校規程ハ明治四十年ノ制定ニ係リ其ノ施行以來年ヲ閱スルコト已ニ十有八年其ノ間時勢ノ進歩ニ伴ヒ一部ノ改正ヲ施スコト數次ニ及ヘリト雖最近ニ於ケル社會ノ趨勢ハ其ノ學科、教授ノ内容等ニ關シ從來ノ規定ヲ以テ満足スヘカラサルニ至レリ是レ今回規程ノ主要部ニ對シテ改正ヲ加ヘタル所以ナリ因ツテ左ニ其ノ改正ノ要旨ヲ擧ケ且施行上特ニ注意スヘキ事項ノ大要ヲ示サム

抑モ國民ノ思想ヲ健全ナラシメ國家ノ産業ヲ發達セシメ其ノ他文化ノ宣揚政治ノ廓清等ヲ圖ラムトスルニハ皆其根

第七章

大正九年世界大戰直後より昭和七年末に至るまで



概テ小學校ノ教育ニ於テ培養スヘキハ論ヲ須タス時世ノ趨向ハ小學校ノ教育ニ對シテ益重要ノ意義ヲ加ヘムトス而シテ之カ振興ヲ期セムトスルニハ先ツ教員其ノ人ヲ得ルヲ以テ最大要件トナササルヲ得ス故ニ師範教育ヲ改善シテ從來ヨリモ一層優良ナル多數ノ教員ヲ養成スルハ當今ニ於ケル急務中ノ急務ト謂フヘシ今回改正ノ主旨ハ實ニ此ノ點ニ存ス

師範學校ノ學科ニ就キテハ本科ヲ第一部及第二部ニ分ツコト舊規程ト異ナル所ナシト雖第一部ノ修業年限ヲ五年トシ從來ノ豫備科ヲ廢止スルコトトセリ舊規程ニ依レハ師範學校第一部ニ入學スルコトヲ得ル者ハ豫備科ヲ修了シタル者又ハ修業年限三年ノ高等小學校ヲ卒業シタル者若ハ年齡十五年以上ニシテ之ト同等ノ學力ヲ有スル者トナセシカ現時豫備科ヲ設クル師範學校ハ九十九校中僅ニ二十一校ニ止マリ又修業年限三年ノ高等小學校ハ全國ニ於テ其ノ數甚少シ爲ニ修業年限二年ノ高等小學校ノ卒業者中其ノ俊秀者ヲシテ師範學校入學ノ機會ヲ逸セシムルノ虞多シ更ニ他ノ一面ニ於テハ師範學校ヲシテ已ムヲ得ス高等小學校第三學年卒業程度以下ノ者ヲ本科ニ入學セシメ事實ニ於テ其ノ教育ノ程度ヲ低下スルノ場合ナキヲ保セス如上ノ缺陷ヲ救ハムカ爲ニハ各府縣ヲシテ師範學校ニ豫備科ヲ設置セシムルノ途ナキニアラサレトモ若シ必之ヲ設置セシムルモノトセハ寧ロ之ヲ本科中ニ加ヘ後學年ト聯絡統一ヲ保タシムルニ如カス故ニ今回改正ハ豫備科ヲ廢シ修業年限二年ノ高等小學校ヲ卒業シタル者若ハ年齡十四年以上ニシテ之ト同等以上ノ學力ヲ有スル者ヲシテ本科第一部ニ入學セシムルコトトシ且其ノ修業年限ヲ五年トナセリ右ハ本科第一部ノ入學程度ヲ舊規程ヨリ一年低下シ修業年限ニ一年ヲ加ヘタルニ過キサルヲ以テ從來ノ教育ニ比シテ大差ナキノ觀アレトモ俊秀者ニ入學ノ便宜ヲ得シムルノミナラス第一學年ヨリ師範教育ノ本旨ヲ貫徹セシムルノ方針ニ依リテ學科目ヲ定メ第二學年以上ニ在リテモ學科課程ニ改正ヲ加ヘタルヲ以テ生徒ノ德操識見ヲ養フノ點ニ

於テ實質上從來ヨリ大ニ優ルモノアルヘシ尙且前ニ述ヘタル如ク事實上教育ノ程度ヲ低下スル如キハ今回改正ニ依リテ之ヲ根絶スルコトヲ得ルナリ殊ニ女生徒ニ在リテハ舊規程ニ依リ高等小學校第一學年ヲ修了シタル者又ハ年齡十三年以上ニシテ之ト同等ノ學力ヲ有スル者ヲ豫備科ニ、修業年限二年ノ高等小學校ヲ卒業シタル者又ハ年齡十四年以上ニシテ之ト同等ノ學力ヲ有スル者ヲ本科第一部ニ入學スルコトヲ得シメタルヲ以テ女教員ノ素養ハ男教員ニ比シテ一般ニ大ニ劣レルノ嫌アリシカ今回改正ハ女生徒入學ノ程度ヲ全ク男生徒ト同様ナラシメタルヲ以テ今後ハ從來ヨリモ一層優良ナル女教員ノ養成ヲ期スヘキナリ

本科第二部ニ就キテハ男生徒ノ修業年限ヲ一年ト定メ舊規程ノ更ニ一年ヲ延長シ得ルノ制ヲ廢セリ是レ今回新ニ設ケタル專攻科トノ關係ヨリ之カ改正ノ必要ヲ認メタルニ由ルナリ且從來男生徒ニ對シ修業年限二年ノ第二部ヲ設ケタル師範學校ハ全國ヲ通シテ唯一校アルニ過キス而モ其ノ生徒ハ今回改正ニ依リ修業年限一年ノ第二部ヲ卒業シタル後更ニ專攻科ニ入學シテ其ノ課程ヲ修メシムルコトトセハ寧ロ修學上ニ利スル所多カルヘシ女生徒ノ修業年限ハ之ヲ一年又ハ二年トスルコト從來ト異ナラス尙修業年限一年ノ第二部ニハ當分ノ内修業年限四年ノ高等女學校ヲ卒業シタル者又ハ年齡十六年以上ニシテ之ト同等以上ノ學力ヲ有スル者ノ入學ヲモ認メタリト雖是レ目下ノ實情已ムヲ得サルニ出テタルモノナレハ今後ハ成ルヘク此ノ種ノ生徒ノ修業年限ヲ二年トナシ以テ教員素質ノ向上ヲ期セムコトヲ希望ス

專攻科ハ修業年限ヲ一年トシ本科卒業若ハ之ト同等以上ノ學力ヲ有スル者ヲシテ精深ナル程度ニ於テ本科所定ノ學科目又ハ之ト關係アル學科目ニ就キテ學修セシムカ爲ニ設ケタルモノナリ尙專攻科ニ在リテハ教育者タルノ修養ヲ高ムルト同時ニ他方ニ於ケル實際ノ事情ヲ理解スルニ適當ナル學科目ヲ專攻セシムルヲ以テ從來ニ比シテ一層



適良ナル教員ヲ養成シ得ヘント信ス而シテ今回ノ改正ハ師範學校ニ於テ本科ト共ニ專攻科ヲ設ケシムルヲ主眼トスレトモ經費其ノ他ノ關係上必シモ本規程ノ改正ト同時ニ之ヲ設置スルヲ要セス漸ヲ逐ウテ之カ完成ヲ期セムトス今回ノ改正ハ學科目及毎週教授時數ニ對シテ加ヘタル簡條尠カラズ本科第一部ノ學科目ニ就キテハ時代ノ變遷ト社會ノ趨勢トニ顧ミ男女生徒ヲ通シテ法制及經濟ヲ必修セシムルコトトセリ尙男生徒ニハ英語ヲ必修科目トシテ之ヲ課シ女生徒ニハ英語、農業、商業ヲ隨意科目トシテ之ヲ課シ得ルコトトナセリ蓋シ英語ハ世界ノ知識ヲ收得スルノ關鍵トシテ必要ナレトモ女生徒ハ男生徒ノ修ムル學科目以外ニ家事及裁縫ヲ學ヒ之カ爲ニ相當ノ時數ヲ要スヘキヲ以テ一般ニ英語ヲ課スルコトノ困難ナルヲ認メ學力ニ餘裕アル者ノミニ之ヲ修メシムルノ趣旨ニ依リテ隨意科目トナシタルナリ又農業又ハ商業ハ地方ノ實情ニ對スル理解ヲ與フルニ必要ナル學科目ニシテ兒童教育上ニ重要ナル關係ヲ有スレトモ女生徒ニ就キテハ前記ノ事情ヲ考慮シ亦之ヲ隨意科目トナセリ然レトモ園藝ハ女子ノ趣味ヲ長セシメ且其ノ修養ニ資スルコト多キヲ以テ事情ノ許ス限リ之ヲ課スルハ當局ノ希望スル所ナリ

本科第二部ノ學科目ニ就キテハ師範教育ノ本旨ニ照ラシ生徒ヲシテ本邦ノ文化及使命ニ關シテ及フ限リ深ク領悟セシムルノ必要アルヲ以テ男女ヲ通シ歴史及地理ヲ必修セシムルコトトセリ又男生徒ニハ必修科目トシテ農業又ハ商業ヲ加ヘタレトモ農業學校、商業學校ヲ卒業シタル生徒ハ過去ニ於テ修ムル所相當ニ深キヲ以テ之ヲ缺クコトヲ得シメ其ノ時間ニ於テ便宜他ノ學科目ヲ修メシムルコトトシ女生徒ニハ法制及經濟ヲ男生徒ト同様ニ必修科目トシ尙女子ノ本務ニ緊要ナル家事ヲモ必修科目トシテ之ヲ課スルコトトセリ殊ニ修業年限二年ノ第二部女生徒ニ對シテハ第一部女生徒ニ於ケルト同シク英語、農業、商業ヲ隨意科目トシテ修ムルコトヲ得シメタリ

專攻科ノ學科目ハ各生徒ヲシテ共通ニ學修セシムル學科目ト隨意ニ選修セシムル學科目トノ二種ニ分チ共通ニ學修

セシムル學科目中男女生徒ヲ通シテ哲學ヲ加ヘ形而上方面ノ修養ニ依リテ人格ヲ高尚ニシ思想ヲ堅實ナラシメムコトヲ圖リ尙男生徒ニハ農業又ハ商業ヲ必修セシメテ將來ニ於ケル就職地ノ實業ニ關スル理解ヲ深カラシメ女生徒ニハ家事及裁縫ヲ必修セシメテ一層深ク家政ニ關スル修養ヲ與ヘムコトヲ期セリ其ノ他修身、教育、國語及漢文、體操ヲ共通ニ學修セシムルハ教育者タルノ素養ニ缺クヘカラサルヲ以テナリ次ニ隨意ニ選修セシムル學科目ハ英語、歴史及地理ノ如キ文科ニ屬スルモノ數學、博物、物理及化學ノ如キ理科ニ屬スルモノ圖畫及手工、音樂ノ如キ技能ニ屬スルモノヲ置キ生徒ヲシテ其ノ長スル所ト嗜好トニ隨ヒ一定ノ時數内ニ於テ隨意ニ二三ノ學科目ヲ選擇シテ學修セシメムトス

學科目ノ内容ニ就キテハ教授要目ヲ改正シ小學校ニ於ケル教科目ノ聯絡ニ一層注意シ努メテ諸學科目教材ノ重複ヲ避ケ特ニ教育者タルノ本分ニ對シテ有效適切ナラシムルヤウ之カ教材ヲ選擇排列セリ次ニ各學科目ノ毎週教授時數ニ就キテハ修身、歴史、地理、法制及經濟ノ如キ精神ノ修養ニ資スヘキ學科目ノ時數ヲ増加シ又博物、物理及化學ノ如キ科學上ノ知識ヲ涵養スヘキ學科目ニ就キテモ相當ニ之カ時數ヲ増加セリ而シテ課程表ノ上ニ於テハ習字、圖畫、手工、音樂ノ如キ技能ノ時數ヲ減少シタルノ觀アレトモ是等ノ學科目ハ本來實習ヲ必要トシ且人々巧拙能不能ノ差多キモノナレハ實習ハ課程表ノ時數外ニ於テ尙之ヲ課スルコトヲ認メ當事者ヲシテ生徒ノ能力ヲ斟酌シテ適宜ニ獎勵セシムルノ餘地ヲ置キタルモノニシテ決シテ技能ノ價值ヲ輕視シタルノ結果ニアラサルナリ

尙學科目ノ要旨、教員ノ定數、入學、退學、學資、卒業後ノ服務、講習科等ノ各條ニ於テ多少ノ改正ヲ施シタルハ皆從來ノ經驗ニ照ラシ時勢ノ變遷ニ顧ミテ師範教育ノ改善ヲ圖ラムトスルノ趣旨ニ外ナラス

要スルニ今回改正ノ趣旨ハ小學校教員ノ德操識見ヲ向上セシメ從來ヨリモ一層優良ナル教育者ヲ養成シ以テ國民教



育ノ振興ヲ期セムトスルニ在リ之ヲ外國ノ制度ニ徴シ又内外學者ノ所論ニ稽フレハ師範教育ノ改善ハ或ハ今回ノ改正ヲ以テ完全ナリト看做スコト能ハサルヘシ然レトモ國家百般ノ施設ハ財政經濟ト相俟ツヘキモノニシテ殊ニ師範教育制度ノ如キハ獨リ國家ノ財政ト關係アルノミナラス地方ノ經濟ニ及ホス影響極メテ大ナルモノアリ是ヲ以テ國家社會ノ實情ニ應シ實行可能ナル範圍ニ於テ及フ限リ師範教育ヲ改善セムコトニ力メ遂ニ今回ノ改正ヲ實行セリ更ニ小學校ニ於ケル現狀ヲ察スルニ教員ノ質ヲ良好ナラシムルト同時ニ其ノ量ヲ増加スルノ必要アリ政府ハ今回ノ改正ヲ實行スルニ際シ第二部ノ學級ヲ増加セムトスルハ之力爲ナリ而シテ之力費用ハ國庫ヨリ補助スルコトトシ努メテ地方負擔ノ増加ヲ避クヘシト雖當事者カ教育上ニ障礙ヲ及ホササル程度ニ於テ節約利用ノ道ヲ講シ成ルヘク多數ノ優良ナル生徒ヲ養成セムコトハ最モ深ク希望スル所ナリ地方長官ハ宜シク前記ノ趣旨ヲ體シテ學校當事者ヲ督勵シ以テ師範教育改善ノ實績ヲ舉ケシムルコトヲ期セラルヘシ

尙ほ師範教育の改善の爲にする道府縣に對する國庫補助と密接の關係ある貨幣鑄造益金の特別會計に關する法律即ち大正十四年三月三十日法律第十四號を以て定められた教育改善及農村振興基金特別會計法の正文は左の通である。

教育改善及農村振興基金特別會計法

- 第一條 教育改善及農村振興基金ヲ置キ其ノ歲入歲出ハ一般ノ會計ト區分シ特別會計ヲ設置ス
- 第二條 造幣局資金ノ内一億三千萬圓ハ之ヲ本基金ニ繰入ルヘシ
- 第三條 本基金ハ教育ノ改善及農村ノ振興ニ必要ナル費途ニ之ヲ使用ス
- 第四條 第二條ノ規定ニ依リ繰入レタル金額ハ本基金ノ元資金トシ之ヲ費消スルコトヲ得ス
- 第五條 本基金ハ國債ヲ以テ之ヲ保有シ又ハ大藏省預金部ニ預入レ其ノ利殖金ハ之ヲ基金ニ編入スヘシ

- 第六條 本基金ヲ使用セムトスルトキハ其ノ金額ヲ一般ノ歲入ニ組入レ一般ノ歲出トシテ拂出スヘシ
  - 第七條 政府ハ毎年本會計ノ歲入歲出豫算ヲ調製シ歲入歲出ノ總豫算ト共ニ之ヲ帝國議會ニ提出スヘシ
  - 第八條 本基金ノ毎年度歲出豫算ニ於ケル支出殘額ハ之ヲ翌年度ニ繰越シ使用スルコトヲ得
- 附則
- 本法ハ大正十四年度ヨリ之ヲ施行ス

大正十四年四月十八日北海道廳、府縣に對する文部省訓令第七號を以て左の如く師範學校教授要目が改正せられた。明治四十三年文部省訓令第十三號師範學校教授要目左ノ通改正ス地方長官ハ各師範學校長ヲシテ本改正教授要目ニ準據シ地方ノ情況ニ適切ナル教授細目ヲ定メシメ以テ各學科目教授ノ内容ヲ充實シ克ク師範教育ノ本旨ヲ貫徹セン

師範學校教授要目

修身	農業
教育	商業
國語及漢文	習字
英語	圖畫
歷史	手工
地理	音樂



第二編 本論

數學

博物

物理及化學

法制及經濟

修身

本科第一部

男生徒ノ部

第一學年

師範學校生徒心得

教育ニ關スル勅語

道德ノ要領

身體

攝生 鍛練

精神

修學 修德

作法

第二學年

五三四

家事

裁縫

哲學

每週一時

每週一時

戊申詔書

道德ノ要領

家生活

家 祖先 孝行 夫婦 友愛 親族

社會生活

協同 公正 寬容 同情 公益 秩序 禮儀 職業

作法

第三學年

每週二時

國民精神作興ニ關スル詔書

道德ノ要領

國家生活

國體 天皇 皇室 忠君愛國 國憲・國法

國際生活

國際親善 國際協力 外國人ニ對スル禮儀・交際

第四學年

每週二時

道德ノ原理

良心 行爲 品性 至善 本務 德 人格

第七章 大正九年世界大戰直後より昭和七年末に至るまで

五三五



社會生活ノ原理

社會ノ成立及組織 社會ノ作用

教師ノ心得

小學校ニ於ケル修身教授法

教授ノ要旨 教材ノ選擇及排列 教授ノ方法 教授用具及教授上必要ナル注意

小學校修身教科書ノ研究

第五學年

國民道德

每週二時

我カ國道德ノ由來

教育ニ關スル勅語發布ノ由來

教育ニ關スル勅語ノ精神

教育ニ關スル勅語ノ意義ヲ明カニシ以テ我カ國民道德ノ特質ヲ悟了セシメ且實踐躬行上ノ信念ヲ確實ナラシムヘシ

現代思想ノ批判

女生徒ノ部

男生徒ノ部ニ準ス

本科第二部

男生徒ノ部

第一學年

本科第一部男生徒ノ部第四學年及第五學年ニ準シテ適宜教授スヘシ

每週二時

女生徒ノ部

修業年限二年ノモノ

第一學年

本科第一部男生徒ノ部第四學年ニ準ス

每週二時

第二學年

本科第一部男生徒ノ部第五學年ニ準ス

每週二時

修業年限一年ノモノ

第一學年

本科第一部男生徒ノ部第四學年及第五學年ニ準シテ適宜教授スヘシ

每週二時

専攻科

每週二時

主要ナル倫理學說

現時ノ倫理問題

國民道德ト倫理學

小學校ニ於ケル修身教授ノ研究

第七章 大正九年世界大戰直後より昭和七年末に至るまで



注意

- 一 修身ノ教授ハ生徒ノ思想年齡ニ適應セシメ努メテ實際ノ生活ニ適切ナラシメンコトヲ要ス
- 二 女生徒ニ對シテハ前ニ掲ケタル道德ノ要領ヲ授クルノ外更ニ女子ニ必要ナル諸德ヲ養フコトニ注意スヘシ
- 三 專攻科ニ於テハ本科ニ於テ教授シタル事項ヲ基礎トシ更ニ一層精深ナル系統的知識ヲ與フルコトニカムヘシ
- 四 作法ヲ教授スルニハ善ク其ノ精神ノ存スル所ヲ知ラシメ應用宜シキヲ得シメンコトヲ要ス但シ其ノ心得ヲ授クルニハ別ニ時間ヲ設ケス道德ノ要領ヲ授クル際便宜併セ課スルモ可ナリ
- 五 教師ノ心得ヲ授クル際ニハ明治十四年文部省達第十九號小學校教員心得ヲ説明スヘシ
- 六 教訓ニ資スヘキ事件ノ偶發シタルトキ又ハ國民ノ記念スヘキ日及忠良賢哲ノ記念日等ニ於テハ適宜教訓スルヲ可トス

教育

本科第一部

男生徒ノ部

第三學年

心理

精神現象 心理研究ノ方法  
 精神現象ノ生理的基礎 意識 注意  
 感覺 知覺 直觀 類化 記憶 想像 思考

每週二時

言語 感情 衝動及本能 意志 品性 個性  
 社會心 作業 能率 疲勞  
 心身ノ發達

第四學年

論理

思考ノ原理 名辭 命題 論式 演繹法 歸納法 探究的方法 統整的方法 誤謬  
 教育ノ理論 教授法及保育法

每週三時

教育ノ意義 教育ノ效果 遺傳ト環境  
 教育ノ目的 小學校教育ノ目的  
 教師ト兒童  
 養護ノ任務 養護ノ方法  
 教授ノ任務 教材ノ選擇及排列 教授ノ方法  
 訓練ノ任務 個性ト訓練 訓練ノ方法  
 教育效果ノ考查  
 學校ト家庭及社會トノ關係 教育ノ種類 學校系統  
 保育ノ任務 保育ノ方法

第五學年

第七章

大正九年世界大戰直後より昭和七年末に至るまで

每週五時

五三九



近世教育史

近世本邦教育ノ概要  
 近世歐米教育ノ概要  
 現今歐米教育ノ情況  
 本邦明治維新以後ノ教育

教育制度 學校管理法 學校衛生

教育制度ノ概要

小學校ノ本旨及種類

小學校ノ設置

小學校ノ教科及編制

小學校ノ設備

就學

小學校ノ職員

小學校ノ費用負擔及授業料

小學校ニ類スル各種學校

幼稚園

小學校ノ管理及監督

設備上ノ衛生 教授上ノ衛生 運動ノ衛生  
 身體虛弱者・精神薄弱者ノ取扱  
 學校醫及學校看護婦 身體検査  
 學校ニ於ケル疾病豫防並治療ニ關スル心得

教育實習

附屬小學校參觀

模範教授ニヨル指導

教授案ノ試作及教授ノ實習

管理・訓練ニ關スル指導及實習

學校事務ノ指導及實習

女生徒ノ部

男生徒ノ部ニ準ス

本科第二部

男生徒ノ部

第一學年

本科第一部男生徒ノ部第三學年第四學年及第五學年ニ準ス

女生徒ノ部

每週八時



修業年限二年ノモノ

五四二

第一學年

本科第一部男生徒ノ部第三學年及第四學年ニ準ス

每週四時

第二學年

本科第一部男生徒ノ部第五學年ニ準ス

每週四時

修業年限一年ノモノ

第一學年

本科第一部男生徒ノ部第三學年第四學年及第五學年ニ準ス

每週七時

專攻科

每週四時

教育理論

現時ニ於ケル主要ナル教育思想

教育ノ方法ニ關スル諸問題

社會教化ニ關スル理論及實際

心理

現代心理學研究ノ趨勢及諸問題

教育教授ニ關スル心性考査ノ理論及實際

注意

一 心理ヲ授クルニハ力メテ之ヲ教育上ノ實際ニ應用シ又適宜實驗ニ依リテ之ヲ説明スヘシ

二 論理ヲ授クルニハ教育上ノ應用ニ注意シ思考ノ練習ニ重キヲ置クヘシ

三 教育ノ理論ヲ授クルニハ倫理・心理・論理等ノ知識ヲ應用シテ教育ノ據ルヘキ原理ヲ明カニシ且常ニ小學校教育ノ實際ニ通センコトニ力ムヘシ

四 教授法及保育法ヲ授クルニハ兒童心身ノ發育ノ理ニ基キ教育ノ理論ト實際ト生活トニ顧ミテ適切ナル方法ヲ明カニスヘシ

五 近世教育史ヲ授クルニハ常ニ其ノ現時ニ及ホシタル影響ニ著眼シ殊ニ小學校ノ變遷ニ重キヲ置クヘシ又教育ノ思想及制度ノ變遷並其ノ相互ノ關係ヲ知ラシメ主ナル教育家ノ傳記及學說ヲ其ノ時勢ト關聯シテ授ケ更ニ其ノ教育上ニ及ホシタル影響ヲ明カニスルヲ要ス

六 教育制度・學校管理法及學校衛生ヲ授クルニハ現行ノ法令規則ノ要旨ヲ明カニシ總テ小學校教育ノ實際ノ事項ニ就キテ之ヲ説明センコトヲ要ス而シテ些細ナル實際上ノ事項ニ至リテハ教育實習ノ際教導指示スヘシ

國語及漢文

國語讀本ノ文體ハ普通文・書牘文・韻文ノ三種トシ更ニ之ヲ文語體・口語體ノ二ニ分ツ

普通文ハ現代文ヲ主トシ近世文・近古文ヲ交フ尙中古文・上古文中ヨリ適宜選擇スルコトヲ得  
書牘文ハ平易暢達ニシテ日常書牘文ノ模範トスヘキモノタルヘシ  
韻文ハ格調高雅ナルモノタルヘシ

漢文讀本ノ文體ハ散文・韻文トス但シ普通ノ散文ヲ主トシ平易正雅ナル韻文ヲ加フヘシ

第七章 大正九年世界大戰直後より昭和七年末に至るまで

五四三



國語讀本ノ材料ハ凡ソ左ノ標準ニ適合スルモノタルヘシ但シ女子ノタメニハ家政其ノ他女子ニ適切ナル事項ヲ加フヘシ

思想健全ニシテ道義的觀念ヲ涵養スルニ足ルモノ

文學的趣味ヲ有シ生徒ノ思想ニ適シ其ノ心情ヲ高雅ナラシムルモノ

時勢ニ適シ國民日常ノ生活ニ裨益アリ常識ヲ養成スルニ足ルモノ

我カ國體及民族ノ美風等ヲ記述シ國民性ヲ涵養スルニ足ルモノ

欽仰スヘキ教育家・學者其ノ他賢哲ノ傳記ニシテ修養ニ裨益アルモノ

漢文讀本ノ材料ノ標準ハ凡國語讀本ノ材料ノ標準ニ據ルヘシ

本科第一部

男生徒ノ部

第一學年

國語

每週六時

講讀  
作文  
法  
每週二時

講讀

讀本ハ現代文ヲ主トシ平易ナル近世文ヲ加フ

讀方及解釋 發音ヲ正確明瞭ニシ句讀ヲ正クシ語句文章ノ意義ヲ領得セシメ文意文勢ヲ誦讀ノ上ニ表シ進ミテハ

文章ノ妙所ヲ玩味セシムヘシ

話方 主トシテ讀本若ハ讀本所載ノ事項ニ就キ談話ヲ練習セシム其ノ際發音ニ注意シ方言訛音ヲ矯正センコトニ

カムヘシ

暗誦 適當ナル文ヲ選ヒテ暗誦セシム

書取 讀本若ハ讀本以外ノ語句文章ヲ筆記セシメ假名遣及漢字ノ字畫用法ヲ正確ニシ且迅速ニ筆記スルノ習慣ヲ

養ハシムヘシ

作文

各自ノ思想ヲ各種ノ文體ニテ記述セシムヘシ

各種ノ文體ヲ交互ニ書キ改メシムヘシ

說話ヲ聞カシメ各種ノ文體ニテ記述セシムヘシ

文法

文語・口語ノ文法ノ大要ヲ教授スヘシ

漢文

每週二時

讀本ハ簡易ナル散文ヲ主トシ間々詩歌ヲ採録セルモノタルヘシ

讀方ハ國語ノ法則ニ從ヒ解釋ハ普通ノ口語ヲ用ヒテ之ヲナサシムヘク且講讀ノ際漢文ト國文トノ組織ノ異同ニ注

意セシメ熟語成句ヲ書取ラシメテ文字ノ字畫用法ヲ正確ニ會得セシムヘシ又人口ニ膾炙セル文章詩歌ハ成ルヘク

之ヲ暗誦セシムヘシ

第二學年

國語

每週六時

講讀  
作文  
法  
每週二時

第七章

大正九年世界大戰直後より昭和七年末に至るまで

五四五



講讀

讀本ハ現代文ヲ主トシテ近世文・近古文ヲ加フ

讀方及解釋 話方 暗誦 書取

前學年ニ準ス

作文

前學年ニ準ス

文法

前學年ニ引續キ文語・口語ノ文法ノ大要ヲ授クヘシ

漢文

讀本ハ前學年ノ後ヲ承ケテ程度稍々進ミタル散文・韻文ヲ採録セルモノタルヘシ

讀方及解釋 書取 暗誦

前學年ニ準ス

第三學年

國語

講讀

讀本ハ現代文・近世文・近古文ヲ主トシ中古文ヲ加フ

讀方及解釋 前學年ニ準シ尙文理文脈ヲ正シ文章ノ精神ヲ領得セシムヘシ

每週四時

講讀作文  
法每週二時

講讀

讀本ハ現代文ヲ主トシテ近世文・近古文ヲ加フ

讀方及解釋 話方 暗誦 書取

前學年ニ準ス

作文

前學年ニ準ス

文法

前學年ニ引續キ文語・口語ノ文法ノ大要ヲ授クヘシ

漢文

讀本ハ前學年ノ後ヲ承ケテ程度稍々進ミタル散文・韻文ヲ採録セルモノタルヘシ

讀方及解釋 書取 暗誦

前學年ニ準ス

第三學年

國語

講讀

讀本ハ現代文・近世文・近古文ヲ主トシ中古文ヲ加フ

讀方及解釋 前學年ニ準シ尙文理文脈ヲ正シ文章ノ精神ヲ領得セシムヘシ

每週四時

講讀作文  
法每週二時

書取 隨時之ヲ行フヘシ

暗誦 前學年ニ準ス

作文

自作文ヲ主トスヘシ

文法

講讀ノ際既習ノ事項ニ就キテ練習セシメ且其應用ニ熟セシムヘシ

漢文

讀本ハ前學年ノ後ヲ承ケテ程度ノ更ニ進ミタル散文・韻文ヲ採録セルモノタルヘシ

讀方及解釋 前學年ニ準ス

時々國語ノ簡單ナル章句ヲ漢文ニ譯セシメ措辭用字ノ法ヲ會得セシムヘシ

第四學年

國語

講讀

讀本ハ現代文・近世文・近古文ヲ主トシ中古文・上古文ヲ加フ

讀方及解釋 前學年ニ準シ尙時代的特色、作家ノ個人的特徴等ヲ説明シ我カ國民性ノ神髓ヲ領得セシムヘシ

作文

自作文ヲ主トスヘシ

第七章 大正九年世界大戰直後より昭和七年末に至るまで

每週二時

每週五時

講讀第一學期第二學期每  
週三時第三學期每週一時



文法

前學年ニ準ス

漢文

每週二時

讀本ハ前學年ニ準ス

讀方及解釋

前學年ニ準ス

小學校ニ於ケル國語教授法

第三學期每週三時

教授ノ要旨 教材ノ選擇及排列 教授ノ方法 教授用具及教授上必要ナル注意

小學校國語讀本ノ研究

第五學年

每週五時

國語

講讀作文每週三時

講讀

讀本ハ前學年ニ準ス

讀方及解釋

前學年ニ準ス

作文

前學年ニ準ス

文法

前學年ニ準ス

漢文

每週二時

講讀

讀本ハ前學年ニ準ス但シ我ガ國ノ德教ニ關係アル支那ノ典籍ヲ以テ之ニ代フルモ妨ナシ

讀方及解釋

前學年ニ準ス

女生徒ノ部

讀本ハ女子ニ適切ナル材料ヲ多カラシムヘシ其ノ他男生徒ノ部ニ準ス

本科第二部

男生徒ノ部

第一學年

每週三時

國語及漢文

講讀

作文 文法

本科第一部男生徒ノ部第五學年ニ準ス

小學校ニ於ケル國語教授法

本科第一部男生徒ノ部第四學年ニ準ス

第七章 大正九年世界大戰直後より昭和七年末に至るまで



第二編 本論

女生徒ノ部

五五〇

修業年限二年ノモノ

第一學年

每週五時

國語及漢文

小學校ニ於ケル國語教授法

本科第一部男生徒ノ部第四學年ニ準ス

第二學年

每週五時

國語及漢文

本科第一部男生徒ノ部第五學年ニ準ス

修業年限一年ノモノ

第一學年

每週三時

國語及漢文

講讀 作文 文法

本科第一部男生徒ノ部第五學年ニ準ス

小學校ニ於ケル國語教授法

本科第一部男生徒ノ部第四學年ニ準ス

專攻科

每週四時

國語

講讀

教材ハ現代文ヨリ上古文ニ及フ

教科書ハ全本ヲ用フルヲ可ナリトスレトモ便宜抄本又ハ編纂物ヲ用フルヲ妨ケス

講讀ニ於テハ解釋・鑑賞・批評ノ三態度ヲ取ルヘシ

作文

自作文 少クトモ一箇月一回之ヲ課スヘシ

文法

文法ハ講讀ノ際ニ於テ既得ノ文法ノ知識ヲ整理シ各時代ノ語法ノ特徴ヲ説明シ且其ノ應用ニ習熟セシムヘシ

文學史

文學書ノ解題、文學者ノ傳記、文例等ヲ授ケ國文學ノ史的發展及文學ニ現ハレタル國民思想ノ主流ヲ説述シ且作品・作家ノ評論ヲナスヘシ

漢文

講讀

教材ハ本科ヨリ程度ヲ進メ先秦時代以上ノ文ヲ加フルヲ得

教科書ハ全本ヲ用フルヲ可ナリトスレトモ便宜抄本又ハ編纂物ヲ用フルヲ妨ケス

講讀ニ於テハ作家ノ個人的特徴ヲ示シ且思想ニ關シテハ適切ナル批判ヲ下スヘシ

第七章

大正九年世界大戰直後より昭和七年末に至るまで

五五一



小學校ニ於ケル國語教授ノ研究

注意

- 一 作文ハ成ルヘク多ク之ヲ課スヘシ
- 二 書取ハ成ルヘク多ク之ヲ課シ殊ニ日常ノ用語ヲ十分ニ練習セシムヘシ
- 三 漢字ヲ教授スルニ當リテハ一般普通ニ行ハルル俗字・和字・略字・省畫等ヲ避ケス實用ニ適センコトヲ主トシテ煩瑣ナル考證ニ趨ラサランコトヲ要ス
- 四 文法ハ成ルヘク讀本其ノ他普通ノ實例ニ就キテ授ケ實用ニ遠サカラサランコトヲ要ス
- 五 適當ノ時期ニ於テ字書ノ用法ヲ授ケ其ノ使用ニ慣レシムヘシ

英語

英語ノ各分科ニ於テ授クル事項左ノ如シ

發音 綴字

單音・連音・あくせんと及文字ノ組合セヲ授ク

讀方及譯解

文章ノ聽方・讀方及譯解ヲ授ク

話方及作文

話方ニ於テハ對話・說話ニ依リテ聽方・言方ヲ授ク  
作文ニ於テハ凡左ノ諸例ニ準シ適宜之ヲ課ス

小學校ニ於ケル國語教授ノ研究

注意

- 一 作文ハ成ルヘク多ク之ヲ課スヘシ
- 二 書取ハ成ルヘク多ク之ヲ課シ殊ニ日常ノ用語ヲ十分ニ練習セシムヘシ
- 三 漢字ヲ教授スルニ當リテハ一般普通ニ行ハルル俗字・和字・略字・省畫等ヲ避ケス實用ニ適センコトヲ主トシテ煩瑣ナル考證ニ趨ラサランコトヲ要ス
- 四 文法ハ成ルヘク讀本其ノ他普通ノ實例ニ就キテ授ケ實用ニ遠サカラサランコトヲ要ス
- 五 適當ノ時期ニ於テ字書ノ用法ヲ授ケ其ノ使用ニ慣レシムヘシ

英語

英語ノ各分科ニ於テ授クル事項左ノ如シ

發音 綴字

單音・連音・あくせんと及文字ノ組合セヲ授ク

讀方及譯解

文章ノ聽方・讀方及譯解ヲ授ク

話方及作文

話方ニ於テハ對話・說話ニ依リテ聽方・言方ヲ授ク  
作文ニ於テハ凡左ノ諸例ニ準シ適宜之ヲ課ス

讀方及譯解又ハ話方ニ於テ練習セル事項ヲ應用シテ記述セシムルモノ

國語ヲ英語ニ譯セシムルモノ

記述スヘキ事項ノ梗概ヲ授ケ又ハ使用スヘキ語句ヲ示シテ之ヲ綴ラシムルモノ

課題ヲ與ヘ自由ニ文ヲ綴ラシムルモノ

書取

語句・文章ヲ臨寫セシメ又ハ之ヲ朗讀シテ筆記セシム

習字

書寫文字ノ書方ヲ授ク

文法

品詞論及文章論ノ一斑ヲ授ク

本科第一部

第一學年

每週五時

發音 綴字

初ハ專ラ發音・綴字ヲ授ケ後ニハ他ノ分科ニ關聯シテ之ヲ練習セシムヘシ

讀方及譯解 話方及作文 書取

簡易ナル文章ニ就キテ讀方及譯解ヲ授ケ之ト關聯シテ簡易ナル話方及作文、書取ヲ練習セシメ兼テ便宜文法上ノ事項ヲ知ラシムヘシ

第七章

大正九年世界大戰直後より昭和七年末に至るまで



習字

成ルヘク既習ノ語句文章ニ就キテ之ヲ授クヘシ

第二學年

每週三時

讀方及譯解 話方及作文 書取

前學年ニ準シ稍々進ミタル程度ニ於テ之ヲ授クヘシ

習字

前學年ニ準ス

第三學年

每週三時

讀方及譯解 話方及作文 書取

前學年ニ準シ稍々進ミタル程度ニ於テ讀方及譯解ヲ授ケ之ト關聯シテ話方及作文、書取ヲ練習セシムヘシ

文法

成ルヘク既習ノ材料ニ基キテ文法ノ大要ヲ授クヘシ

第四學年

每週三時

讀方及譯解 話方及作文 書取

前學年ニ準シ稍々進ミタル程度ニ於テ之ヲ授クヘシ

文法

前學年ニ準ス

小學校ニ於ケル英語教授法

第五學年

每週三時

讀方及譯解 話方及作文 書取

前學年ニ準シ更ニ進ミタル程度ニ於テ之ヲ授ケ兼テ文法上ノ練習ヲ爲サシムヘシ

女生徒ノ部

第一學年第二學年及第三學年

每週三時

第四學年及第五學年

每週二時

男生徒ノ部ニ準ス

本科第二部

女生徒ノ部

修業年限二年ノモノ

第一學年

每週二時

本科第一部男生徒ノ部第四學年ニ準ス

第二學年

每週二時

本科第一部男生徒ノ部第五學年ニ準ス

專攻科

每週四時

本科第一部ニテ授クル教材ヨリ更ニ進ミタル程度ニテ讀書力ヲ養フコトヲ主眼トシテ文學・歴史・地理・修身其ノ

第七章

大正九年世界大戰直後より昭和七年末に至るまで



他ノ學科目ニ關スル英語ノ讀方及譯解ヲ授ク

注意

- 一 教材ハ古語、古文、難解ナル語句、應用範圍ノ限ラレタル特別ノ表出等ヲ避クヘシ
- 二 教材ハ生徒ノ容易ニ消化シ得ル程度ニ止メ又例解モ微細ニ馳セサルヤウ注意スヘシ
- 三 生徒ノ學力ニ應ジ明瞭ニ會得セル有用ナル章句ニ就キ時々暗誦ヲ課スヘシ
- 四 發音ハ初期ノ教授ニ於テ特ニ之ヲ注意シ必要アルトキハ舌・齒・唇等ノ位置ヲ説明シ又ハ發音圖ヲ示スヘシ
- 五 讀方及譯解ニ於テハ場合ニ依リ實物・繪畫・動作等ヲ用ヒテ直接ニ其ノ意義ヲ示シ又彼我風俗・習慣等ノ相違ヲ説キテ意義ノ了解ヲ助クヘシ
- 六 適當ノ時期ニ於テ豫習ヲ課シ又ハ辭書ノ用法ヲ授ケ其ノ使用ニ慣レシムヘシ

歴史

本科第一部

男生徒ノ部

第一學年

外國史

每週二時

甲支那ヲ主トシタル東方諸國

上代ノ支那 周

春秋・戰國時代

周代ノ文化 孔子 孟子

秦ノ統一

漢ノ興起 武帝ノ功業

後漢 西域トノ交通 東方諸國トノ關係

漢代ノ文化

上代ノ印度 釋迦牟尼 佛教ノ東漸

三國ノ鼎立 晉ノ統一

胡族ノ侵入 東晉 南北朝ノ對立

南北朝時代ノ文化

隋ノ統一

唐ノ創業 外國經略

玄宗ノ中興 安史ノ亂 唐ノ衰亡

唐代ノ制度及文化

五代・遼ノ興起 渤海ノ興亡

宋ノ統一 遼・金トノ交渉 南宋

宋代ノ文化

蒙古ノ勃興

第七章 大正九年世界大戰直後より昭和七年末に至るまで



- 元ノ世祖 宋ノ滅亡 高麗・日本及南海諸國トノ關係
- 東西ノ交通
- 元ノ衰亡 帖木兒
- 明ノ興起
- 外寇 朝鮮及日本トノ關係 明ノ衰運 滿洲人ノ勃興
- 元・明時代ノ文化
- 西洋人ノ東洋經略 通商及布教 西洋學術ノ傳來
- 清ノ統一
- 清朝ノ極盛 清・露ノ交渉 塞外ノ經略
- 清代ノ文化
- 莫臥兒帝國 英人ノ印度經略
- 阿片戰爭
- 長髮族ノ亂 英・佛聯合軍ノ侵入
- 露國ノ滿洲經略及中央亞細亞侵略 伊犁事件
- 佛國ノ印度支那經略 清佛戰爭
- 朝鮮ニ於ケル日・清ノ關係
- 清國ニ對スル歐洲諸強國ノ壓迫

- 日・露戰役 日本ノ韓國併合
- 清ノ滅亡 支那共和國ノ建設
- 共和國建設後ノ支那
- 日支交渉
- 東洋ノ現勢ト我カ國ノ地位

第二學年

外國史

每週二時

乙西洋諸國

- 太古ノ東方諸國
- 希臘民族ノ興起 希臘諸國ノ爭霸 希臘ノ文化
- アレキサンドル大王ノ偉業
- 羅馬ノ建國 其ノ共和政治 地中海沿岸ノ平定
- 羅馬ノ内爭 帝政ノ成立 羅馬帝國ノ東西分立
- 羅馬ノ文化 基督教
- ゲルマニヤ諸民族ノ大移動 西羅馬帝國ノ滅亡
- 東羅馬帝國ノ盛衰 サラセンノ勃興 回教及其ノ文化
- フランク王國ト其ノ分裂 ノルマンノ活動

第七章 大正九年世界大戰直後より昭和七年末に至るまで

五五九



- 神聖羅馬帝國ノ成立 羅馬法王權ノ隆盛
- 中古西歐ノ社會 教會 封建制度
- 十字軍ト其ノ影響 都市ノ興起
- 蒙古ノ侵入 土耳其ノ勃興 東羅馬帝國ノ滅亡
- 西歐ニ於ケル中央集權的諸國ノ成立
- 文藝ノ復興及諸發明
- 地理上ノ發見 西班牙・葡萄牙ノ興隆
- 宗教改革及其ノ反動
- 宗教及政治上ノ紛争 和蘭ノ獨立
- 三十年戰役及其ノ影響
- 佛蘭西ノ強大ト其ノ文化
- 英吉利ノ革命 同國民權ノ發達
- 露西亞ノ勃興 シベリヤ拓殖
- 普魯西ノ興起 波蘭ノ分割
- 西歐諸國ノ植民事業 和蘭ノ植民 英・佛二國ノ植民政策ノ衝突
- 北米合衆國ノ獨立
- 第十七・八世紀ニ於ケル歐洲諸國ノ社會思想及文化

佛蘭西革命

- ナポレオン一世ノ大業
- ウィーン會議 神聖同盟
- 亞米利加諸國及希臘ノ獨立 モンロー主義
- 七月革命及其ノ影響
- 産業革命 英吉利政界ノ革新
- 二月革命ト其ノ後ノ佛蘭西

第三學年

外國史

乙西洋諸國ノ續

- 伊太利ノ統一
- 普・墺戰役 獨・佛戰役 獨逸帝國ノ統一
- 北米合衆國ノ内情 南北戰爭 戰後ノ發展
- クリミア戰役 露・土戰役 伯林會議
- 歐米列強ノ亞細亞・阿弗利加・太平洋ニ於ケル經營
- 十九世紀末ニ於ケル歐洲諸國ノ形勢
- 十九世紀文明ノ進歩

第七章 大正九年世界大戰直後より昭和七年末に至るまで

第一學期每週二時



世界大戰 大戰ニ於ケル日本ノ活動  
 大戰後世界ノ情勢 國際聯盟 華盛頓會議  
 現今世界ノ大勢ト日本

國史

第二學期及第三學期每週二時

建國ノ體制

國內ノ統一 上古ノ社會・政治組織

朝鮮半島トノ關係 文化ノ進歩

支那トノ交通 政治ノ改新

奈良時代ノ政治・文化

平安時代初期ノ趨勢

攝關政治 莊園

平安時代ノ文化

院政 武士ノ勃興 源平二氏ノ興亡

第四學年

每週二時

國史

鎌倉幕府ノ成立 北條氏ノ執權政治

武士道

支那トノ交通 元寇

鎌倉時代ノ文化

朝廷ト幕府トノ關係 建武ノ中興

室町幕府

支那及朝鮮トノ交通

東山時代ノ文化

戰國時代ノ世相

西洋人ノ渡來 國民ノ對外活動

海内ノ統一 美術・技藝

江戸幕府ノ成立 社會組織

海外諸國トノ交通

鎖國

學問ノ復興

産業ノ發達

幕府政治ノ弛張 諸藩ノ治

尊王思想ノ發達 國學ノ勃興

外交ノ紛糾 洋學ノ研究



大政奉還

小學校ニ於ケル歴史教授法 第三學期(國史ヲ終リタル後ニ授ク)  
教授ノ要旨 教材ノ選擇及排列 教授ノ方法 教授用具及教授上必要ナル注意  
小學校歴史教科書ノ研究

第五學年

每週一時

國史

明治維新

明治初年ノ外交

西洋文化ノ採用 社會ノ變化

立憲政體ノ確立

條約改正ト法典制定

經濟及文化ノ發達

東洋ノ平和ニ對スル我カ國策

國運ノ進歩

歐洲ノ大戰ト我カ國

國民ノ覺悟

女生徒ノ部

男生徒ノ部ニ準ス

但シ成ルヘク多ク各時代ニ於ケル女子ニ關スル教材ヲ配當スヘシ

本科第二部

男生徒ノ部

第一學年

每週一時

本邦現代史及小學校ニ於ケル歴史教授法

本科第一部ニ準ス

女生徒ノ部

修業年限二年ノモノ

第一學年

每週一時

世界歴史ノ補習

第二學年

每週一時

本科第二部男生徒ノ部第一學年ニ準ス

修業年限一年ノモノ

第一學年

每週一時

本科第二部男生徒ノ部第一學年ニ準ス

專攻科

每週二時

第七章 大正九年世界大戰直後より昭和七年末に至るまで

五六五



- 國體ト政體
- 外交ノ沿革
- 敬神思想ト宗教ノ變遷
- 教育ノ發達
- 美術・工藝ノ發達
- 産業ノ發達
- 國民生活ノ變遷
- 國史ニ現ハレタル女性

小學校ニ於ケル歴史教授ノ研究

注意

- 一 歴史ヲ授クルニハ國家ノ盛衰社會ノ變遷ニ關スル明晰ナル概念ヲ得シメ特ニ我カ國體ノ特異ナル所以及大義名分ヲ明カナラシムルコトヲ主トシ徒ニ細密ナル事實ノ穿鑿ニ流レテ其ノ要領ヲ失ハサラントコトヲ要ス
- 二 教授ノ内容ハ概ネ古代ヨリ近代ニ進ムニ從ヒテ漸次之ヲ詳ニシ過去ノ史實ニ依リテ現在ヲ證明シ尙將來ノ確信ヲ與フルコトニ力ムヘシ
- 三 歴史ノ教授ハ煩瑣ニ陥ラサル限リ成ルヘク各時代ノ政治・經濟・文化ノ大要ニ互リ特ニ教育・道德ノ事項ニ留意セシムヘシ

- 四 偉人ノ事蹟ヲ授クルニ當リテハ其ノ性行・事業及當時ノ事情ヲ詳ニシ生徒ノ徳性涵養ニ資センコトヲ力ムヘシ
- 五 有名ナル詩歌・文章・傳記等ニシテ歴史上ノ事蹟ノ説明ニ資スヘキモノハ便宜之ヲ利用シテ興味ヲ助クヘシ
- 六 國史ノ事項中特ニ學校所在地方ニ關係多キモノハ稍々詳ニ之ヲ教授スヘシ
- 七 外國史ハ特ニ我カ國ニ關係アル事項ニ留意シテ之ヲ授ケ又我カ國體ト背馳スルカ如キ事歴ニ就テハ彼我國情ノ異ナル所以ヲ明ニシ生徒ヲシテ誤解ヲ生セシメサラントコトヲ期スヘシ
- 八 國史ト外國史ト交渉アル事蹟ハ各史ノ立場ヨリ之ヲ説明シテ成ルヘク重複ヲ避クヘシ
- 九 教授ノ際ハ對照年表ヲ用ヒテ紀年ノ聯絡ヲ知ラシメ又成ルヘク地圖・圖畫・實物・標本等ヲ示シテ生徒ノ知識ヲ確實ナラシムヘシ

地理

本科第一部

男生徒ノ部

第一學年

每週二時

日本地理

帝國ノ位置 境域

地方誌

小學校トノ聯絡ヲ圖リ地方又ハ府縣ニ就キ重要ナル事項ヲ選擇シテ補習セシムヘシ

總括

第七章 大正九年世界大戰直後より昭和七年末に至るまで



地勢 氣候 天產物 産業 住民 政治 教育 宗教 交通

第二學年

每週二時

外國地理

亞細亞洲

總說

位置・境域・地勢・氣候・天產物・産業・住民・交通等ノ概要ヲ授クヘシ以下之ニ做フ  
各説

各國又ハ各地方ニ就キテ總說ニ於テ列舉シタル事項ノ外政治・教育・宗教・都會・我カ國トノ關係等ノ事項ヲ  
モ授クヘシ但シ國ノ大小、我カ國トノ關係ノ多少等ニ依リ教授事項ノ分量ヲ斟酌スヘシ以下之ニ做フ  
支那

印度支那半島

馬來諸島

印度

イラン地方

亞細亞土耳其

亞刺比亞

中央亞細亞

コーカシヤ

西比利亞

歐羅巴洲

總說

各説

露西亞

芬蘭

バルト海沿岸諸國

スカンデナヴィヤ半島

丁抹

波蘭

獨逸

和蘭

白耳義

瑞西

チエツコスロヴァキヤ

奧地利

第七章 大正九年世界大戰直後より昭和七年末に至るまで



洪牙利

英吉利

佛蘭西

イペリヤ半島

伊太利

バルカン半島

阿弗利加洲

總説

各説

北亞米利加洲

總説

各説

加奈陀

亞米利加合衆國

墨西哥

中央亞米利加

西印度諸島

南亞米利加洲

總説

各説

西北部諸國

北部諸國

ブラジル

南部諸國

大洋洲

總説

各説

兩極地方

第三學年

自然地理概説

星界地理

宇宙及太陽系 地球 地球ノ運動 月 曆 地圖

陸界地理

陸地ノ現狀 陸地ノ變動 地形ノ成因

第七章 大正九年世界大戰直後より昭和七年末に至るまで



水界地理

海洋 海水ノ性質及運動

氣界地理

大氣 氣溫 氣壓及氣流 降水 天氣及氣候

生物地理

第四學年

人文地理概説

每週一時

世界ノ住民

自然ト人類

人類ノ住所

産業ト産物

交通

國家

世界列強ノ現勢

小學校ニ於ケル地理教授法

教授ノ要旨 教材ノ選擇及排列 教授ノ方法 教授用具及教授上必要ナル注意

小學校地理教科書及附圖ノ研究

第五學年

每週一時

日本國勢地理

國土ノ自然

住民

經濟

政治

宗教

教育

衛生

日本ノ世界的地位

女生徒ノ部

男生徒ノ部ニ準ス

本科第二部

男生徒ノ部

第一學年

每週一時

日本國勢地理

小學校ニ於ケル地理教授法

第七章

大正九年世界大戰直後より昭和七年末に至るまで

五七三



第二編 本論

本科第一部第五學年ニ準ス

五七四

女生徒ノ部

修業年限二年ノモノ

第一學年

每週一時

外國地理ノ補習

本科第一部男生徒ノ部ニ準シテ補習ス

小學校ニ於ケル地理教授法

本科第一部男生徒ノ部第四學年ニ準ス

第二學年

每週一時

日本國勢地理

本科第一部男生徒ノ部ニ準ス

修業年限一年ノモノ

第一學年

每週一時

本科第一部男生徒ノ部第四學年及第五學年ニ準ス

專攻科

每週二時

日本ヲ中心トシタル經濟地理

土地 氣候 住民

農業

養蠶業

牧畜業

林業

鑛業

水産業

工業

商業

世界ニ於ケル日本ノ地位

注意

一 地理ヲ授クルニハ成ルヘク事實ノ比較聯合ニ力メ特ニ外國地理ヲ授クルニ當リテハ我カ國ノ狀勢ヲ以テ比較ノ基礎トナスヘシ

二 學校所在府縣及之ト密接ノ關係アル地方ノ地理ハ特ニ詳細ニ教授スヘシ

三 世界地理ニ於テ政治ヲ授クルニ當リテハ必要ニ應シ其ノ沿革ノ大要ヲ説クヘシ

四 實地ニ觀察シ得ヘキ事項ハ成ルヘク直接ニ觀察セシメ其ノ他ハ常ニ地圖・標本・寫眞・繪畫・表等ニ依リ又之ヲ幻燈ニ映寫シテ生徒ノ知識ヲ確實ナラシムヘシ

五 地圖ヲ使用スルニ當リテハ其ノ讀ミ方ニ注意セシメ又便宜ノ時間ニ於テ地圖ノ描寫及見取圖製作ノ實習ヲナサ

第七章 大正九年世界大戰直後より昭和七年末に至るまで

五七五



- 六 自然地理ハ特ニ我カ國ニ關スル事項ニ留意シテ之ヲ授クヘシ
- 七 人文地理ハ時々ノ異動ニ留意シテ之ヲ授クヘシ
- 八 地理ヲ授クルニハ必要ニ應ジテ歴史等トノ關係ニ留意スヘシ
- 九 外國ノ地名中普通漢字ヲ用フルモノハ便宜其ノ漢字ヲモ知ラシムヘシ

數學

本科第一部

男生徒ノ部

第一學年

算術及代數

整數 小數 分數

比例 步合算

負數

整式

加法・減法・乘法・除法

一次方程式

一元方程式 聯立方程式 一次式ノ變化及其ノぐらふ

每週四時

幾何

簡易ナル平面圖形ノ作圖

簡易ナル立體模型ノ作製

長サ・角・面積・體積ノ測定

直線

角 平行線

直線形

三角形 平行四邊形

第二學年

算術及代數

每週四時

分數式

因數 最大公約數 最小公倍數 約分・通分 加法・減法・乘法・除法 分數方程式

二次方程式

平方根 無理數 一元方程式 分數方程式 無理方程式 聯立方程式 二次式ノ變化及其ノぐらふ

幾何

圓

弧・弦 中心角・圓周角 弓形 切線 二ツノ圓 內接形・外切形

第七章 大正九年世界大戰直後より昭和七年末に至るまで

五七七



軌跡  
作圖題

第三學年

算術及代數

每週四時

比例

比 比例 互ニ比例スル量及其ノぐらふ 互ニ反比例スル量及其ノぐらふ

級數

等差級數 等比級數

對數

歩合算

歩合 利息 年金

面積

幾何

比例

比例線 相似形

圓ノ周及面積

三角函數 三角形ノ解法

簡易ナル測量

第四學年

每週三時

代數

順列 組合

二項定理

確率

幾何

平面及直線

平面ト直線 二ツノ平面 二面角 立體角

多面體

角嚮 角錐

曲面體

圓嚮 圓錐 球

算術

應用問題各種ノ解法 問題構成法

日用諸算

珠算ノ練習

第七章 大正九年世界大戰直後より昭和七年末に至るまで



小學校ニ於ケル算術教授法

教授ノ要旨 教材ノ選擇及排列 教授ノ方法 教授用具及教授上必要ナル注意  
小學校算術教科書ノ研究

第五學年

總括及補充

每週三時

數卜量卜ノ關係

數 代數式

方程式 不等式

函數及其ノぐらふ

極大極小

最大公約數ヲ求ムル一般ノ方法

開平 開立

投影畫及透視畫ノ理論

圓錐曲線 橢圓體

女生徒ノ部

第一學年及第二學年

第三學年第四學年及第五學年

每週四時

每週三時

男生徒ノ部ニ準ス

本科第二部

男生徒ノ部

第一學年

算術

每週二時

應用問題各種ノ解法 問題構成法

日用諸算

珠算ノ練習

小學校ニ於ケル算術教授法

本科第一部ニ準ス

女生徒ノ部

修業年限二年ノモノ

第一學年

算術及代數

每週四時

整數 小數 分數

整式

分數式

第七章 大正九年世界大戰直後より昭和七年末に至るまで



第二編 本論

方程式

比例

級數

幾何

角 平行線

直線形

圓

面積

比例

軌跡

作圖題

第二學年

算術・代數及幾何

每週三時

對數

步合算

函數及其ノぐらふ

平面及直線

五八二

多面體

曲面體

三角函數 三角形ノ解法

簡易ナル測量

應用問題各種ノ解法 問題構成法

日用諸算

珠算ノ練習

小學校ニ於ケル算術教授法

本科第一部ニ準ス

修業年限一年ノモノ

第一學年

算術・代數及幾何

每週三時

修業年限二年ノモノニ準ス

小學校ニ於ケル算術教授法

本科第一部ニ準ス

專攻科

代數及幾何

每週四時

第七章

大正九年世界大戰直後より昭和七年末に至るまで

五八三



順列 組合 確率 級數 對數 方程式論  
軌跡 作圖題

三角法

三角函數 三角方程式 球面三角形

解析幾何大意

微積分大意

小學校ニ於ケル數學教授ノ研究

注意

- 一 本要目ハ教授上主トシテ準據スヘキ教授事項ヲ舉ケタルモノナリ其ノ選擇排列ニ就キテハ適宜斟酌スルモ妨ナシ
- 二 數學ノ各分科ハ常ニ相互ノ聯絡ヲ圖リ彼此相融通シテ教授スヘシ
- 三 數ノ計算ハ各學年ヲ通シテ其ノ練習ニ力ヲ注キ尙概算及近似値ノ計算ニ習熟セシメ又計算尺複利表對數表等ノ使用ニモ慣レシムヘシ
- 四 軌跡・作圖題及面積ハ本要目ニ掲ケタル學年以外ニ於テモ適宜之ヲ授クヘシ

博物

本科第一部

男生徒ノ部

第一學年及第二學年

每週二時

植物

凡八十時

植物ノ教授ハ觀察實驗ニ基キ適宜左ノ事項ヲ授クヘシ  
形態

植物體ノ主要ナル器官 其ノ種々ナル變形

分類

顯花植物 被子植物・裸子植物及其ノ主要ナル科ノ性質・適例

隱花植物 羊齒植物・蘚苔植物・菌藻植物ノ性質・適例

醱酵・腐敗・傳染病ノ原因タル植物ノ大要

學校所在地方ノ普通植物ノ分類

解剖

細胞 組織 葉・莖及根ノ構造

生理

養分 吸收 同化 蒸散 呼吸 成長 運動 刺戟感應

生殖

生態

植物ノ生活ト外界トノ關係及其ノ植物ノ形態・生理・分布上ニ於ケル影響

第七章 大正九年世界大戰直後より昭和七年末に至るまで



分布

地理的分布 生態的分布 學校所在地方ニ於ケル分布

應用

主要ナル食用・嗜好料・藥用・建築用・工業用・觀賞用ニ供スル植物 肥料及飼料ニ用フル植物 有害ナル植物  
實驗及實習セシムヘキ事項左ノ如シ

檢索

解剖ニ關スル實驗

生理ニ關スル實驗

栽培

採集

標本ノ調製法及保存法

説明圖及模型ノ製作

動物

動物ノ教授ハ觀察實驗ニ基キ適宜左ノ事項ヲ授クヘシ  
分類

脊椎動物

哺乳類 鳥類 爬蟲類 兩棲類 魚類

附

頭索類 被囊類

節足動物

昆蟲類 蜘蛛類 多足類 甲殼類

軟體動物

頭足類 腹足類 斧足類

蠕形動物

環蟲類 圓蟲類 扁蟲類

棘皮動物

海膽類 海星類 沙嚙類

腔腸動物

珊瑚類 水母類

海綿動物

原始動物

形態及解剖

各部類ノ外形・骨格・筋肉・内臟

生理

第七章 大正九年世界大戰直後より昭和七年末に至るまで



第二編 本論

消化 循環 呼吸 排泄 運動 神經作用 生殖 發生 變態 習性

五八八

習性ノ中其ノ構造トノ關係ノ顯著ナルモノ

自然現象トシテ趣味アルモノ 人生ニ密接ノ關係アルモノ等

寄生、共生、害敵ニ對スル保護等

分布

動物ノ傳播 地理上ノ分布

應用

食料・衣料・肥料・藥用・染料・工藝用・裝飾用・賞翫ニ供スル動物 家畜 家禽 有害ナル動物

寄生動物ニ對スル注意 病毒媒介動物ニ對スル注意

實驗又ハ實習セシムヘキ事項左ノ如シ

形態・解剖・發生ニ關スル實驗

採集

飼育

標本ノ調製法及保存法

説明圖及模型ノ製作

第三學年

每週二時

第四學年

生理及衛生

每週一時

凡五十時

人體ノ構造

骨骼

骨ノ構造・連接・作用・發育

筋肉

筋肉ノ種類・構造・作用・發育

消化器

飲食物 消化器及其ノ作用

循環器

血液及淋巴 循環器及其ノ作用 血管腺及內分泌

呼吸器

呼吸器及其ノ作用 發聲器

泌尿器

泌尿器及其ノ作用 尿

皮膚

皮膚ノ構造・作用 毛髮 爪

第七章 大正九年世界大戰直後より昭和七年末に至るまで

五八九